

俺、ツインテールになります。5
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。 5

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。5
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束総二
桜川 尊
神堂慧理那
津辺愛香
トゥアール



目次

俺、ツインテールになります。5

水沢夢
［イラスト］春日歩

人物紹介

みつかそうじ
観束総二

主人公。
ツインテールを愛する高校一年生。
テイルレッドに変身。

トゥアール

異世界から来た美少女。

つべあいか
津辺愛香

総二の幼馴染。
テイルブルーに変身。

しんどうえりな
神堂慧理那

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。

さくらがわ　みこと
桜川 尊

神堂家のメイド兼
ボディーガード。

ダークグラスパー

眼鏡を愛する
アルティメギル首領直属戦士。

ロロリー

異世界のツインテールの戦士。

プロローグ　ツインテール・プリンセス。

　平行世界。
　人智を超えた尺度で存在する、無限に等しき無数の世界。
　それは決して互いを認知することなくその中で数多(あまた)の命が紡がれ、歴史が完結するはずだった。
　人々が、異世界という名で空想する存在そのものである。
　だが、人間の心から生まれた未知の力・属性力(エレメーラ)がその均衡を崩し、異世界同士の不可侵という定められし調和(ルール)に背いた。
　属性力(エレメーラ)から生まれた生命体・エレメリアンはアルティメギルという組織として旗を揚げ、渡れるはずのない異世界を渡り、人々から属性力(エレメーラ)を奪う侵略を開始した。
　彼らの脅威から世界を守るため、最強の属性力(エレメーラ)であるツインテール属性を力の源として戦う戦士が生まれる。
　今この瞬間も、異世界に無数に散らばったアルティメギルの部隊と、その世界のツインテールの戦士との戦いが続いているのだ。
　だが、その戦いすらも、アルティメギルにとって効率のよい作戦の一環であり、手の平で踊らされているだけであることを知るツインテールの戦士は、ほとんどいない。
　アルティメギルが、故意に技術を流出させ、自分たちに対抗できる存在を一人だけ「造り上げている」という秘密を。

　とある世界──背後に巨大な城を望む、草木萌える幻想的なまでに穏やかな場所。
　ここでも、一人の年端(としは)もいかぬ少女が、異形の怪物と戦いを繰り広げていた。

　大きなリボンに彩られた、ふわっと柔らかそうなツインテール。

　ピンクを基調とし、白と黒のラインと大量のフリルがあしらわれた、カラフルなドレス。

　手には、愛らしくデコレーションされたピンクのステッキ。

　ここは、城下街から程離れた広大な草原。

　そこで可か憐れんに舞う少女は、まさしく妖精だった。

　桃色の光条が空にアーチを描く。

　少女は、烈はげしくも可憐な戦いの末、ついに怪物──エレメリアンを撃破した。

　戦いを見守っていたギャラリーから、割れんばかりの歓声が巻き起こる。

「姫様ー！」

「姫様万歳ーっ!!」

　人々の声援を受け、少女は天使のような微笑ほほえみを返した。

　侵略という緊迫感とは無縁の、アイドルのステージショーのような騒ぎだ。

「みんなー、ロロリーのこと好きー？」

　好きでーす、と喚声が巻き起こる。

　少女は、自分を応援してくれる愛すべき人々を満遍なく視界に捉えていった。

　老若男女問わず多くの人がツインテールにしている。

　女神の加護を賜たまわった、敬けい虔けんな信徒のように。

「戦いがすぐ終わって良かったー！　今日は予定通り、お城でロロリーのラジオの公開録音だよ！」

　少女の言葉に、民衆の反応は様々だ。

　それもそのはず。ほんの数十分の公開録音に、先行抽選は申し込み殺到で倍率九〇〇倍。

一般申し込みは、開始一時間前ですらサーバーを何重にも増強したページに繋つながらなくなり、僅わずか一分で埋まる有様。

しかも誰だれもが自ら見に行きたい一心での申し込みのため、オークションに流れることもなく、スーパープラチナチケットと化しているのだ。

ツインテールの戦士である少女は、紛れもなく世界中の人々にとって一番の有名人。

アルティメギルの作戦の骨子からすれば、今、この状態こそ、順調すぎるほど順調に作戦が侵攻している段階だった。

侵略者から自分たちを守るツインテールの戦士に憧あこがれ、ツインテールを愛し、ツインテール属性が広く世界に芽吹くこと。

それこそが、アルティメギルの真の目的なのだから。

しかしこの日、少女の世界へ侵攻していたアルティメギルの一部隊は、作戦半ばにして完全撤退した。

それはこの世界への侵略価値が低いと見なされ、以後の増援もなくなったことを意味する。

一人で戦い続けた少女の戦いは、ようやく終わりを迎えた。

この世界に、平和が訪れたのだ。

訪れた——はずだった。

第一章　ツインテール部の夏休み。

　全校生徒の集まった体育館に、清澄な声が響く。

　本日は一学期の終業式ということで、式の締めに生徒会長の慧え理り那なが登壇しスピーチしているのだが……声だけでなく彼女のツインテールも、いつもより元気に弾んで見える。

　慧理那の夏休みへの注意と勧奨に全校生徒が聞き入る中、俺は感慨に耽ふけっていた。

　随分と長い時間が経たった気がするけど、まだ一学期だけ。

　ほんの四か月足らずが過ぎただけなんだな。

　慧理那のツインテールを見ていると、様々な思いが胸に去来する。

　そう──高校生活の初日。

　今と同じように壇上でスピーチをする慧理那の、輝くツインテールに魅せられたあの日から……全てが始まったんだ。

　ツインテールと、世界の平和を守る──俺たちツインテイルズの戦いが。

「それでは皆さん、思い出に残る、よき夏休みを」

　全校生徒の拍手に送られ、慧理那は降壇する。

　陽ようげつ月学園高等部、一学期の終業式が終わった。

　体育館から教室への道すがら、生徒たちの間では、夏休みの予定の話題が花盛りだ。

　賑にぎやかな生徒たちに囲まれると……どうしても、数日前の事件を思い出してしまう。

俺は数日前、エレメリアンとの戦いで──結果的には、自分自身で招いたことだったのだが──女の子の身体からだになったまま、戻れなくなってしまった。
ソーラと名乗って学園に通ったものの、テイルレッドと同じぐらい人気になってしまい、学園は大変な騒ぎになった。
そのハプニングの中で、ツインテールの尊さの再確認だけでなく、大変さ、奥深さ……様々なことを学び、俺は大きく成長することができたと思う。
紆う余よ曲きょく折せつあって元に戻れたものの、ソーラがいなくなった直後は、全校総出の大捜索──学園敷地一帯を鉦かね太たい鼓こで探す勢いだったが、それも今は落ち着いた。
もっとも、こうしてみんなの話を聞いていると、愛めでる対象がテイルレッドに戻っただけで、俺にとっては何も変わらない。案の定、夏休みの主な予定はテイルレッド絡みのようだ。
「テイルレッドたんを見つけようツアー、何とか当選したぜ」
「マジかよ⁉　すげー、あれ倍率四〇〇倍以上だったんだろ⁉」
「ああ。今年の夏、野生のテイルレッドたんを発見するまで、俺は家に帰らないつもりだ」
親御さんに捜索願を出される前に、やめておけ……。
「イベントが多すぎて、回りきれねーんだよな～。絞るしかねーか」
「俺はやっぱ一番は、ＴＧＳかなあ」
（※ＴＧＳ＝テイルレッド　がんばれ　祭さい。３ｄａｙｓ開催）
夏休みシーズンで、テイルレッド絡みのイベントが爆発的に増えている。
旅行雑誌の増刊でテイルレッド関係イベントの特集号が発売されているのを見かけたが、辞典のような厚さだった。

たまにはテイルブルーやイエローのイベントがあってもいいのに……と溜ため息いきをつく。

「あ～いかっ。夏休みだよ、しっかりね！　ライバル多いんでしょ!?」

「夏祭りとかで、神社の影に無理矢理連れ込んだりさあ……愛あい香かが！」

後ろを歩く愛香を窺うかがうと、クラスの女子に囲まれてしどろもどろになっていた。

その横でトゥアールが悔しそうにしているのもあわせ、よく見る光景だな。

夏休みかあ。俺は、どうするかな……。

◇

「いや～、明日から夏休みで浮かれちゃったんでしょうね、私今日、うっかりパンツはき忘れてきちゃって……。あ、すみません総そう二じ様、机の下に消しゴム落としちゃいましたあ」

「やめんか変態がああああああああああああああああああああああああああ!!」

一学期最後のツインテール部部室に響く、愛香の咆ほう哮こう。

この部屋が防音仕様でなければ、最終下校チャイムとして機能するのではないかというほど、毎日ほぼ同じぐらいの時間に聞いている気がする。

愛香の踵かかと落おとしが炸さく裂れつした長机は、真っ二つに割れてしまった。

間一髪で飛び退いたトゥアールが、愛香に恨み言をぶつける。

「いやらしい人ですね愛香さんは！　どーせ私の真ま似ねっこして、

踵落としを隠れ蓑みのにパンツを見せようと企んだんでしょう！　ですが一足遅かったですね、今日の私はパンツの先のミラクルトゥアールさんまで見せる気満々です!!」

　……真似っこ？

　それはともかく、何でこの部室の備品の交換サイクルは、こんなに早いんだ。

　愛香は制服のスカートを手で押さえながら、トゥアールに反論する。

「パンツなんて見せてないわよ！　あんたが勝手に見ただけでしょ!!」

　一言目で制裁が来なければどんどん煽ぁぉっていくスタイルを確立してしまったトゥアールはニヤリと笑い、巧みなウィービングを織り交ぜながら愛香に絡んでいく。

「第二次性徴過ぎた女のパンツなんか見ても、嬉ぅれしくないですよぉ。愛ぁぃ香ゕさんだって、一応下半身だけは第二次性徴してますし」

「かっ、下半身とか言うなぁ!!」

　俺は恥ずかしくなり、あさっての方を向いた。女の子同士だからって、二人の会話はいつも遠慮がなさすぎるよなあ……。

　だが、目を逸そらすまでもなく会話はそこでストップし、あとはいつもの展開だった。

「パンツはき忘れても大丈夫なように、全身満まん遍べんなく厚着させてやるわよ!!」

「具ああああああああああああああああ!!」

　上ぅ手まい具合にＶ字になった長机をバンズに再利用し、トゥアールがハンバーガーにされる。

　パンに挟まれるだけの食材の悲哀を端的に表した、物悲しい叫び

と共に。

　終業式では一学期の思い出に浸っていたが、このツインテール部部室で思い出すことといえば、破壊音、愛香の咆ほう哮こう、トゥアールの叫び、と、音声ドラマだけで十二分に再現できるリーズナブルなメモリーズだけだった。

「おっ、やってるな」

　閉店間際の飲み屋に顔を出した常連客のようなノリで、桜さくら川がわ先生が部室にやってきた。

　たしかに、いつも通り殴やってるけど。

「お待たせしましたわ！」

　生徒会の仕事があっただろうに、少しも疲れを見せず、慧え理り那なも入ってくる。

　長机が一脚破壊されているのを見ても気にしないあたり、すっかりツインテール部にも染まったようだ。

　残ったもう一脚の長机に椅い子すを再配置し、全員で席に着く。

　終業式らしく、さっそく慧理那が夏休みの予定を俺に聞いてきた。

「生徒会は、夏休みは登校日に合わせて一度あるだけですが、ツインテール部の夏休みの予定は何かありますの？」

「予定かあ。主立った活動は、アルティメギル次第だからなあ。でも、一応決めておこうか」

　書類上部長になっている俺にとって、長期休校中の活動予定を決めるのは大事な仕事だ。

「一応ではありませんわ！　大事なことですわ!!」

「お、おう」

　俺は慧理那の迫力に気け圧おされた。すごいやる気だ。

　ツインテール部は、休みでも土曜日の午前は集まることになって

いるが、それも個々の予定でまちまちだ。
　さて、どうしたもんかな。
「最近アルティメギルの奴やつらあまり来なくなったけど、そろそろ全滅したかしら？」
　全エレメリアンの血祭りを目もく論ろむ愛香が、しれっと言う。
「いやー、さすがにもうパターンも知れてきただろ。あいつらがちょっとおとなしくなるのは、次の部隊の補充までの小休止だ」
　相変わらず何食わぬ顔でアイドル活動を続けている善いい沙すな闇あん子こを見るだに、諦あきらめて撤退、ってのも当然まだまだないだろう。
　……でもそういえば善沙闇子も、一昨日おとといくらいから生放送番組では見かけないな。
「補充のためかどうかも怪しいですね。この前倒したアラクネギルディ、自分で部隊の副官だって名乗ってました。つまり……」
　トゥアールの疑念に、愛あい香かが頷うなずく。
「少なくとも、隊長がまだ残ってんのよね。あの昆虫軍団」
　慧え理り那なも同意した。
「副官であの強さ……大将とは壮絶な戦いになりそうですわね」
　確かにあれより強い相手というのはあまり想像したくないが……こんな話題ばかりではみんな気が滅入ってしまうだろう。
　ちょっとわざとらしいかもしれないが、俺は話題を変えることにした。
「頻度が減ったなら減ったで助かるな。それじゃ、夏休みのうちに色々作戦なり対策なり立てておくか。何日かに一回、部室に集まって」
「わたくしは、毎日でも構いませんわ！」
　慧理那が元気よく手を挙げて賛同し、さらに付け加えた。

「よければ……特訓の合宿とか、いかがでしょうか？」
「特訓!?」
　戸惑う俺を余(よ)所(そ)に、桜(さくら)川(がわ)先生がホワイトボードを全員が見やすい位置まで押してきた。
　文化祭の出し物を募るように、箇条書きで今の案が記される。
「一応ここ、文化部扱いでしょ？　運動部じゃないんだし、合宿までしなくても……」
　愛香は、合宿については否定的なようだ。トゥアールが妙な説得を始める。
「何言ってんですか愛香さん。文化部だって、合宿は願ってもないイベントですよ。外泊に厳しい親御さんも、学校行事となれば警戒しないじゃないですか。労せずホテルに連れ込めるようなものなんですよ？」
　使い終わったさっきの長机を再び手にし、トゥアールににじり寄る愛香。
「わたくし、また観(み)束(つか)君と特訓したいですわ!!」
「う、うん。いいよ」
　慧理那にせがまれ、思わず怯(ひる)んでしまう。
　また、脱ぎ散らかしながら周囲をクレーターだらけにするのだろうか。
「強化合宿か……。確かに必要かもな」
「どうして？」
　狂暴なアリゲーターの顎(あぎと)と化した長机で、ヌーのようにトゥアールを丸(まる)呑(の)みにし終えた愛(あい)香(か)が、俺の提案に疑問を挟む。
「心身ともに鍛えなきゃ、って思ってさ。愛香たちだって色々思い当たることはあるだろう？　ここ最近」
　俺はツインテールに夢中になると、周りが見えなくなるし。

　愛香とトゥアールはご覧の通り。

　慧ぇ理り那なは通学途中、散歩している犬の飼い主と俺とを交互に見る目が危ない、などなど。

「うーむ、確かに。お嬢様は可愛かわいらしいものだが、お前ら三人とも重病だからな。寺で座禅でも組んだらどうだ」

　まるで部外者のように笑う桜さくら川がわ先生に、俺は猛然と抗議する。

「いや、桜川先生もですよ！　今日通知表の代わりに、婚こん姻いん届とどけ渡そうとしてたじゃないですか！　男子だけじゃなく女子にも!!」

　そして、担任の樽たる井い先生は例によって我われ関せずだった。

　この一学期間、ついにあの人が担任らしく仕事をしている所を見る機会はなかったな。

「待て、勘違いするなよ。女子と結婚しようっていうんじゃない。ご家族にお兄さんや弟がいたらよろしく、ということなのだ」

　突然副担任の名前入りの婚姻届を渡される、ご兄弟の心中やいかに。

　トゥアールがやれやれ、とお手上げのポーズをする。

「そこで父親をターゲットに入れていない詰めの甘さが、尊みことさんが今の今まで独身だった一因でしょうに」

「フッ……確かに甘いかもしれん。だが、己が幸せになろうとする時、幸せな家庭に波風を立てるわけにもいくまい」

　しっかり倫理を遵じゅん守しゅしてるように振る舞ってるけど、桜川先生……ターゲットになってる、俺たちのクラスメイトの弟の年齢って、もうそれは──。

　鋭敏な刺激がこめかみのあたりに響く。俺は、ツインテールの気

配を感じた。
「！　誰だれか……ツインテールがやってくる！　みんな！」
「はーい、周りチェックー」
　愛香の号令で、皆、自分の周囲を確認する。
　不思議な機械類が出しっぱなしでないかのチェックは、来客を迎える前には必須だ。
　ツインテール限定だが、その分精度はほぼ一〇〇％を誇る俺の探知を、皆信頼してくれているのだろう。
　ほどなくノックがあり、扉を開けて入ってきたのは――
「ごきげんよう」

「理事長!?」
　陽よう月げつ学園理事長の、神しん堂どう慧え夢むさん。慧え理り那なのお母さんだ。
　相変わらず、理事長の足運びは見事と言うほかない。
　普通、ツインテールにした人が一人で入室し、ドアを閉める時には、ツインテールをドアに挟んでしまわないよう、手で押さえるなどして気をつけるのが鉄則だ。
　しかし理事長は自然とツインテールが前方に揺れるよう重心を調節して歩くことで、何も意識せずに優雅な所作の中でツインテールを保護しまもっている。
　普通はどちらかの足を踏ん張らないとそうはならず、見た目以上にずっと難しい。
　長年ツインテールと共に……文字通り〝歩んできた〟からこそ、できる業わざだ。
「お母様、何な故ぜここに!?」
　思わぬ来客に驚いたのか、隣に座っていた慧理那が俺の肩に手を

触れ身を寄せてきた。
　それを見て、理事長は嬉(うれ)しそうに口(くち)許(もと)を手で押さえる。
「うふふ、ごめんなさいね。どうしても一度、婿(むこ)殿(どの)と慧理那が二人仲良く部活をしているところを見てみたくて」
　トゥアールが立ち上がり、これ見よがしに手を振って宣言した。
「それは残念ですねえ。ご覧の通り、男女比１：４の乱れた空間です!!」
「では、わたくしも合わせて今は１：５ですわね」
　意図を摑(つか)みかねる理事長の発言だが、トゥアールは何かを悟ったように戦(せん)慄(りつ)している。
　桜(さくら)川(がわ)先生が用意した椅(い)子(す)をわざわざ自分で移動し、理事長は俺の横に座った。
　こんな和服美人をパイプ椅子に座らせることに、罪悪感を覚える。
　理事長は、視線で走査するように丹念に俺を見始めた。
「婿殿」
「は、はい」
　そう呼ばれて返事をするのもどうかと思うが、今のところは仕方がない。
「また一皮剝(む)けたようですわね。貌(かお)つきが男らしくなりましてよ」
「ありがとう、ございます……」
　理事長に誉(ほ)めてもらえると、自信がつく。
　しかし、これだけの洞察力を持つ理事長だ。ソーラの件で「俺が」休む際には慧理那にうまく言い訳してもらったが、果たしてどれほど誤(ご)魔(ま)化(か)せていたか、心配にもなる。
「わたくしがここに近づいているのに、気づいていたようですわ

ね」

　案の定、俺たちが忙せわしなく準備していたのは見抜かれてしまっていたようだ。

「ということは……婿殿は、ツインテールを感じることができるのですわね。その若さでその手並み、実に頼もしいですわ」

「俺の場合、年は関係ないと思いますが……でも、嬉うれしいです」

「真にツインテールを愛するのならば、五感で感じているようでは、まだ麓ふもと。婿むこ殿どのは今、ツインテールという大たい山ざんの中腹におられるのです。頂を目指し、頑張ってくださいましね」

「はい!!」

　偉大な先達の助言を、しかと胸に刻む。

　ツインテール山の中腹か……。先はまだまだ長いぜ。

「もうそこが頂上じゃないと困るのよっ……!!」

　さすがの愛あい香かも理事長には面と向かって暴言を吐けないようで、ツッコミも吐き捨てるようにひっそりとしている。

　理事長は、書きかけのホワイトボードに目を留めた。

「あら、ツインテール部は夏休みに合宿ですの？」

　渡りに船だとばかりに、慧え理り那なが関門の一つであろう許可を求めた。

「そうですわ、お母様。それで、外泊の許可を……いただきたいのですが……」

「ふむ」

　すぐに了承はせず、視線を移ろわせる理事長。

　愛香、トゥアール、慧理那、桜さくら川がわ先生まで。鋭く、丹念に観察していく。

「尊みこと。婿殿のお耳を」

「え？　……はい、奥様」

　この暗号レベルの省略ぶりで求められている行動を察したらしく、桜川先生は立ち上がって俺の背後に移動してきた。

「うわっ……!!」

　頭から足の先まで、血流のような勢いで甘いこそばゆさが駆け抜ける。

　桜川先生が、人差し指を差し入れて俺の両耳を塞ふさいできたのだ。

「く、くすぐったいって、先生！」

「こら、動くな」

　桜川先生に抱き締められるように身を寄せて押さえられ、俺は硬直してしまった。

　男の腕力を押さえるために桜川先生も全力で身体からだを押しつけ、肩に背中にと柔らかな感触が弾はじけてゆく。

　職業柄ファッションで爪を伸ばすこともないだろう桜川先生の指は、満遍なく俺の耳じ孔こうを閉ざし、訪れた無音がますます全身の感覚を鋭敏にした。

「黙ってればこの年とし増まどもは次々に総そう二じ様にちょっかい出して、我わが身我が年を省かえりみようとは思わないんですか!!」

　トゥアールが、理事長に何か抗議をしているようだが、声は全く聞こえない。

「おほほほ、元気があってよろしい。お上品なライバルでは、慧理那も成長できないでしょう。わたくしは望むところですわ」

「ぐぬぬ……！」

　理事長は優雅に笑い、対照的にトゥアールは憎々しげに歯は噛がみしている。

「慧ぇ理り那な、外泊……それはつまり、婿むこ殿どのと夜を明かしたい、ということですわね？」

「そういう意味ではありませんわっ！」
「情けない！　そういう意味でなくて何としますか!!」
　慧理那と理事長も言い合いを始めたようだ。白熱しているのか、慧理那の顔は真まっ赤かだ。
　外泊の許可はもらえるのだろうか……。
　トゥアールが、理事長と慧理那の間に割って入った。
「それには同意です。そういう意味に決まってるじゃないですか。慧理那さんがおめおめ自分の指を咥くわえている間に、私は別のを咥……」
　会話は全く聞こえないが、トゥアールが愛あい香かに制裁を加えられている。
　今の俺の状況。サイレントコメディを見ているようだ。
「慧理那。合宿中、婿殿との関係を進展させるのです。それが、母が数日の外泊を許可する条件です」
「「「なっ……!!」」」
　みんなが大仰にリアクションしているのが、気になって仕方がない。
「お、お母様、どうしてみんなの前でそんなことを!?」
「先の海への旅行では、同じことを慧理那にだけ言っても、達成できなかったようだからですわ。皆の前で目標を立てれば、お尻に火も点っくでしょう。これも母の愛です」
　理事長が首しゅ肯こうで合図すると同時に、耳塞感が消えた。桜さくら川がわ先生が俺から離れたのだ。
「ごめんなさいまし、婿殿。少し、殿方にはお聞かせできない、女の会話を」
「ああ、そういうことですか。気にしないでください」
　さっきのように、男子の存在を考慮せず女子同士のあられもない

会話を聞かされる方が反応に困るので、むしろありがたい配慮だ。

　最初にそう言ってくれれば、一旦部室を出るなりしたのに。

　慧理那が、目を泳がせながら乾いた笑いをする。

「きょ、許可をいただけましたわ、観み束つか君……。合宿、大丈夫です」

「そっか。じゃああとは、日時と場所を決めるだけだな」

　桜川先生にも確認しようと視線を向ける。何な故ぜか、頰ほおや耳を赤くして理事長と話していた。

「大丈夫ですか、奥様。さすがに旦だん那な様が何と仰られるか……」

「問題ないわ、尊みこと。お父様はわたくしがお仕置……説得しておきます」

　大丈夫ではない不穏当な単語が聞こえた気がするが、家の事情を詮索すべきではないな。

　愛香も、さすがに理事長相手にはこのメンバーにしているような攻撃的な態度は取れないのだろう。鬱うっ憤ぷんを持て余すように憮ぶ然ぜんと座って腕組みをしている。

　そんな愛あい香かに、理事長は去り際、優しく語りかけた。

「津つ辺べ愛香さん。あなたもトゥアールさんのように、わたくしに遠慮などしなくともよいのですよ？　そんなに綺き麗れいなツインテールなんですもの。是ぜ非ひ、慧え理り那なと切せっ磋さ琢たく磨ましてくださいましね」

　理事長が部室を去ってしばらくすると、潜水から浮上したように大きく息を吐き、愛香は机に突っ伏ぷした。

「緊張するわー、あの人……」

「すみません。部室に見に来るのは、滅多にないと思いますので……」

　責任を感じているのかしきりに謝る慧理那に、愛香は発言のう闊かっさを恥じるように必死に否定していた。
　頭の振りに合わせて揺れる愛香のツインテールを見て、俺は無意識に呟つぶやいていた。
「……うん。愛香のツインテールって、綺麗だよな」
　理事長が一目置くツインテールなのも当然だ。
　俺の憧あこがれであり、目標でもある。
「ぇえっ……！」
　愛香は何をそんなに慌てたのか、パイプ椅い子すの前脚を浮かせて後脚だけで座っていたが、急にすてんと転げ落ちてしまう。
「な、な、な、何言ってんのよ！　恥ずかしいわね!!」
「ごめん……でも、理事長の言う通りだな、って思って……」
　確かに、ちょっとキザったらしいかもしれない。けど、素直にそんなことを言えるようになったのも、ソーラになって女の子の視点でツインテールを勉強したおかげだろう。
　今まで以上に、他の人のツインテールのすごさというのを、実感できるようになった。

　気を取り直して、理事長が来る前に話し合っていた議題に戻ろうとしたのだが。
「んじゃ、合宿の案についてだけど……」
「すみません、今日はお暇いとまさせていただきますわ……。明日、また」
　思い詰めたように肩を落とし、桜さくら川がわ先生を伴って慧理那は部室を出ていってしまった。
「……あれ？」
　愛香も妙にそわそわしているし、トゥアールは虚ろな目で何かぶ

つぶつと呟きながら、ＰＣのキーを高速で叩いている。
　一学期最終日だけど、今日はもう、部活をする雰囲気じゃないみたいだ……。

◇

　自分の家の前で総そう二じとトゥアールと別れ、愛あい香かは玄関のドアを開けた。
　ただいま、と告げて靴を揃え、洗面所へ。手洗いとうがいを済ませる。
　階段を昇って自分の部屋へと入り、通学かばんを机の横の定位置に置く。
　いつもなら、そのあとはだいたいベッドに腰掛け一息つくのだが、今日に限っては違う。
　愛香はそのまま立ち尽くし、無言で俯うつむいていた。
　そして急に顔を上げ、腕組みをして部屋の隅から隅まで、所在なく行ったり来たり。
　どんどん速度を増し、競歩のように忙せわしなくなってきたかと思えば、今度は急に足を止め、肩を震ふるわせ始める。
　いよいよ挙動が怪しくなってきたその時、愛香は大の字になり、ベッドに身を投げ出した。
「…………」
　枕に顔を埋うずめ、ぎゅっと抱き締める。
　さらには足をバタバタさせ、枕を抱き締めたままベッドを転がる愛香。
「ふふっ……」
　埋めた枕から覗のぞく顔は、頬ほおも耳も真まっ赤かになっており、満

面の笑みで彩られている。

　意地っ張りなせいで総二たちの前では決して見せない、愛香のありのままの笑顔だった。



しかしいかんせん、肉体面でもありのままを解放したのがまずい。

女の子の甘く切ない思いを受け止めた枕は、無惨にひしゃげている。自身の重力に負け、内側に爆縮していく末期の恒星のようだ。

部屋に響き渡る、キックボクサーのミット打ちを思わせる快音は、愛あい香かのバタ足を受け止めているベッドの悲鳴だった。大男二人で全体重を大型ミットに預け、ようやく受け止められるかどうかの剛脚だろう。

余韻に浸るように、ベッドに俯うつぶせになる愛香。

直後。カウントが九に達してあわや一〇をコールされんとする一いち弾だん指しに、不屈の闘志で起たち上がるボクサーのように、猛烈な勢いで跳ね起きた。

「…………愛香のツインテールって、綺き麗れいだよな」

凜りゝりしく眼を細め、総そう二じの声こえ真ま似ねをする愛香。

すぐにへにゃっと崩れて女の子座りになり、くねくねと上体を揺らし始める。

ほとばしる女の子ストリームに蹂じゅう躙りんされ、愛香の部屋は崩壊待ったなしだった。

「…………」

枕を掴つかみ、そっと自分の唇くちびるに寄せる愛香。

耐用限界を迎えつつある生地が、その小さな唇に触れようとした、瞬間──。

「あのう……」

「ほわあ!!」

突如部屋に響いた聞き慣れた声に取り乱し、愛香は怪け鳥ちょう音を

発した。手にしていた枕を、横投げで壁に叩きつける。
　申し訳なさそうに腰の前で手を組み、トゥアールが部屋の隅に立っていた。
「トゥ、トゥ、トゥ、トゥ、トゥ、トゥアール────ッ!!」
　白目になって絶叫する愛香。
「見事なタンギングです、スタッカートはバッチリですね」
「何であんたがあたしの部屋にいるのよ!!」
「すいません、驚かそうと思ってこっそりついてきただけで……見る気は……なかったとは言えませんが、少なくとも、こんなの見る気はなくて……」
　愛香さんならどうせ気配を察知すると思って、と弁解するトゥアール。
「殊勝になってんじゃないわよかえってつらいわよ!!」
「殊勝にもなりますよそりゃ……。愛香さんって、自分の部屋では全裸で仁王立ちして、『大きくなあれ！　大きくなあれ！』って叫びながら胸に乾布摩擦しているようなイメージだったので……」
「どんなイメージ持ってんのよ!!」
　トゥアールはぽぽっ、と頬(ほお)を染めると、
「お詫(わ)びに、私も愛(あい)香(か)さんの前でソロプレイでも……」
「いるかボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」
　制服シャツのボタンを外し始めたトゥアールを、血相を変えて止める愛香。冗談でなくやりかねない。
「そのぐらい見せないと釣(つ)り合わないような光景でしたし……」
「ギャー忘れて──────────────ッ!!」
　思い出して悶(もだ)え、頭を抱えて部屋を転がる愛香。
「あれですねえ……初めて来ましたけど、愛香さんの部屋って案外

乙女っていうか……」
「何よ、バーベルセットでもあると思ったの？」
　トゥアールに指摘され、愛香は自分の部屋を省かえりみた。
　いくつかのぬいぐるみや、フリルのついたクッションはあるが、過剰に女子をアピールした部屋ではないと思う。
「だいたい、何で今日に限って来たのよあんた」
　ベッドに腰を下ろし、溜ため息いき交じりに言う愛香。
「以前私の部屋に招待したんですから、そろそろ私がお邪じゃ魔ましに行くのが筋じゃないですか」
「だからって、あたしが招待する前に不法侵入してんじゃないわよ!!」
　……いや、慧え理り那なだけでなく、トゥアールも総そう二じが自分のツインテールを誉ほめたことを気にしているのかもしれない。愛香はそう思ったが口には出さず、話題を変えた。
「今日もまたすごかったわよね、そーじのツインテール馬ば鹿か。そろそろ何とかしないと」
　嬉うれし蹴げりを食らいまくったベッドが何か言いたそうにしているように感じるが、悲しいかな、物言えぬ家具の限界だった。
「もっと憂慮すべきことがあります」
「何よ」
　トゥアールは勉強机の椅い子すに正座して遠心力で回転し、陶酔を孕はらんだ声こわ音ねで囁ささやいた。
「……総二様。最近、前にも増してかっこよくなったと思いません？」
「え？　そ、そうかな……」
　愛香は照れくさそうに、後頭部をさすった。
「何で愛香さんが照れるんですか図ずう々ずうしい!!」

　怒りながらも、総二が最近変わったという意見には、愛香も同意した。
「そう言われればそうかもしれないけど……でも、何でだろ」
「今までの総二様は、ツインテール好きを負い目のように感じてらっしゃった。だから、自信なさげな態度が滲にじみ出て、マイナスになっていたんだと思います。でも、今は違う」
　愛香が答えをわからないことに優越感を覚えたのか、トゥアールは軽やかに椅子を下り、愛香の隣に腰掛けた。
「ツインテールで世界を守った、そして守り続けているという自負心が、総そう二じ様を輝かせているんです。もちろんいきすぎな時もありますが、総合的には女にとって間違いなく魅力的な男性になっていっているんですよ」
「そうね……うん。そーじ、前よりずっと輝いてると思う……」
　今の総二は、ツインテールを守ることに誇りを持っている。
　それは、ずっと側そばにいた愛あい香かにとっても、誇らしいことなのだった。
　やはりトゥアールは、強敵だ。
　変態に終始しているようでその実、よく総二を見ている。
「ところでさっき、頭じゃなく枕の方から口に近づけてましたよね～うぷぷぷぷ。愛香さんでも、キスの時は受け身でいたいんですね!?」
　人差し指で愛香のほっぺをぷにぷにと押しながら、ねちっこく言葉で舐ねぶるトゥアール。
　ツッコミを察知してすかさず逃走したトゥアールへ、愛香は力尽きて床に落ちていた枕を引っ摑つかんで投とう擲てきした。
「ごあああああ枕が遠心力で鉄の硬度を!?」

◇

　トゥアールを（物理的に）叩き帰した後、愛香は一階のリビングに向かった。

　ソファには、温和な雰囲気の女性が座っていた。

　津っ辺べ恋れん香か。愛香の姉で、陽よう月げつ学園大学部の二年生だ。

　愛香の両親は海外赴任中のため、今はこの姉と二人暮らしをしている。

　容姿は愛香に似ているが、愛香がそのまま成長すれば恋香になるかと言えば、それは間違いなくＮＯだろう。

　まとう情調がまったくの正反対だった。

　美しいストレートロングの髪。

　その頭頂にできた天使の輪が、本当にそのまま頭上に浮かんでいても納得できる柔和な物腰は、側にいるだけで誰だれしもに安心感を与える。

　部屋着のくだけたワンピースでさえ、彼女が着ると華やかなパーティードレスのようだ。

　そしてワンピースを押し上げる豊かな胸は、彼女の母性をさらに上増ししている。

　今海外にいる母もスタイルはいいのだ、自分も胸が大きくなる資質はあったに違いない。

　育ち方を間違ったのだろうか、とたまに愛香は後悔する。

「お友達、もう帰っちゃったの？」

　嫋たおやかに微笑ほほえむ恋香。

「ん。今日は、遊びに来てたわけじゃないから」

　友達という部分を否定せず、キッチンに向かう愛あい香か。

　冷蔵庫から牛乳を出し、コップになみなみと注ぐと、一気に飲み

干した。
「ビックリしちゃった。二階からディーゼルハンマーを打ち込むみたいな音が聞こえてきたから」
　大袈裟（おおげさ）なんだから、と苦笑する愛香。
　だが彼女の言葉に誇張など全くなく、愛香のバタ足で一階に伝わっていた衝撃は常人なら机の下に隠れるのを諦（あきら）め、着の身着のまま家の外に走って逃げるほどのものだった。
　恋香（れんか）は、ソファに座った愛香に話しかけた。
「帰りに未春（みはる）おばさんのところでコーヒー飲んできたけど、なんだろう……最近、不思議なお客さんが増えたわね？」
「あ~、うん……」
　さすが姉は言葉を選ぶな、と苦笑する愛香。率直に言えば、あそこは変人の巣窟（そうくつ）だ。
　もっとも、変わった言動の人ばかりだが、それを自覚してか客としての一線はちゃんと弁（わきま）えているので、店の雰囲気が悪いわけではない。
　客層が変わる前からの最常連の一人である、姉を止めるほどではないだろう。
「店に出てきた総（そう）くんとも会っちゃった。最近、すごくかっこよくなってるよね」
「お、お姉ちゃんもそう思うの!?」
　理事長の言葉がリフレインする。
「うん。高等部になってから、けっこう変わった気がするよ」
　そして先ほどのトゥアールとの会話を思い出したのか、目が泳ぎ出す愛香。
「大丈夫？　周りの女の子にモテるでしょう、総くん。それにさっき来ていたお友達、総くんの家にホームステイしてるんでしょ？

とっても綺き麗れいな子じゃない」

　恋香にはトゥアールの奇行を見られていないはずなので、そうなれば、美少女の居候としか映っていないだろう。危機感を持て、と言われるのは当然だ。

「ご、ごめんお姉ちゃん、応援してくれてるのに……」

　恋香は、よき姉として愛香と総そう二じの仲を応援している。子供の頃からずっとだ。

　煮え切らず、遅々として関係の進展しない自分たちを、辛抱強く見守り、時にはアドバイスもくれる。

　囃はやし立てはするが同じく応援してくれる友人たちといい、自分は恵まれている。

　愛香はそう実感していた。それだけに、現状が歯は痒がゆいだろう。

　恋香が自分の髪を掬すくい、指先で摘つまんで見せた。

「姉さんももう二十歳になっちゃうし、その前にツインテールにしてみたいなあ」

「！　だ、駄目っ！」

　すがりつくように阻む愛香。

　恋れん香かはいたずらっぽく笑い、ちろりと舌を出した。

　こういう子供っぽい仕草が嫌いや味みなく似合うのも、愛あい香かには羨うらやましい。

「大丈夫よ。愛香が総そうくんとちゃあんと結ばれるまでは、ツインテールにしたりしないって約束だったもんね」

「約束って……」

「ふふ。だって、とっても可愛かわいくて、今でも覚えているもの。『おねえちゃんがツインテールにしたら、そーじとられちゃうからやだぁ』って」

　おねしょよりも恥ずかしい黒歴史を持ち出され、愛香は顔を真まっ赤かにした。
「また、そんな子供の頃の話ぃ」
「その時の愛香、おばさんが写真に撮ってて、私にくれたの。宝物よ」
「未み春はるおばさんはほんとにっ……」
　膨ふくれっ面になって、ソファに背中を投げ出す愛香。
「そういうお姉ちゃんは、彼氏作らないの？」
「今は愛香が心配で、それどころじゃないもの」



　強がりではない。

　姉がどれだけ男子にモテるか、一緒に通学していた初等部時代にいやというほど知った。

　ガキ大将を通り越して小魔王姫サタンプリンセスなどと男子に恐怖されていた自分が、そんな姉の邪じゃ魔まになってはいないかと、子供ながらに愛あい香かは悩んでいたこともあったほどだ。

「愛香と総そうくんが無事に恋人同士になったのを見届けたら、姉さんも本気出しちゃおっと」

　そしていつも、こうして愛香を気遣わせないよう振る舞ってくれる。

　姉の恋れん香かは、愛香にとって一番の憧あこがれであり、誇りだった。

「でも、本当に早いよね。屈かがんで頭を撫なで撫でしてあげてたあの小っちゃな総くんが、もう私より背が高くなっちゃって……」

「うん……そうだよね。あたしたち、もう子供じゃないんだよね……」

　噛かみしめるように呟つぶやく愛香。

「別の頭を撫で撫でしてあげなきゃ」

　感慨に浸る愛香の隣で、恋香が小さく何か呟いた。

「お姉ちゃん、何か言った？」

「ううん。愛香が早く総くんと恋人になれますように、って、お祈り」

「もうっ……」

　よし、と頷うなずいて、立ち上がる愛香。

　姉の応援に応こたえたいというのもあるが、愛香自身、焦りは感じている。

　いつまでも、子供の頃の二人ではいられない。

高等部に進級して初めての夏休みを、活いかさなければ。

◇

アルティメギルにも、夏休みの概念があるかどうかは、定かではない。

だが、総そう二じたちの世界の部隊は今、属性力エレメーラ奪取のための侵攻を一時休止していた。

基地の大ホールに部隊のエレメリアンがほぼ全員集合し、整然と着席している。

しかし行われているのは、いつもののどかな作戦会議ではない。

ダークグラスパーの配下、首領直属軍の一つ・美の四心ビー・テイフル・ハート。その隊長のビートルギルディが、集まった多くの戦士の前で、静かに佇たたずんでいた。

先日、副官であるアラクネギルディが、テイルレッドに倒された。

嘆き、すぐさま弔とむらい合戦に臨む──そのような安直な者では、強部隊の隊長は務まらない。

彼は、多少侵攻の手を休めてでも、部隊の強化を徹底すべきであると結論づけた。

天を衝つくような長大な一本角。宝石のような鮮やかな輝きと、金属の硬質感。それらを併せ持ちながら、生物特有の命の脈動をも感じさせる、全身の甲殻。

ほとばしる強者の風格は、幾度と作戦会議が行われてきたホールに、かつてない緊張感をもたらしていた。

ビートルギルディにそっと近づき、何かを手渡すエレメリアン。

万物を挟み、両断するかのような禍まが々まがしい乱れ刃の並んだ二

本角を持つそのエレメリアンは、スタッグギルディ。クワガタムシを想起させる外見もあり、二人が並ぶとその強大な存在感は調和し、相乗されるようだ。

　そんな彼が手渡したのは、タッチに特化するように先が滑らかに丸まったペンだった。

　ペンを手にしたビートルギルディは、精神統一を始める。

　美の四心ビー・テイフル・ハート──。

　エレメリアンの中でも、特に美しさを尊び、それを力に変える強者の集団だ。

　その隊長であり、美の創造者と景けい仰こうされるビートルギルディ。

　彼の伝説の技が今、部下たちに披露されようとしている。

　壁の大型モニターには、ビートルギルディの手元のタブレット端末に接続され、映像が転送されていた。

　そこには長方形の白キャンバスが表示されており、その左右にカラーパネルやツールパレットが配置されている。ＣＧイラストを描くためのソフトのようだった。

　そしてその無地のキャンバスに、下絵も用意しない一発描きで、見事なツインテールが描画されていく。

　描画の軌跡を残すカーソルのように、ビートルギルディの腕はオーロラの残像を煌きらめかせ、ペンを宙に躍らせる。

　ホールのエレメリアンたちが、おおお……、と感嘆の溜ため息いきを漏もらした。

　ツインテールが完成した後は、休む間もなく各パーツが描き加えられていった。

　くりっと可愛かわいらしくも、正義の炎を宿した力強い瞳ひとみ。

　くびれも丸みもないが、逆に無限の可能性を感じずにはいられな

い幼い身体からだ。

　ただの一度も迷ってペンを止めることなく最後まで描ききり、キャンバスの上でテイルレッドの線画が産うぶ声ごえを上げた。

　ツインテールの躍動感と、ほとばしる闘気が同居した、見事な迫力のイラスト。

　この線画だけでも十分魅力的だが、すぐに着色作業が始まった。

　そのテクニックを一瞬たりとも見逃すまいと、兵たちは固かた唾ずを呑のんで見守っている。

　瞬く間にベースカラーの配分が終わり、着色の本番である影入れが厳おごそかに進行してゆく。

　特に、ツインテールの着色は、一塗り一塗り制作者の魂を注ぐかのようだ。

　時に大胆に、時に繊細に。

　目にも止まらぬ速さでブラシの大小、ツールの変更を行いながら、着色の儀がしめやかに執り行われていく。

　色彩いぶきは吹き込まれ、テイルレッドの象徴であるツインテールが、華々しく完成する。

　その瞬間、イラストが神仏のごとき眩まばゆい輝光を放ち、ホール全体が黄金色に染まった。

「──以上だ」

　ビートルギルディがペンを置くと同時、全員が立ち上がって万雷の拍手を送る。

「過程はおおよそ今の通りだが、全て私を真ま似ねる必要はない。各自、自分に合った進め方を模索せよ」

　エレメリアンたちの前にはすでに、ビートルギルディが使っていたものと同じ、大型の液晶タブレットが設置されている。

　だが、テイルレッドを描こうと意気込んでいた一同に、非情な一

言が告げられた。

「――描くのは、テイルブルーのみだ。それ以外は許さぬ」

　言葉を失う彼らの机に、スタッグギルディがテイルブルーのフィギュアを配布していく。
　もちろんこれも、原画・ビートルギルディ、制作・スタッグギルディの快作だ。
　快作だがテイルブルー。
　テイルブルーだが快作。
　哲学だった。
「もう一つ。そのまま模写するのも認めぬ。フィギュアを見ながら頭の中で分解し、再び組み立て、独自の構図を作り上げるのだ」
　続いて告げられた無理難題に、ようやく全員が、この場に集められた意図を理解した。
「これは訓練だ。お前たちは、その恐怖心を克服せねばならぬ。見事イラストを完成させ、テイルブルーなど何するものぞ、との強き自負を持ってみせよ」
　休息など、とんでもない。これは、まぎれもなく修行なのだ。
　青天の霹(へき)靂(れき)のごとく、突如課せられた試練に絶句するエレメリアンたち。
　しかし、上官の命令は絶対。
　一人、また一人と震(ふる)える手でペンを握り、フィギュアを見ながらのイラスト制作へと取りかかる。
　確かに今彼らの最大の障害は、鬼神・テイルブルーの存在そのものよりも、日に日に彼女への恐れを増大させていく、己自身の恐怖心だ。

　乗り越えなければ、自分たちに明日はない。

「それにしても、この新型タブレット……。また腕を上げたな、スタッグギルディ」

　配布を終えて戻ってきたスタッグギルディの肩を、ビートルギルディが誇らしげに叩く。

「見事な応答速度だ。私の全力に、タイムラグを感じさせず反応が追いついている。さらに直感的な使い心地を実現した、モアクリエイティブな液晶タブレットだな」

「うん。兄さんの技術を少しでも活いかしたいからね。僕も必死さ」

　ビートルギルディが塗りの極地を花咲かせた、このペイントソフト、そして使用していた液晶タブレットは、全てスタッグギルディが手ずから開発したものだった。

　ビートルギルディが表の芸術家なら、スタッグギルディはそれを支える裏方。

　ソフト・ハードを選ばず目覚ましい開発力を振るう、影の立役者だった。

　エレメリアンに血縁関係は生まれない。それでも二体は、互いの才を認め、高め合える無二の同志として、義兄弟の契りを結んだ仲なのだ。

　スタッグギルディは、決して戦闘力や指導力に秀でているわけではない。

　ゆえにその二つを兼ね備えた実力者・アラクネギルディに美の四心ビー・テイフル・ハートの副官が任されていたが、ビートルギルディの右腕は誰だれかとなれば、やはりスタッグギルディがそうなるだろう。

　ビートルギルディは、後ろ手に組んでゆっくりと歩きながら、皆

の作品を検(あらた)めていく。
　むろん、大半がイラストの初心者だ。技術を審査するつもりはない。
　あくまで、どれだけ打倒テイルブルーの意気込みを、イラストに込められているか。
　それを観察しているのだ。
「…………」
　一体のエレメリアンの液晶画面に視線を留め、足を止める。
　サイのように鼻上の角が勇ましい巨漢、ライノセラギルディ。彼も、その豪腕を活(い)かすことなく、テイルブルーを恐れ、出撃の機会を逸してきた残存兵の一体だ。
　その恐怖心は、やはり自身のイラストに顕(あらわ)れていた。
　胸の部分を、薄く、薄く、迷うように下書き線を重ねて描きながら、それでもすぐに消してしまう。
　鉛筆と消しゴムのツールを交互に切り替えるだけで、遅々として作業が進んでいない。
　そこで、ビートルギルディは思いもよらぬ大胆なアドバイスをした。
「それほど迷い描きをするのなら、いっそ、胸の部分を直線にするがよい」
　作業を進めていた他のエレメリアンたちも手を止め、その冒険的な助言に耳を疑った。
　当然、ライノセラギルディは納得できず、恐る恐る反論をする。
「しかし、ビートルギルディ様。いかにテイルブルーの胸とはいえ、一直線というのは……」
　ビートルギルディはホールの正面に戻り、ライノセラギルディのみならず全員に向け、補講を始めた。

「よいか、これは美術のデッサンではない、イラストなのだ。イラストには、時に大胆なデフォルメや誇張も必要となる。あえて人体構造を無視することが、いきいきとした構図を生むこともある。寸分違たがわずモチーフと同じにする必要はない」

　全員が、手元のフィギュアを見つめる。

　宿敵・テイルブルーに見み竦すくめられ、自然と震ふるえが走ってしまう。

「テイルブルー……たしかに非凡な貧乳とはいえ、極小の凹おう凸とつはあろう。だがそこをあえて直線で描くことが、テクニックとしての誇張なのだ。キャラクターを際だたせ、わかりやすくし、イラストに熱を持たせる」

　武士の情けのように、フィギュアに完全再現された、驚くほどミニマムな胸。

　これをあえて無視することも、時には必要だというのだ。

　しかも、マイナスにすることこそ誇張だというのだから、救いがない。

　ライノセラギルディはおもむろに立ち上がると、深々と礼をした。

「はっ……！　出過ぎた意見でありました。確かにテイルブルーならば、胴体が直線であることが、かえってリアリティを感じる要因となりましょう!!」

　うむ、と優しく頷うなずき、ビートルギルディはイラストのチェックに戻った。

　各々の恐怖を具現したように、凶悪さを全面に押し出したテイルブルーのイラストが、液晶タブレットに乱れ咲いている。

（これでよい。恐怖とは、真正面から向き合って初めて、乗り越えられるもの）

　ビートルギルディが、手応てごたえを感じたように微笑ほほえむ。
「テイルブルーの胸は、直線ツールで描画してよろしいでしょうか!?」
　すっかりと調子を取り戻し、別のエレメリアンが挙手をして質問する。
「フッ、手間を惜しむでない。デフォルメと手抜きは違う。仕上がりの違いは微々たるものでも、やはりフリーハンドで直線を描いた方が、肉感に説得力が出る。……いやそもそも、皆揃ってテイルブルーの胸部を直線にしろとは言っておらぬぞ？」
　どっ、と野太い笑いが起こる。
　それは、馴なれ合いではない。
　打倒テイルブルーを旗はた標じるしに成長した男たちの、結団の談笑だった——。

◇

　頭の中に、幼い女の子の声が響く。
「夢みたい……こんなことって、あるんだね」
　そう。夢だ。俺は、不思議な夢を見ていた。
　薄暗くて何もない空間で、俺は小さな女の子と向き合っていた。
　何となく、自分の中のツインテールと話をした時の雰囲気に似ているな。
　夢を見るのは、脳の休息と記憶整理のためだという。
　だから、見たことがないと思っても、実際には必ず一度は知覚したもののはずなのだ。
　—では、今俺の目の前にいる少女とは、どこで会ったのだろう。
　彼女の完かん璧ぺきに調和されたツインテールに、目を奪われた。

長さは肩上までだが綿わたあめのようにボリュームがあり、愛らしさが強調されている。
左右で色の違うリボンをはじめ、ピンクを基調としたフリフリの服のいたるところに、白と黒のツートンカラーがあしらわれている。
また、腰にも大きなリボンがあり、それも左右で形が違う。
配色も装飾も、全身アシンメトリーを意識した衣装のようだ。
このツインテールの存在感、とても夢には思えない。
「こっちは夢じゃないよ。ロロリーとお兄ちゃんは今、心が繋つながってるの」
俺の考えを読んだように、少女は否定した。
大きくつぶらな瞳ひとみが印象的だ。ところどころ衣装から露出している肌も、白磁のように綺き麗れいに透き通っている。
「なんか、魔法少女みたいだな、君は」
人によって当然異論はあるだろうが、俺は、魔法少女といえばやっぱりツインテールだろう、というこだわりがある。その点彼女は、まさに絵に描いたような魔法少女だった。
率直な感想を言うと、女の子は嬉うれしそうに破顔する。
「うん、ロロリーは魔法少女だよ。えへへ、ツインテールの戦士で、魔法少女なの」
「ツインテールの、戦士……」
「そう。でもツインテールの戦士って、女の子だけじゃなかったんだねっ、お兄ちゃん」
やはりこれは、夢なんだろうか。
俺がツインテールになることを仲間以外は誰だれも知らないし、それを知る術すべもないのだから。
そんな俺の疑問に答えるように、ロロリーは言った。

「だってこの声は、世界で一番ツインテール属性が強い人に……ツインテールの戦士にだけ届くはずなんだもん。ロロリーは、同じツインテールの戦士と会ってみたくて、こうして声を届けていたの。お兄ちゃんが、ようやくそれを〝受け取ってくれた〟んだよ！」
　心が繋がっているという言葉の通り、俺の考えていることはこの子に筒抜けのようだ。
　しかし……かわいいなあ、ふわふわしたツインテール。ついつい目がいってしまう。
「お兄ちゃん、ロロリーに会いに来て。ロロリーの世界はね、やっと戦いが終わって平和になったの。だから、一緒に遊ぼうよ‼」
　思っても声に出しても同じなので、俺は疑問を口にする。
「会いに来てって……異世界はそう簡単に行き来できないって、俺は聞いたぞ」
　その柔らかそうなツインテールを揺らして近づき、ロロリーは俺の手を握る。
「あのね、お兄ちゃんの世界とロロリーの世界は、トンネルで繋がっているみたいなの。移動はそんなに難しくないと思うよ」
「トンネル？　へえ、そんなことがあるのか……」
　ロロリーは俺の胸に頬ほおを寄せ、子猫のように甘えてきた。腕に触れる、ツインテールの感触。
　それもまた、生まれたての子猫のようにか弱く、儚はかなく、そして温かい。
「えへへー、お兄ちゃん、ロロリーのツインテール撫なでて？」
　そんな仕草に俺も心が温かくなり、ロロリーのツインテールをそっと撫でてあげた。
「やん。お兄ちゃん……ツインテールの触り方、とっても上手だね……。ロロリー、ドキドキしちゃうよ」

　予想外な色っぽい声を出され、俺はビクリとする。

「そ、そうかな？　ありがとう」

　何な故ぜだろう。女の子にツインテールの触り方が上手だと言われると、男として自信が湧いてくるような気がする。

「これで、お兄ちゃんとロロリーは本当に繋がったよ」

「え？」

　ロロリーはくるっと回って後ろ手に組むと、その可か憐れんな魔法少女服を煌きらめかせる。

「ロロリーの世界に来てね。約束だよ！　お城で待ってるからね!!」

　そう言い残し、ロロリーは光の中に溶けていった。

　俺の意識も、彼女の放った光へと吸い込まれてゆく。

　気がつけば俺は、ベッドの上で上体を起こし、しばらくぼーっとしていたようだ。

　時計を見ると、朝の六時。夏休み初日に起きる時間としては、優等生過ぎる。

「…………」

　夢だと切って捨てるには、あのツインテールの感触はリアルすぎた。

　妙に落ち着いた気分でベッドから降りた俺は、机へと向かう。

　何かに取とり憑つかれたようにペンを走らせ、ノートに奇妙な文字を筆記した。

「……何なんだろう、これは……」

　無意識に書いた文字は、数式のように見える。自分でも何が何だか全くわからない。

　あとで、トゥアールに聞いてみるか。

◇

　俺は欠伸(あくび)を噛(か)み殺して階段を下りる。
　リビングのドアから顔を覗(のぞ)かせ、トゥアールが手招きしてきた。
「総(そう)二(じ)様、総二様、見てください!!」
「何だよ今度はどうしたんだよ、ツインテイルズに会いに宇宙人でも来たってか？」
　朝リビングに行くと、高確率で俺にとってあまりよろしくないニュースが伝えられる。
　すっかり恒例になり、心にも余裕が出てきた。
　最近はテイルレッドの新規戦闘映像もないし、心臓に悪いおもしろハプニング特集はないだろうからな。

『ツインテイルズに告ぐ!!』

　だが、直後に聞こえてきた勇ましい声に、眠(ねむ)気(け)眼(まなこ)も一瞬で開いた。
「ア……アルティメギル!?」
　テレビ画面に、カブトムシのようなエレメリアンが映っている。
　昆虫型……すると、美の四心(ビー・テイフル・ハート)の兵士か！
「全世界電波ジャック……侵略続行を宣言してきた時以来か!?」
　そういやこいつら、こんなとんでもない真(ま)似(ね)もできるんだった。
「この映像、今日の午前０時に流されたものなんですよ」
　トゥアールが、何(な)故(ぜ)かブラウスのボタンを外しながら上目遣い

で説明してくる。
　ジャックされたのは昨晩で、ニュースでその映像を流しているようだ。
『我われ々われは日本時間八月六日正午まで、侵攻の休止を宣言する。ツインテイルズ、お前たちに負けぬ強きょう靭じんな兵士を育成するためだ』
「育成休暇だぁ!?」
　俺は思わず映像に聞き返してしまう。
『これが偽り言でないことは、私の誇りにかけて誓う。その代わり、期日以降は容赦はせぬ。しばしの間、さらばだ!!』
　演説はそこで終わり、画面がスタジオに切り替わった。
『この宣言により、「テイルレッドたんの活躍が見れない」と五〇〇名以上の男女がデモを起こし、機動隊が出動する一幕も――』
　都心の最新映像を経て、キャスターや識者とで話し合いが始まる。
　ソファに腰を下ろし、リモコンでチャンネルを切り替えるが、キャスターと出演者が違うだけで、内容はみなこの宣言についてだった。
「活躍が見れないって……まるで、エレメリアンに現れてほしいみたいじゃないか……」
「呑のん気きねえ、みんな」
　母さんが苦笑する。
　そりゃあ、呑気でいてくれるに越したことはないけど、緩んでるなあ。
「総そうちゃん、アルティメギルにも夏休みってあるの？」
「夏休みなのかはともかく、あいつら自分の誇りを汚すようなことは絶対にしないからな。それに誓うって言った限り、休戦の提案は

嘘うそじゃないと思う」
　問題は、何でわざわざメディアを通してまで、俺たちに伝えてきたかってことだ。

◇

　期せずして、ツインテール部の夏休み一日目の活動は、作戦会議になった。
　俺と愛あい香か、トゥアール、合流した慧え理り那なと桜さくら川がわ先生は、以前愛香に破壊されたため新調した備品のテレビで、録画映像を確認した。
「本当だと思うか？」
　俺が真っ先にに切り出した議題はこれだ。
「八月六日まで攻めてこない、って約束したなら、それを違たがえることはないと思うんだ。ただ、兵隊を鍛えているからっていう理由の方を、言葉通りに受け取っていいか迷う」
　トゥアールがぽんと手を叩く。早速何か思いついたみたいだ。
「八月六日ってだいたい、夏の即売会の最大割増料金での入稿締切ですね。アルティメギルも新刊作っていて、締切まで余裕がないんじゃないですか？　案外、テイルブルーの本とか」
　入稿？　とか、何か製本用語みたいに聞こえるけど、合ってるだろうか。
　寝不足なのか目の下のくまが目立つ愛香が、鼻で笑って椅い子すにふんぞり返る。
「あの変態たちが、あたしの絵なんか描くわけないでしょ。描くとしても、どーせテイルレッドばっかよ」
　すかさずトゥアールが反論する。

「えー、でもー、あえて愛香さんを描いて、自己鍛錬にしてるかもしれませんよー」
「ありえないありえない」
「じゃああのエレメリアンと戦う時、テイルブルーの絵を描いていたか聞いてください！　もし私が正解だったら、全員揃ったこの部室で一日全裸で過ごしてもらいますからね!!」
「はいはい正解だったらね」
　よほどありえないと思っているのだろう。
　トゥアールの無む茶ちゃな提案にも、愛香は余裕綽しゃく々しゃくだ。
　愛香は愛香で、テイルブルーの世間の扱いに慣れてしまったんだな……。
「あんな大おお袈げ裟さに伝えてきたからって、深く考えなくていいのかもな」
　全世界に流れても、テイルレッドが見られない程度の騒ぎしか起こらなかったんだから。
　しかし愛香は、さらに根本の問題を指摘した。
「そーじ。前提からして間違ってるかもしれないわよ」
「前提？」
「エレメリアンは卑ひ怯きょうなことしないかもしれないけど、ダークグラスパーは？　あいつがツインテイルズを騙だませって命令したら、下した っ端ぱは逆らえないでしょ？」
　俺たちの、〝エレメリアンの武人肌への信頼〟を逆手にとるってわけか。
　これをトゥアールは、ことさらにその豊かな胸をそびやかして笑い飛ばした。
「イースナにそんな度胸はないですよ。そんな命令を出したが最後、部下からもテイルレッドや私からも総スカンですから。変身し

て偉ぶっても、根っこは根暗ストーカーのままです」
　妙に説得力があり、納得した愛(あい)香(か)は自分の意見を取り下げた。
「そっか。よくわかってるのね、イースナのこと」
「含みを持たせるような言い方はやめてもらえますか!?　私はあの子と精神関係も肉体関係もありません!!」
「あたしだって別にそんなこと思ってないけど、毎度あんたの否定が必死すぎてかえって怪しく思えてきたわよ!!」
　難しい顔をして一人考え込んでいた慧(え)理(り)那(な)が、ついに確信を持ったように意見を出した。
「彼らなりの、フェアプレー精神ではないでしょうか。期間を設けて目一杯自分たちは特訓するから、その間、ツインテイルズも鍛えなさい、と」
「なるほどな。そう考えるとしっくりくる」
　穿(うが)って考え過ぎだったか。
　裏表のない連中だ、言外のメッセージもそのくらいシンプルなものだろう。
　全員分の紅茶を注ぎ終えた桜(さくら)川(がわ)先生も着席し、
「ちょうどいいじゃないか。これだけ期間があれば、かなり余裕を持って強化合宿の計画を立てられるぞ」
　理事長にも言い含められていた合宿の件に話を移した。愛香もそれに同意する。
「そうね。いつ来るか神経尖(とが)らせないで外出できるのは、ありがたいわ」
　そっか。
　普通に考えればこれは——
「俺たちが夏休みを満喫できる、チャンスなんだよな」

　この数か月、いつ何時出撃しないといけないかを、ずっと頭の隅に留とどめて過ごしてきた。
　今、〝ツインテイルズの夏休み〟が、思わぬ形で訪れたってことじゃないか。
「よし、善は急げだ。今日中に、いつからどこに行くか、決めちまおう」
　宣言したはいいが、やっぱり愛香の憔しょう悴すいぶりが気になって仕方がない。
「……なあ愛香、お前今日、だいぶやつれてないか？」
「今朝、夢見が悪かったのよ……。何か知らないけどむさい男たちの楽しげな笑い声が聞こえて……起きたら、無性にエレメリアンをブチのめしたい気分になったわ……」
　えっ、通常営業じゃないのか、それ……。
　だが夢の話題が出たことで、俺はエレメリアンの夏休み宣言のインパクトで忘れてしまっていた、大事なことを思い出した。
「そうだ、トゥアール。ものは相談なんだけど、合宿先……異世界じゃ駄目かな？」
「異世界!?」
　愛香が驚いて振り向く。
　この世界に骨を埋うずめると言ってくれたトゥアールに、あえてまた異世界へ行くことを提案していいものか迷ったが……俺は、今日見た〝夢〟の内容をみんなに話した。
「不思議な夢を見てさ、でもどうやらそれが夢じゃないみたいなんだ。ツインテールの女の子と、その中で繋つながって……」
「なんですってえええええええええええええええええええええええ!?」
　愛あい香かが絶叫する。
「み、観み束つか君、なぜわざわざ夢で!?」

「いいんです総そう二じ様、年頃の男性ならそういう夢を見て当然です！　さあ、詳しい話を聞きましょうか!!」

　愛香とトゥアールと慧え理り那なが、机によじ登る勢いで詰め寄ってくる。

　とにかく言われた通り、ロロリーから聞いたことを詳しく語った。

　戦いが終わったので、他の世界のツインテールの戦士と会ってみたいのだと。

　話を聞き終えた後、トゥアールは妙に残念そうにした。

「ええっ!?　つまり要約すると心だけですか、繋がったのは!?」

　他に何が繋がるというんだろう……。

　あ、そうか！

「そうそう、俺たちの世界とその子の世界は、トンネルで繋がってるって言ってた。だから、移動はそんなに難しくないんじゃないか、って」

　戦いが終わって平和になった自分の世界に同じ境遇の人を招待したい、という彼女の厚意に、甘えてみたいと思う。

「せっかく招待されたんだし、その子の世界に行ってみたいんだ。トゥアール」

「なるほど。興味深いですね。異世界から思念だけを飛ばすなんて、考えたこともありませんでした。属性力エレメーラは心の力なのですから、不可能ではありませんね」

　さすが科学者としての好奇心が刺激されたのだろう、トゥアールは乗り気になってくれた。

「総二様、その子の身長と年齢、どのぐらいでした？」

「多分、テイルレッドと同じかほんの少し大きいくらいかな。小さな子供だったよ」

「行きましょう。招待を受けたんですから、絶対会いに行くべきです!!」
……ここで食いつきが三〇倍くらいになるのが、少し不安だ……。
「そうだ、これ。トゥアールならわかるか？」
ロロリーの意思に導かれるように筆記した、妙な数式の羅列をトゥアールに見せた。
トゥアールは一目見ただけで、それが何なのか理解したようだ。
「……これ、世界移動に必要な位置情報です。何も知らない総二様が勘で書けるはずはないので……どうやら、招待するというのは間違いはありませんね」
「位置情報って……そんな簡単に他の世界の場所がわかるの!?」
愛香も紙を覗のぞき込んだが、俺と同じで全くわからないらしい。
「一度世界間を移動するとわかりますが、異世界の場所を特定すること自体は、実はそんなに難しくないんです。ただ、ではその世界に行ってみようとなった時、座標と座標を固定するのが非常に時間がかかる。むしろ、できないことの方が多いんです。その子の言うようにすでにトンネルで繋つながっているのであれば、その点がクリアされますので、話は簡単です」
そうか。じゃあ、本当に行けるんだ。異世界に。
愛あい香かは腕組みをして立ち上がり、溜ため息いき交じりに言った。
「期日に余裕を持って帰ってくるわよ。それが条件」
「それはもちろんだけど……いいのか？　そんなあっさり決めて」
俺の鼻先に指を突きつけ、愛香は続ける。
「そんな夢まで見て反対されたら、そーじがもやもやするだけでしょ。珍しい虫探しに森に行くみたいで子供っぽいけど、夏休みらしいっちゃあらしいし。あたしはいいわよ」

　喩たとえはともかく、たしかに、未知のツインテールへの探求なのだから、動機はその通りだ。

「愛香……サンキュ」

　慧ぇ理り那なもしっかりと頷うなずいた。

「わたくしは行き先が異世界なら、大賛成ですわ。もうこんな機会はないかもしれませんから、この目で見てみたいのです」

　その凜り々りしいツインテールに強い意志を宿らせ、慧理那は続けた。

「話でしか聞いたことのない、ここではない世界、ここではない地球を……」

　確かに、もうこんな機会はないかもしれない。

「よし、それじゃあツインテール部の夏休みの合宿は、異世界で決まりだな！」

　俺と慧理那とトゥアールは力強く拳こぶしを掲げ、愛香もやれやれと言いつつ小さく挙手する。

「善は急げです。私が世界を渡る時に使っていた移動艇を引っ張り出しましょう。メンテナンスが必要になりますが、すぐ終わらせます。三時間後に基地に集合です！」

　ドライブに出かけるような気軽さで、トゥアールは言ってのけた。

　三時間で世界移動の準備が終わるのか、相変わらずすごい技術だな。

「何人乗りなのよ、ちゃんと四人乗れるのそれ？」

「四人って何だ、私も行くぞ。ツインテール部の顧問じゃないか。合宿の引率だ」

　桜さくら川がわ先生がトゥアールと愛香の間に割って入り、子供のように自己主張する。

当初の肩書きをどんどん忘れそうになるメイドさんに、俺は溜息をついた。

「いやせめて、先に慧理那の護衛って言ってくださいよ……」

いくら夏休み宣言があったとはいえ、時間には余裕があった方がいい。

今日中に出発するという提案には誰だれも異論は挟まず、一旦解散となった。

◇

慧ぇ理り那なと桜さくら川がわ先生は、傍かたわらに大型のトランクを携たずさえて、俺の家に集合した。

トゥアールと愛あい香かを見ると、バッグの大きさはほどほどだ。

だがバッグの中の荷物を確認しているトゥアールを見ると、白衣のポケットの怪奇現象と同じように、明らかに収納限界を超えた量が取り出されていく。

「勝負下着一でしょお、これが勝負下着二……切り札に勝負下着九、そして何と言っても極めつけは勝負全裸！　そう、この私です!!」

「いちいちお泊まりセットを開けて見せるな――――――――ッ!!」

愛香のキックで天井高く飛ばされるトゥアール。

トゥアールは桜川先生のトランクの上にお腹なかから着地すると、その勢いのままキャスターを使って通路を滑り走っていった。本能に突き動かされるように、それを追いかける愛香。

すげえな、二人のどつき漫才もこ慣れてきて、締めにさらに小コントまで挟むようになってきたぞ。

「津っ辺べさんもそんな見事なキックができるのですから、必殺技のキックを作りましょう!!」
　愛香の蹴りに目を輝かせ、慧理那が提案する。
　せっかくの申し出にも愛香は何の関心も持たず、やんわりと断った。
「悪いけどあたしのキック、トゥアール専用なの」
「超嬉うれしくないんですけどその独占契約!?」
　五人揃って地下基地のコンソールルームに入ると、定位置の玉座風椅い子すに母さんが座っていた。
「やっほ～、遅いわよみんな」
「え!?　何で母さんが!?」
「異世界に行くんでしょ？　母さんも連れてって」
　つい数時間前に部室で話しただけの最新情報が、当然のように掌握されている……。
　さっき泊まりで合宿に行くとは伝えたけど、行き先までは言ってないのに！
「部活の合宿に母親同伴とか、勘弁してくれよ!!」
　しかも、いつもの悪役風衣装ではなく、戦艦の艦長のようなピシッと全身にフィットしたスーツだ。この短時間で作れるわけはない、前々からこういうチャンスを窺うかがっていたんだ。
　母さんとツーカーの仲であるトゥアールは、もちろんすぐ母さんの擁護に回る。
「まあまあいいじゃないですか総そう二じ様、あと一人増えても全然問題ないですから」
「積載定員を問題にしてんじゃないからな!?」
「まあまあいいじゃない総ちゃん、異世界に行ってみたいだけで、あとは母さん、出しゃばらないで書き割りに徹するから。みんなの

邪じゃ魔まはしないわ、せっかく若い男女で旅行なんだし」
　お任せください、と胸を張るトゥアール。
　旅行じゃなくて、合宿なんだけどなあ。
「母さん、店はどうしたんだ？　ちゃんと臨時休業の札出してきたのか？」
　自宅への鍵かぎはかけてきたが、店の方は開けっ放しかもしれない。
「大丈夫大丈夫。『私が二四時間以上店を離れる時は、〝渦うず〟に身を投じている時だから、お店をお願い』、って頼んであるの、常連さんに」
「セルフどころかもう半ば共同経営になってるじゃねーか!!」
　この前も、恋れん香かさんが客層にだいぶ戸惑ってた。
「もう一いち見げんさんお断りの域も超えてるだろ、うちの店……」
「常連さんに『招待』された新規のお客さんも、気に入って足あし繁しげく通ってくれてるわよ？」
　あっけらかんと答える母さん。特殊なお客さんのダベリ場では収まらず、ごく普通の人にまで瘴しょう気きを浴びせ、仲間に引ひきずり込む場になりつつあるのが、心配だ……。
　トゥアールの後に続いてコンソールルームを出た俺たちは、基地の中でもまだ一度も立ち入ったことのないブロックへと案内される。
「ここからは工場ファクトリースペースです」
　基地もそうだけど、何で普通の一軒家の地下深くに、工場が建設されているんだ……。
　中は薄暗く、奥が全く見えない。電気をつけないところを見ると、サプライズを演出しようとしているのだろうか。
　入り口のすぐ近く、壁の一角だけがライトアップされ、操作端末

が設置されている。
「まず先に、今ここでどんなものが製作されているか、お見せしますね」
　トゥアールがリモコンを操作すると、壁が開き、中からコンソールルームのものより二回りほどサイズの小さいモニターが現れる。
「テイルイエローのブレスが完成した少し後から、時間を見つけてちょっとずつ製作を進めていたんです。まずありえないとは思えますが、超巨大サイズのエレメリアンが現れた時の迎撃手段カウンターとして」
　モニターの左半分がさらに縦三分割され、そこに三つの乗り物が表示された。
　まず、ジャンボジェット……いや、大きな二つの主翼と、その付け根から垂直に伸びた副翼。ジェット戦闘機か。ボディからキャノピーに至るまで、鮮やかな赤でカラーリングされている。
　もう一つは、戦車だろう。砂漠迷彩デザートを通り越した真っ黄色のボディカラーに、銀に煌きらめく前方の巨大な二対のドリルが印象的だ。大小様々な銃火器で武装している。
　最後のは……何だろう、冷蔵庫を二つ縦に並べてくっつけたみたいなフォルムだ。バスか、電車か？　塗装は真まっ青さおだが……。
「ツインテイルズの大型支援メカ。スカイトゥアール、ランドトゥアール、アクアトゥアールです。テイルブレスからの属性力エレメーラ供給で稼働します」
「まあ、まあまあまあまあまあ！　ロボですの!?　合体ですの!?　合体しますの!?」
「もちろん合体しますよ～」
「素晴らしいですわっ!!」
　慧え理り那なが子供のように目をきらきらさせながら、モニターに

食いつく。
　そんな慧理那を見ていると、俺まで嬉うれしくなる。
「慧理那は本当に、合体好きだよな」
「はい、わたくし、合体大好きですわ!!」
　はしゃぐ慧理那を見て、トゥアールと母さんが目配せし合い、無言で頷うなずき合う。
　……声を録とったのか、また。何に使ってんだ毎回。
　愛あい香かが、納得いかないとばかりにモニターを指差した。
「ちょっとトゥアール。この、アクアトゥアール……って、色からしてテイルブルーのマシンでしょ？　何よこの羊よう羹かんみたいな見た目、これだけデザイン適当すぎるじゃない!!」
「潜水艦です潜水艦。水圧対策でやむなくこの形状になりました」
　鼻をほじりかねない適当な生返事で、愛香の追及をかわすトゥアール。
　この世界の常識に限って言えば、潜水艦や海底探査船が流線型を多用したり球体だったりするのは、水圧に強い形状だからのはずなのだが……異世界では違うのだろうか。
　愛香が乾いた声でトゥアールに質問した。
「で、本当の理由は？」
「どーせ足の部分ですし、海用のマシンなんて、一番活躍の機会がないただの合体専みたいなところあるじゃないですか。おまけに愛香さんが乗るとくればもう、抜けるだけ手を抜かなきゃって、逆に使命感が湧いてきますよね」
　すっかりお馴な染じみの習性を悪用され、愛香に本音を引き出されてしまうトゥアール。
「あんたの足も、あんな綺き麗れいな直方体にしてあげるわ」
「挟んだり擦こすったり多彩な使い道予定の私のふとももが

――――っ!!」
　愛香とトゥアールがじゃれ終わるまで、俺と母さんと慧理那はモニターを見ていた。
　桜(さくら)川(がわ)先生だけはそんなに興味がないようだが、まあ、普通の反応はこうだろう。
「では、いよいよお見せいたしましょう」
　焦(じ)らしに焦らしながら、トゥアールが工房の照明を全灯した。
　モニターの光で少し慣れていたが、それでも薄暗い部屋が急激に明るくなったことで、視界が一瞬ぼやけた。
　しかし、それを差し引いてもやけに眩(まぶ)しいのは、目の前の物体がライトの光を満遍なく全体で反射していたからだと理解する。

　――――巨大なトゥアールの顔が、目の前に出現していた。

「巨大ロボですわ――――――――――――――――っ!!」
　慧(え)理(り)那(な)が走り出し、ロボを囲う安全柵にしがみつく。
　俺たちが今立つここは、工場の最上階に位置する場所だったようだ。
　数階層にわたるタワーファクトリーは中心が空洞になっており、そこに巨大ロボットが直立していた。
　俺も男だ。基地に格納されたロボットを目の当たりにし、本来なら今の慧理那のように大はしゃぎしていたかもしれない。
　しかし、リアクションが愛(あい)香(か)たち側の「絶句」に傾いてしまった理由は、当の巨大ロボットの頭部にあった。
　潔いほど真ん円(まる)オンリーのシンプルな瞳(ひとみ)は、ゆるキャラかアスキーアートを彷(ほう)彿(ふっ)とさせた。よおく目を凝らすと、その真円の奥にコックピットが見える。

　俺も、慧理那のように囲いの柵に近づいた。

　深すぎて足元まで見えないが、頭から下は普通のロボット然としている。

　先ほど見せてもらったマシンが、どんな常軌を逸した変形・合体をすればこうなるのか想像もできないが、この頭部が童心を冷まし、現実に引き戻す。

　合体前の原色はほとんどなくなって、白や銀色ばかりになっているし。

「これぞ三機のテイルマシンが合体したロボット。双(そう)房(ぼう)合体トゥアールオーです!!」

　口が逆三角の笑顔で固定されたそのロボットと全く同じ表情で、トゥアールが自信満々に紹介する。

　慧理那が、ここにいる四人分絶賛してくれていた。

　好きなジャンルではあるだろうが、ニヒルにかっこつける方が好みな母さんのリアクションは、それなりだ。

「早速これに乗って、エレメリアンと戦いましょう!!」

　慧理那はもう、乗る気満々だが、トゥアールがやんわりと止めた。

「これは、まだまだ全然未完成ですので」

「そうなのですか!?　ほとんど完成しているように見えますわ」

　しゅんとする慧理那には悪いが……助かった。

　まかり間違って稼働できると言われでもしたら、相手が等身大の敵でもこれに乗って出撃すると言って聞かなかっただろう。

　そして、容赦無く踏み潰して倒すという大スキャンダルを、お茶の間に提供していたはずだ。

「ツインテールのロボットにしたいんですが、今の私だと、自分が身につける物以外でもツインテールを作ることはできないみたい

で。画竜点睛を欠くわけにはいきませんから」
「そうですか……」
　その理由を聞いて、慧理那も納得したようだ。
　ツインテール属性を失ったトゥアールは、自分自身だけでなく、他の人や物をツインテールにすることさえできないのか。
　それがマネキンのウィッグだろうと、鋼鉄のロボットだろうと──。
「トゥ、トゥアール。あたしにできることがあったら、手伝うから」
　それまで興味なさげにしていた愛香だが、その切ない吐露に触発されてか、協力を申し出た。
「ふふ、それじゃあ愛香さんには、もしいつかこれが完成したら、試運転の戦闘相手になってもらいましょうかね～」
「な、何よ、パイロットなんでしょ!?」
　微笑ましい友情に、俺も思わず口許がほころぶ。
「さ、次に行きましょう」
　トゥアールがリモコンを操作し、モニターに表示されていたシステムがシャットダウンしていく。
「……ん？」
　何となくモニターを最後まで見つめていた俺は、モニターが暗転する前に表示された英文字が気になった。
　ＧＯＯＤ-ＢＹＥとか、お決まりの言葉の前に、ＡＡＳＦと書かれていた。
「ＡＡＳＦ……？　ＡＡＳなら確か、前にもトゥアールの研究室で見たな。アン……」
　──アンチアイカシステム。
　トゥアールが、愛香と戦うために作っている発明のシリーズだ。

　Ｆ……Ｆ…………Ｆｉｎａｌ。
　Ａｎｔｉ-Ａｉｋａ-Ｓｙｓｔｅｍ-Ｆｉｎａｌ。

「…………………………………」
　背中を冷たい物が伝う。
　まさか。
　あの巨大ロボット・トゥアールオーは、巨大なエレメリアンが現れた時のためにに作っていたんじゃなく……。

　一人真実を識しり、足取りの重くなった俺を置いて、みんなは囲い柵の外周を歩いてロボの後ろ側に回った。
「で、トゥアールオーの支援メカ……いわゆる二号ロボになるはずだったのが、これです」
「これは……」
　もう一つは、大型の乗り物だ。
　大きさは陽よう月げつ学園の体育館に、ぎりぎり収納されるぐらいだろうか。
　正面が角張った台形……ライトバンのような形の全体に、大きな左右の主翼が折り畳まれて上を向いている。
「私が世界間を旅するのに使っていた小型戦艦。スタートゥアールです」
「何でいちいち全部にあんたの名前がついてんのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　ここまでツッコむのを耐えた反動か、愛あい香かのシャウトがいつもより一・五倍くらい長い。
　色々寄り道をしたが、トゥアールが説明したかったのはこの戦艦

のようだ。
「構想では、これを四番目の支援メカに改造するつもりでした。こちらは複数合体ではなく単独変形で巨大ロボになり、最終的にはトゥアールオーと合体してグレートトゥアールオーになります」
「素敵ですわ――――――――――――っ!!」
　慧え理り那ながトゥアールに抱きつく。
　構想なのに……。
「う、嘘うそ、こんな簡単に慧理那さんが手に入るなら、もっと早く教えておくんでした……」
　慧理那を邪悪な目で見始めたトゥアールは、愛香と桜さくら川がわ先生という一騎当千のタッグによって無慈悲に排除された。
　スタートゥアールも、テイルブレスを動力源に動くそうだ。コックピットブロックと居住ブロックに分かれているのは、長い間これで旅をしてきたからだろう。
　荷物を積み込み、全員がコックピットに搭乗する。
　操縦席に座ったトゥアールの後ろで、母さんが力強く腕を突き出して叫んだ。
「発進準備よ、トゥアールちゃん！」
「了解です、未み春はる艦長!!」
　ノリノリだなあ……と呆あきれていたら、さらにすごい子がいた。
「きゃー！　きゃー!!　壁に大きなボルトですわ！　タラップがありますわ！　窓からの景色が発進感満載ですわ!!」
　慧理那が興奮して初めて新幹線に乗った幼児のようなテンションになっているので、俺もヤケクソで一緒になって盛り上がっておいた。
　リフトが下降していき、ターンテーブルで一回転。
　正面のゲートが上下開きと左右開きで奥へ奥へと交互に展開し、

カタパルトが完成した。
　……地下だよな、ここ。
「スタートゥアール、発進!!」
　完全に艦長になってしまった母さんのコールと共に、スタートゥアールは異世界へと旅立った――。

キャラクター名鑑 017

津辺恋香（つべれんか）

RENKA T BE



DATA

性別：女

年齢：19歳

誕生日：4月1日

身長：159㎝

体重：49㎏

B88・W57・H84

愛香の姉で、大学生。優しく家庭的でスタイルも抜群と、愛香の短所を全て払拭した最上位互換といえる存在。幼い頃から愛香と総二との仲を応援している。そのためなるべく二人の邪魔にならないように、家が隣同士でも不必要に総二に会わないようにするなど様々な配慮をしている。愛香も憧れの姉の応援に報いることができるよう頑張っているのだが、実は……？ツインテールにはしていないが、一応興味はあるらしい。

第二章　ツインテール・トラベラー。

「………………誰だれも見送りしてくれない……」

　ドス黒いオーラを立ち昇らせ、椅い子すの上で体育座りし、親指の爪を噛かむイースナ。
　基地の奥に陣取った自室での、恒例の暗黒スタイルに、メガ・ネプチューンＭｋ．IIはやれやれ、とお手上げのポーズを取った。
「貴の三葉ノー・ブル・クラブから連絡来たんやろ？　ちゃんと通信したりや」
「……貴の三葉ノー・ブル・クラブは……問題児が多いから……」
　首領直属部隊の一角、貴の三葉ノー・ブル・クラブから、ダークグラスパーへと連絡が入った。逃亡した反逆のエレメリアンの向かった世界を、追跡の末に特定した──部隊をあげて確保に向かう、と。
　本来ならこの連絡がある前に、ダークグラスパーも出発していなければならなかったのだ。
　未いまだに基地に残っているのは──部下からの、盛大な見送りを期待していたからだった。
〝しばらく基地を離れなければいけない〟
〝かなりの大がかりな仕事になりそうだ〟
　廊下ですれ違うエレメリアンたち一人一人を引き留め、同情を買うような言い回しで語り聞かせてきたのだが、その先にあるはずのものがないのだ。
　基地を離れようとするダークグラスパーを、全員で涙ながらに見送るセレモニーが。
　おかげでメガ・ネは、何度も準備して出撃口に向かうも、「今日

は気分が乗らない」というイースナの我儘につき合わされ、その度に部屋にトンボ返りしていた。
「寄せ書きとか、花束とか……くれない……」
　しかも、黙っていればどんどん要求がつけ上がっていく。
　苛立たしげに金属の足を踏み鳴らし、メガ・ネはそれでも何とか優しく言い聞かせた。
「あんなあ、今生の別れでもあるまいし、そんなん当たり前やて。普通にしてくれるんも、みんなの思いやりや。まさか、その反逆者に負ける気やないやろ？」
「と、当然……。でも、命懸けの任務だって言ったのに、誰も心配してくれない……」
「めんっどくさい子やなあ！　もう今日！　決まり！　今日行くで今日!!」
　しぶしぶダークグラスパーに変身し、部屋を後にするイースナ。
「よし。最後にもう一度だけ、皆の元へ行くとしよう」
「ホンッマに！　これで最後やで!!」
　メガ・ネは溜息をつき、腰の収納箱からにゅるんと着ぐるみ衣装を取り出す。
　ゆるキャラ・メガネドンに変装し、ダークグラスパーのあとに続くのだった。

　ダークグラスパーがそっと入ったホールは、張り詰めた静寂に包まれていた。
　兵たちは一様に押し黙り、カッ、カッ、と、ペンが液晶パネルを擦る音だけが響いている。
　ダークグラスパーに気づいたビートルギルディが、一礼で迎える。

「どうだ、ビートルギルディよ。兵の訓練は順調か」
「は。こうしてテイルブルーを描き続けることで恐怖と相対し、成長しております」
　少しずつだが、皆、いきいきとテイルブルーを描けるようになってきていた。
　そう簡単に画力自体は向上しないが、明らかに、苦手意識は薄れてきている。
「確かにな。誰しも、〝象徴〟にこそ恐怖を抱くものじゃ。鬼には角を。悪魔には、翼を。死神といえば鎌かまじゃ。絶対の存在には、それらを象徴するものが必ず何か存在する」
「御意に。テイルブルーも自身の貧乳を気にしているようですが、それ以上にこの者たちが、残虐の象徴として認識し、恐れている……。そう考えたのです」
「うむ、その判断は正しかろう。これで心置きなく、留守は任せられる」
　ダークグラスパーはホール前方へと移動して兵たちを一望し、おほん、と咳せき払ばらいをした。
「皆、少しだけ手を休めてくれ」
「こ、これは、ダークグラスパー様！　申し訳ありませぬ！」
　一斉に立ち上がり、上官への礼を尽くす。
「よい。それだけ稽けい古こに身が入っていたということじゃ。じゃが、旅立つ前に今一度、皆に伝えておかなくてはと思っての」
　え、まだ行ってなかったの!?　という無言の戸惑いが部屋を包むが、全く気づかずにダークグラスパーは続けた。
「実はな、首領様より非常に重要な任務を賜たまわってのう。しばらくこの世界を離れることになった。わらわの留守の間、指揮はビートルギルディたちに任せる」

　とっくに聞かされていたことだが、厳粛な態度で受け止める一同。
　彼らの頭上で、諸手で万歳をするオーラが立ち昇っている。
「しかも……この戦、いかにわらわとて無傷では済まぬだろう。あるいは……貴様たちと今生の別れとなるやもしれぬな……」
　一言も発せずに押し黙る面々。
　だが、言葉もないほどショックを受けているというより、勿体ぶって言われた割にこれまた何度も聞かされたことなので、リアクションに困っている、という雰囲気だった。
「今生の、別れじゃッ」
　少し感情を込めすぎて聞き取りづらかったか、と、ダークグラスパーはホールの隅にまで届くよう大声で繰り返した。
「左様でございますか」
「名残惜しゅう」
「やけに温ぬくいと思えば、私の尻しっ尾ぽが液晶タブレットの上に……あ、ご武運を」
　最敬礼で見送る戦士たちに、ダークグラスパーの怒号が飛ぶ。
「貴様らなんじゃその淡泊なリアクションはあああああああああああああああ!!」
　部屋の入り口で、メガネドンがよよよ……とすすり泣き、ヒレで目元を拭ぬぐっている。
「カオシックインフィニット……！　全員まとめて属性力エレメーラの深しん淵えんへと堕おちよ!!」
「お止めを、ダークグラスパー様！　内輪もめで兵を減らせる状況ではありませぬ!!」
　ダークグラスパーの神ゴッド眼め鏡がねが発光し始めたので、ホッパーギルディが慌てて制止する。

「くそう、もう征(ゆ)くのじゃ！　帰ってきた時に何の進歩もなくば、貴様らの持つエロゲー全て、ＯＰムービーで紹介されるヒロインの立ち絵をわらわに書き換えてくれるからな！」

　上官の出征の締めとしてはあまりにも情けない捨(す)て台詞(ぜりふ)を残し、ダークグラスパーは走り去っていった。

　一方、通路では早足に歩くスワンギルディを、スパロウギルディが必死に呼び止めていた。

「考え直せ、スワンギルディ！　お前がツインテイルズと戦うには、まだ時期尚早だ!!」

　スワンギルディは立ち止まって振り向くと、面(おもて)に慚(ざん)愧(き)をにじませて言った。

「ビートルギルディ様の指示で、今侵攻は完全に停滞しております。時間が空きすぎればその隙(すき)にツインテイルズがこの基地を突き止め、攻め入ってくるやもしれません」

　スワンギルディ自身、修行はまだ不完全であると自覚している。出撃しても、おそらく時間稼ぎが関の山だろう。だが、その時間稼ぎこそが今必要なのだ。

「これまでの戦いでわかっていよう！　テイルレッドと一対一の戦いを望み、彼女がそれを受けて立ったとしても、必ずテイルブルーの横(よこ)槍(やり)が入るのだ！　奴(やつ)は情も義もまるで持ち合わせておらぬ、破壊の化身ぞ!!」

　多くの戦士の敗れる様を見てきたスパロウギルディの言葉は、誰(だれ)よりも重く響いた。

「それでも私は！　私の我(わ)が侭(まま)を受け入れてくれた隊に、恩を返したいのです!!」

　若き男の熱き決断を、自分には止められない──スパロウギルディ

が肩を落とした、その時。

　幸か不幸か、ダークグラスパーが手を振りながら近づいてきた。

「おうスワンギルディ。やっと見つけたぞ」

「ダ、ダークグラスパー様……件(くだん)の、任務はいかがされましたか」

「うむ。これより出立する。しばらくはメールもできなくなるが、許せ」

　スワンギルディの戦士としての成長は、目を見張るものがある。

　今までの彼ならば、ここで喜びを顔に出してしまい、怒りを買っていただろう。

　だが、血吐き血飲む修行の日々が、彼に揺るぎなき鉄(てつ)面(めん)皮(ぴ)を与え給うた。

「このスワンギルディ、ダークグラスパー様の武運長久を祈っております!!」

　上司のあしらいを覚え、出世コースに足を乗せた新入社員特有の完全演技にてくるんだ礼を捧げる。スパロウギルディも遅れて頭を下げた。

　ホールでの一件の溜(りゅう)飲(いん)も多少下がったのか、満足そうに頷(うなず)くダークグラスパー。

　その後に余計な置き土産をせずに去ることができないのが、彼女が未(いま)だに部下の信頼を獲得できない要因だった。

「ようし、スワンギルディよ。しばしの別れじゃ。三〇分以内に、わらわに激励のメールを五〇通送れい。むろん、全て文面を変えてな。それを胸に、わらわは旅立とうぞ」

「は」

　絶句するスワンギルディだが、それを快(かい)諾(だく)と受け取り、ダークグラスパーは去って行く。

　ダークグラスパーが廊下の角を曲がり、視界から消えた途端。

　スワンギルディはふらりとよろめき、そのまま壁に頭から突っ込んだ。

　慌てて抱き起こすスパロウギルディ。

「し、しっかりするのだスワンギルディ、私も文面を考える！」

　考えようによっては、命(いのち)懸(が)けの時間稼ぎよりもさらに過酷なミッションが、幕を開けた。

　幸か不幸か。送り終わる頃には精も根も尽き果て、出撃する余力は残らないだろう──。

　　　◇

　スタートゥアールのコックピットでは、皆思い思いにくつろいでいた。

　操縦はすでに機械制御で、トゥアールも手持ちぶさたにしている。

　コックピットのウィンドウから見える景色には、見覚えがある。出撃ゲートをくぐり、現場に到着するまでの間視界に広がっている、揺らぐ極彩色のマーブル模様だ。

「トゥアール。異世界までのトンネルって、いつも出撃に使ってるゲートと同じなのか？」

　意外にも、トゥアールの答えは否定だった。

「全く別物です。こちらは人体に有害な物質で満ち(あふ)れていて、テイルギアでも耐え続けるのは難しいでしょう。ただ、人間の知覚できる限界の色彩として、このように映るみたいです」

「マジかよ……」

「この移動艇だって、技術の大半を搭乗員の防護に割り振っているだけの、ただの箱のようなものですから。思念だけを飛ばしたロロリーちゃんは、理に適かなっていますね」

　操縦席のモニターから小さなアラームが鳴って、トゥアールがそちらに視線を向けた。

「……あ、そろそろ着くみたいですね」

　欠伸あくび半分で講義を聴いていた愛あい香かが、驚いて目を見開く。

「まだ出発してから三〇分も経たってないわよ!?」

「時間の概念がない空間ですから。普段の出撃で転移にかかる時間を思えばむしろ……」

　トゥアールの説明の途中で、コックピットが大きく揺れた。

　機体の右半分が、脱輪して溝にはまったように沈んだのだ。

「今、かなり揺れたわよね」

　愛香が、咄とっ嗟さに身構える。再び、今度は反対に左側が沈むように揺れた。

　操縦席のモニターへ駆け寄ったトゥアールが、血相を変えて言った。

「トラブルのようです！　目的地に近づいた途端、制御できなくなりました！」

　最初は慌てていた母さんだが、揺れが大きくなりトゥアールさえも動揺し始めた今となっては、逆に嬉うれしそうに手を顔の前で組んでいた。

「やだわ、戦艦に乗って制御不能になるって、憧あこがれのシチュエーションの一つだったの！　また叶かなっちゃったわ!!」

「今後叶わないように避けて行動するから、一度母さんの憧れ全部箇条書きにしてくれよ！」

　ことここにきてようやく、自分の母が恐るべき死の予言者デス＝プロフ

エッセスだったことを思い知る。
「もう空間転移ドライブアウトしてる……!?　どうして!?」
　眼下を見下ろす暇ひまもなく、スタートゥアールは真っ逆さまに墜落していった。

「……みんな、無事か？」
　俺は席を立って、全員が無事であることを確認して回る。
　といっても、機体が地面に激突する瞬間の衝撃は、拍子抜けするほど微々たるもので、皆シートにしがみつく程度でやりすごせたようだ。この機体も防護装置アブソーバーが優秀なのだろう。
「すみません、皆さん。メンテナンスは完かん璧ぺきだと思ったんですが……」
　恐縮しきりのトゥアールに、逆に俺の方が申し訳なくなる。
「とんでもない。トゥアールの作ったものだったからこそ、みんな怪け我が一つせずに無事だったんだ。着陸にちょっと揺れただけだって」
「ありがとうございます、総そう二じ様。ただ、原因がメンテナンス不足だけだったらまだわかるんですが……どうも、大きな力で干渉されたような感じがしたんです」
「大きな力って……まさか、属性力エレメーラか？」
「いえ、気のせいでしょう。それよりうっかり機体の立て直しにマジになって、墜落のどさくさにおっぱい押しつけるチャンスをスルーしてしまったことの方が、心残りです」
　マジになったおかげでみんな助かったと思うのだが、トゥアールは笑って誤ご魔ま化かした。
　幸い、墜落したのは平原のようで、他に被害はなさそうだ。
　俺は、生まれて初めて訪れる異世界の景色を見ようと、窓に駆け

寄った。
「……普通だ……」
　抜けるような青空。森と、草原と、平野。普通の風景だ。
「だいたいこんなものですよ？」
　さすがいくつか世界を旅してきただけあって、トゥアールは慣れているようだ。
「いや俺、異世界ってーと、地面が水晶でできてるような場所を想像してた」
　異世界の概念についての説明は、覚えているんだ。あくまで〝平行世界〟だと。
　でもやっぱり別の世界となれば、ファンタジックな光景を期待してしまう。
　たとえば、人間の言葉でしゃべる動物がいたりとか、な。
「問題はこの先ですね。ロロリーちゃんは、お城で待っていると言っていたんですよね？」
「ああ。もしかしたら、お姫様のような立場かもしれない。ドレスを着ていたし」
　考えてみれば、「来てね」と言われただけで、詳しい場所は知らされてないんだよな。
「一番反応の強い属性力エレメーラを探せば、居場所が見つかるんじゃない？」
　確かに、ロロリーもツインテールの戦士なんだから、それが確実だよな。
　俺も愛あい香かの提案で決まりだと思ったのだが、トゥアールの反応は芳しくない。
「艦載の小型探査機を飛ばしてみますが、人工衛星〝ようじょ〟に比べて属性力エレメーラの探知精度が大きく劣るのが難点です。運良く

キャッチできればいいのですが……」

　俺たちの世界で打ち上げた、困った名前の人工衛星がないんだよな、そういえば……。それが基地の属性力エレメーラ探知器サーチャーと連動して初めて、瞬時に正確に探知することができるらしいからな。

　トゥアールはパネルを操作し、艦載の探査機を空に向け射出した。

「でも、一定年齢以下の女の子の探知精度は本家の衛星にひけを取りませんので、ご安心を」

「なんでそのアホ機能のリソースを属性力エレメーラ探知の強化に回さなかったのよ!!」

　愛あい香かは怒っているけど、ロロリーを捜すにはうってつけなんだよなあ。……残念ながら。

　飛ばした探査機は数十分で戻り、トゥアールはこの世界の調査結果を説明し始めた。

「不思議な世界ですね。海の割合が九五％以上を占め、大陸は着陸したここ一つだけです」

「ほぼ海だけじゃねーか、どういう世界だ!?」

　そうなると文明の進み方も、俺たちの世界とはかなり違うんじゃないだろうか。

　トゥアールはモニターに示された情報を一通り検あらためめ、むむ、と小さく唸うなる。

「大きな属性力エレメーラは無事キャッチできたようですね」

　基地で見慣れた光景だ。属性力エレメーラを示す光点が、モニターの地図上に表示されている。さすがにこの短時間の空撮では建物レベルでの描画は無理なようで、お城かどうかはわからない。

「しかも、同じ場所に二つあるようですね……。認識攪乱装置イマジンチャフのようなもので属性力エレメーラを隠匿されていたら、手の打ちよう

がありませんでしたから、まずは一安心です」

　強力な属性力エレメーラが同じ場所に二つ……ということは、確かに信憑性が高いな。

「その方もわたくしたちと同じく、自分自身のツインテール属性と変身するためのツインテール属性とで、二つ持っているということでしょうか？」

　慧ぇ理ㇼ那なも俺と同じことを思っていたようだ。

　俺たちはブレスと合わせれば都合、二つのツインテール属性を持っていることになる。

「どうでしょう……その変身システム自体が、私のオリジナルですからね。場所は……歩いて行けそうですし、とりあえず行ってみましょう」

　みんなもトゥアールの意見に賛同し、当面の予定は決まった。愛香が念のため質問する。

「トゥアール、このまま外に出ても平気？」

「他の惑星じゃないんですから、全然問題ないですよ。大気も汚染されていません」

　全員が身支度を調える中、母さんだけはシートに座ったまま動こうとしない。

「あれ？　母さんは行かないのか？」

「母さんは、戦艦に乗って異世界に行くっていうことが目的だったし、これ以上出しゃばらないわ。しっかりね、総そうちゃん。夢に出たその子を連れて帰ってくるぐらいの意気込みで！」

「まあ、留守番してくれるなら、いいけど……」

　山盛りの機械を見てほくそ笑んでいるのが物もの凄すごく心配だが、武器はないとトゥアールも言っていたし、ボタン押し癖も余計な事態を招きはしないだろう。……多分。

俺たちは母さんに留守を任せ、スタートゥアールの外に出る。

ここ毎日辟へき易えきとしていた日差しが、ここではとても穏やかだ。

「……ここが、異世界なんですのね……」

空気を胸一杯に吸い込んで、慧理那が呟つぶやいた。

「ああ。俺たち、異世界に来たんだよな」

戦ふ艦ねの中から見た限りでは、普通という感想しかなかった。現に、踏みしめる草の感触も、頬ほおを撫なでる緩やかな風も、俺たちの世界と変わりない。

でもやっぱり、不思議な高揚感がある。普通な景色なのに、幻想的だとさえ感じる。

トゥアールも最初に訪れた世界で、こんな感慨を味わったんだろうか。

桜さくら川がわ先生が、トゥアールから端末を奪……受け取った。

ざっと測量された地図が映り、ロロリーの居場所と思おぼしき場所が表示されている。

「よし、それじゃあ行こう。あくまで合宿だから、羽目を外しすぎないようにな」

どうしても先頭を歩きたいらしく、顧問の桜川先生のあとに続く。

ちょっとしたハイキング気分で、ツインテール部一行の合宿が始まった。

雑談交じりに何分か進んだ時。

慣れ親しんだ気配が、津波状に連続して頭に叩きつけられたように感じ、俺は足を止めた。

続いて先頭の桜川先生が、何かに気づいてみんなに注意を促す。

「むっ……止まれ、みんな。何か来るぞ」

　薄く土煙を上げ、地面を揺るがして殺到してきた黒い塊。

　――――それは、無数のゴリラだった。

「何よ、このゴリラの大群……ここ、サファリパークのド真ん中なの？」

「いや、よく見ろ愛あい香か、ただのゴリラじゃない!!」

　さっきの気配の正体はこれか。

　ようやく、ここが俺たちの住む世界とは別の場所だという実感が湧いてきたぜ。

　目の前に現れたゴリラたちは、すだれのように全身が毛深い。

　そのあり余る頭部の毛を束ね、ツインテールにしていたのだ。

　明らかに、俺たちの地球の生態系と枝を別している。しかも……。

「友好的な雰囲気じゃあ、なさそうだな」

　桜川先生が軽く舌打ちする。

　全身を叩く、野生の殺気――。

　今すぐにでも俺たちに飛びかからんと、剛毛の下で筋肉が強こわ張ばっているのがわかる。

「そーじ。桜川先生も。あたしが取りこぼした分はお願いね」

　愛香は軽く肩を回すと、臨戦態勢に入った。

「何で野生動物の大群前にして、返り討ちにする気満々なんだよ!!」

　愛香のじいちゃんが、後悔してたことがあった。腕白になりすぎた愛香に手を焼き、山に連れて行ったら、怯おびえもせずに野生の熊を倒してしまったそうだ。……当時、弱冠一〇歳。

　儂わしはただ、上には上がいることと、野生動物の怖さを教えたかっただけなんじゃ、と切々と語るじいちゃんと一緒に、体育座りで夕焼けを見たことを思い出す。

「本人も希望していることですし、ここは愛(あい)香(か)さんに任せて私たちは先に行きましょう」

　愛香が前に進み出たのをこれ幸いと、トゥアールは俺たちを連れ先に進もうとする。

「言ってみればこれは、群れゴリラとはぐれゴリラの抗争です。人間の私たちが立ち入る問題ではありません！」

　愛香はすかさずトゥアールの首根っこを掴(つか)まえ、ゴリラたちの前に突き出した。

「やっぱりこの数相手に素手では分が悪いわね、盾(たて)くらい装備しなくっちゃ」

「ギャ――やめてください離してください私が美少女だからって掴まえてビルに登る気ですねこのゴリラ!!」

　ゴリラたちが戸惑っているのがわかる。人間でさえ、この二人のやりとりは上級者向け過ぎて困惑することがあるからな。それも当然だ。

　二人がいつも通りじゃれている隙(すき)に、一頭のゴリラが動いた。

　毛の中から何かを取りだし、サイドスローで大きく振りかぶる。

「！　ブーメランだ!!」

「きゃあっ！」

　慧(え)理(り)那(な)が悲鳴を上げる。

　荒く削られた、木製のブーメラン。

　その正体に俺が気づいた時には、すでに無防備な慧理那目掛けて放たれた後だった。

「はっ!!」

　桜(さくら)川(がわ)先生が慧理那を背中へ庇(かば)いながら、足を振り上げる。そのままブーツの踵(かかと)で、飛来したブーメランを踏みつけるという荒技を見せた。

　ただ避(か)わすだけでは、旋回して相手の手元に戻る。そうならないよう初撃で制圧しなければいけないとはいえ、一瞬でもタイミングを間違えれば足を吹っ飛ばされていた。すごい度胸だ。
　慧理那の護衛に徹している時のこの人は、こんなにかっこいいのに……。
「つがいがすぐに見つかる野生動物ごときが、婚期を焦るアラサーに勝てると思うな。ハングリーさが違うのだ!!」
　ゴリラに面と向かい「私はお前よりぅえている」と言い放つ知人の猛勇に、目頭が熱い。
　野生動物をまるで畏(おそ)れない野女二人に立ちはだかられ、ゴリラたちもぅ闊(かつ)には動けない。
　均衡を崩すように、一際大きなゴリラが一頭、前に進み出た。
　片方の目が刃物傷で塞(ふさ)がっている。結んだツインテールの見事さといい、こいつがこの群れのボスだろう。ちょうど、トゥアールシールドを装備した愛香と向かい合う形となる。
　ボスゴリラは愛香を指差して吠(ほ)え猛(たけ)り、威勢よく胸を叩く行為─ドラミングを始めた。
　勇ましい轟(ごう)音(おん)が、大気を震(ふる)わせる。
　……挑発だ。
　普通のゴリラはドラミングで敵を威(い)嚇(かく)するというが、この知能の高いゴリラは少し違う。
　愛(あい)香(か)の平たい胸を見て、相手も打音に自信ありと見たのだろう。
　果たし合いを所望しても戦意を見せない剣士に、目の前で余技を披露してぁぉり、剣を抜かせようとするように……挑発しているのだ。
　さあどうする、愛香───!!

「……」

　愛香は左手で摑つかんでいるトゥアールを降ろさずに、右手で握り拳こぶしを作った。

　そしてそれを、自分の胸に軽く打つ。

「ぽよん」

　聞こえるはずのない音が、聞こえた。

　唇くちびるを一文字に引き結んでいるが、明らかに今の擬音は、愛香の声だ。腹話術の要領だろう。奇しくも、パペットのようにトゥアールを持っている。

　お聞きの通り、あたしの胸は柔らかくてドラミングなんてできないわ。諦あきらめなさい。

　無言のドヤ顔がそう語っているが、当人以外、人間もゴリラも呆ぼう然ぜんとしていた。

「どうせ私の胸を代わりに叩くんだろうと思って身構えてたら、想像を超える斜め上を来ましたね……」

　泡を吹きそうになって痙けい攣れんしているトゥアール。ぶっちゃけ、俺もそう予想していた。

　トゥアールの頭脳の上を行くとは……。愛香の進化が、留とどまるところを知らない。

「ウウ……」

　唸うなり声を上げるゴリラ。

　あのゴリラのツインテール……不安に震ふるえてはいないか……？

「待て！」

　俺は、トゥアールシールドを装備した愛香に下がってもらう。

「ここは俺に任せてくれ、話し合ってみる」

「そーじこそ、何言い出してんのよ⁉」

「見ろ、愛香。あのゴリラたちのツインテールを。邪心のかけらも

ない。突然現れた人間に不安を感じただけで、決して敵意はないはずだ」

　人間と同じだ。誠意を伝えるためには目を見て話すが、相手がツインテールなら、ツインテールを見て話すのが一番だ。

「────ツ、ツインテール……」

　俺が辛抱強くツインテールを見つめていると、ゴリラがはっきりとそう言った。

「うおっ、何だあ!?」

「ゴリラが喋しゃべった──────────っ!?」

　一歩後ろで構えていた桜さくら川がわ先生と愛香が、驚きの声を上げる。

　しかし何な故ぜだろう、俺にはそんな予感がしていた。

「お前、ツインテール、か」

　たどたどしいしゃがれ声だが、ボスゴリラの言葉はしっかり聞き取れる。

「すごいな、お前。男のままでも、俺のツインテールが見えるのか」

　人語を話せることよりも、俺はそっちの方に驚いた。

　たとえエレメリアンのように属性力エレメーラを感知できる生命体でも、今の俺のツインテール属性は、テイルブレスの認識攪乱装置イマジンチャフで遮断されている。

　つまり、純粋な野生の勘で、俺の中のツインテールを感じ取ったのだろう。

　ボスゴリラは棍こん棒ぼうを下ろし、俺の目を真まっ直すぐに見て言った。

「お前、笑わない、のか」

「笑う？　何を？」

「人間、俺たちのこと、笑う。ゴリラがツインテールにする、おかしい、笑う」

　そうか、こいつらは人間のツインテールを見て、憧あこがれて……覚えたのか。

　俺は、ボスゴリラのツインテールをあらためてじっくりと見た。

　乾燥した蔓つるのようなものを紐ひも代がわりにして、ツインテールを結んでいる。

「努力したんだな。わかるよ」

　ツインテールを綺き麗れいに結ぶことの難しさを、つい最近俺も知ったばかりだ。

「でもな、人が笑うのは決して嘲あざけりだけじゃないんだ。いいものを見て、嬉うれしく思ったって笑う。お前たちを見て自然と笑顔になった人が、たくさんいたと思う」

　もちろんみんながみんな、そうじゃないだろう。

　だけど、動物が人間を真ま似ねようとしてくれるって、嬉しいことじゃないか。笑顔になるよ。

「お前たちのツインテールは、本物だ。俺が保証する。そりゃあ、可愛かわいいとかはさすがに違うにしても……すごく、かっこいいぜ。こう見えても俺、ツインテールに関しちゃなかなかのもんなんだ」

　威い嚇かくするように唸うなるゴリラたちを、ボスゴリラはその大きな手を振って合図し、鎮めた。

「こ、こいつ、嘘うそ、言ってない。俺、わかる」

「……男のハリウッド俳優がツインテールにしようとしても、受け入れられるわけだわ……」

　後ろで愛あい香かがげんなりしているが、桜さくら川がわ先生ともども、警戒は解いたようだ。

「その子、ごめん」

　ボスゴリラは部下が攻撃した慧理那（えりな）に謝ると、嘆願するように俺を見上げてきた。

「人間、嫌い。でも、ツインテールは、好き。……人間、ツインテールに戻って、欲しい」

　アルティメギルの侵略で、この世界にはツインテールが少なくなってしまったんだろうか？

「大丈夫。この世界の戦いは終わったんだってさ。狙（ねら）われないようにやめてしまっている人も多いかもしれないけど、じきに戻るさ」

　俺はゴリラを精一杯励ました。大丈夫、ここは戦いが終わった平和な世界なんだから。

「いくらツインテールでも、ゴリラは困りますー。本当この世界、どうなってるんでしょー」

　俺の真横で、全身真っピンクな痩身（そうしん）のエレメリアンが、ゴリラをじっと見ていた。

「うおわあああああああ!!」

　慌てて飛（と）び退（の）く。なんでゴリラ目当てで、エレメリアンが現れるんだよ！

「――いや待て！　そうじゃない、そもそも何で、エレメリアンがいるんだ!?」

「あら!?　あらあら!?　あなたたち、ツインテールじゃないですかぁ!?」

　すぐさま、俺の後ろにいる愛香（あいか）や慧理那（えりな）たちのツインテールに気がつくエレメリアン。

　まずいぞ。こっそり撮影されてるかもしれないし、エレメリアン

の目の前じゃ変身できない。
「うーん、変ですねー、こんなに見事なツインテールなのに、これっぽっちもツインテール属性が感じられません」
　愛香たちを、しげしげと観察するエレメリアン。
　こう言われてもまだ、安心はできない。自分の属性と結びつけて狙おうとする奴やつもいるしな。こいつは、何の属性のエレメリアンなんだ……!?
「ああ、怖がらないでください、別に危害は加えませんってー」
　言うだけ言ってエレメリアンは踵きびすを返し、後方に現れたゲートの中に消えていった。
「……残存兵か？」
　そう推測する。隊長を倒した後に残った、下したっ端ぱかもしれない。
「ロロリーはすっかり戦いが終わったと思って安心しきってる。危ないな」
　慧理那も同意見のようだ。
「早く会って、このことを伝えましょう！」
　愛香はエレメリアンの消えた方を見つめたまま、無言で立ち尽くしていた。
「愛香？　行こう！」
「……そうね。確かに、会わないといけないみたいね。そのコに」
　心なしか、愛香のツインテールから、不信感のようなもやもやを感じた。

◇

　広大な平原を抜けるとようやく、現代日本ではテーマパークなど

でしかお目にかかれないトンガリ屋根のお城が見えてきた。周囲には、かなり栄えた街並みも窺うかがえる。
　休憩も兼ね、街を見ていくことを俺は提案した。
「本当に普通ね……街も」
　城下街に着いての、愛香の感想。
　感受性豊かな慧理那は疲労も忘れて感動しきりだったが、俺も愛香と同じ感想だった。
　俺たちの世界の日本と同じような建物ではなく、西洋風建築に近い街並みだが、とりたてて目を見張るような造形ではない。いい意味で、予想通りの光景なんだな。
　しかし、その普通の街を歩く人々の方は、違和感だらけだった。
　右を見ても、左を見ても。いたるところに、ポニーテールの女性を見かける。
　いや、女性だけではない、男性もだ。老若男女の区別なく、ポニーテールだらけだ。
　逆にツインテールの人は、ただの一人として存在しない。露骨すぎる。
　唖然としていた俺たちだったが、こちらに向かって歩いてきた人と、目が合ってしまった。
「…………!?」
　一回視線を背けた後、さらに口をあんぐりとさせて二度見。大仰なリアクションでその人が俺たちを見たせいで、周囲の人々の注目を一斉に集めてしまった。
　明らかに、愛あい香かや慧え理り那な、桜さくら川がわ先生のツインテールに驚き、注視している。
　飲んでいるジュースを吹き出したり、歩道で電話していた人が笑顔から一転真顔になって携帯電話を落としたり、ポニーテールのお

ばあちゃんが跪ひざまずいてナンマンダブナンマンダブと唱え始めたり、コテコテの驚きリアクションの波状攻撃に、俺たちの方が怖くなってきた。

「い、急ごうか」

　俺がそう告げると、全員無言で頷うなずく。

　おかしい。この世界はやっぱり、何かがおかしい。背後から突き刺さるような視線を感じながら、真まっ直すぐにお城を目指した。

　街を抜けてお城へと辿たどり着き、俺はトゥアールに今一度確認を取った。

「トゥアール、ここで間違いないのか？」

「はい、強力な属性力エレメーラの反応があります。彼女のもので間違いないでしょう」

　変だな。属性力エレメーラは感知しているというが、俺にはツインテールの気配が全然感じられない。

　さらに近づくと、立派な城壁と、固く閉ざされた鉄の扉が目に入る。

　正面には、年は俺より少し上ぐらいだろうか……門を守るように立つ女性が二人。

　陽光を受けて煌きらめく銀の甲かっ冑ちゅう。俺たちにとっては伝え聞く歴史かフィクションの中でしか見ることのできない存在──まさに〝騎士〟だ。

「動くな!!」

　門を挟んで右側に立っていた騎士の女性が叫び、俺たちに向かって近づいてきた。

　頭を覆っているのがバイザー状の防具だけなので、その美しいポニーテールが映はえる。

　結び目が高い上に髪が長いので、歩みに合わせて揺れるポニー

テールは迫力満点だ。
「姫様のお膝ひざ元もとでツインテールにするとは、畏おそれ多い無法者どもめ。この場で処しょ髪ばっする!!」
　騎士はいきなり白はく刃じんを抜き放つと、慧理那に振り下ろした。
　俺は女性の腕を籠こ手てごと握り摑つかみ、抑えきれぬ激情と共にその怜れい悧りな双そう眸ぼうを睨にらみ据えた。
「貴様、何をする!?」
　騎士が叫ぶので、慧え理り那なが不安そうに俺のシャツの裾すそを握ってくる。
「何をするんだは、こっちの台詞せりふだ。まさか、慧理那のツインテールを斬きり落とそうとしたんじゃないだろうな……？」
「さ、さすがにそこまではしない！　警告にリボンを狙ねらったんだ……」
　剣を振り回しておいて、騎士はバツが悪そうにしている。
　手に伝わった衝撃からして、確かに脅しだったのだろうが……だからどうした。
「リボンを切ったら、ツインテールじゃなくなるだろうが!!」
「ええっ……何だこの男は、同じ人類と会話をしている気がしない!!」
　俺が逆らったのを見たからか、門の左に立っていた騎士も足早に接近してきた。
「あ、あのー、あまり妙な真ま似ねはしない方がよろしいかと……」
　こちらの騎士の方は、ポニーテールの結び目が低く、長さも短い。髪のボリュームに引っ張られているわけではないだろうが、自信なさげな小声で俺に警告してきた。
「妙な真似をしようとしたのは、そっちだろう！　ツインテールに手荒な真似をするな!!」

「うう、同じ人類と会話をしている気がしないです……」

怒り心頭ながらも努めて理性的に受け答えしたのに、なんて失礼な騎士たちだ!!

愛(あい)香(か)はゴリラの次は人間か──とばかりに、桜(さくら)川(がわ)先生とともに身構える。

その時、城門が重厚な音を立てて開き始めた。

「待て！　その者らは、ボクたちの客人だ!!」

門が開ききる前に身体(からだ)をくぐらせ、桃色のドレスを着た幼い少女が俺たちの前へ進み出た。

「おっ……おおっ！　やっぱり夢じゃなかったんだな！」

夢で見た少女──ロロリーを見て、俺は安(あんど)すると同時に合点がいった。

俺がツインテールの気配を察知できないわけだ。何(な)故(ぜ)かツインテールを解(ほど)いて、白いリボンだけでポニーテールにしている。

「総(そう)二(じ)様、これはＡ級認定待ったなしですよ……異世界に来た甲斐がありましたね！　しかもボクっ娘(こ)じゃないですか、トゥアール賞です!!」

トゥアールはロロリーを見て飛び上がって喜び、異次元の表彰をし始めた。

ロロリーのポニーテールは、髪を横で束ねる、サイドポニーと呼ばれるタイプのものだ。

一見無造作に束ねているようでその実、ツインテール好きの俺でも見事だとわかるほど、彼女の髪型は完成されていた。

右結びのサイドポニーと顔の輪郭が描く三角形はまさに、黄金比の体現。

華美なドレスすらサイドポニーの添え物だと言わんばかりに、可視化されたオーラが放たれている。テイルレッドとそんなに変わら

ない幼い子供なのに、圧倒的な存在感だ。

「申し訳ありません、姫様……」

　騎士二人は剣を収め、ロロリーに深々と頭を下げた。

「護衛の騎士の非礼を詫わびる。さあ、城へ案内しよう」

　よく響く幼い声は、少年のようにはきはきと快活だ。

　口調がやけに物々しくなってるけど、きっとここでは立場上、そうするしかないんだろう。

　夢の中で甘えてきた時とのギャップで、思わず吹き出しそうになる。

「普段はサイドポニーにしているんだな。……もしかしてこの世界は、アルティメギルに狙ねらわれないように、今までツインテールを隠していたのか？」

　街の奇妙な光景も、アルティメギル対策だったとしたら少しは納得できる。

「うん？　ツインテールなら、法で禁止しているが」

　平然と言い放つロロリーに、何か違和感を覚えた。

「法って……いくら警告でも髪に剣を向けるなんて、この人たちはやり過ぎだぞ。髪は女の命って言うだろ？」

　夢で会った時に、髪を撫なでて欲しいと言ってきたことを思い出す。あの時のようにくだけた態度になってくれればと思い、俺はそのふわっとしたサイドポニーに手を伸ばした。

「あっ、待て、やめろ‼」

　血相を変えて叫ばれたが、何を拒否されているのか思い至らず、俺はそのままロロリーの髪を手の平で掬すくい上げた。

「わ――――――――――――――――っ‼」

　髪に触れた瞬間ロロリーは冷や水に飛び込んだように全身を震ふるわせ、俺から飛とび退のいた。

「ああ、な、何て畏おそれ多いことを……!!」
　騎士の女性二人が、額に手を当てて卒倒する。
　顔を真まっ赤かにして寒気立つロロリーに、俺はわけもわからずに謝った。
「え……ごめん、何か嫌いやなことをしちゃったか？」
　自分のサイドポニーを抱き締めるように両手で包みながら、ロロリーがきっと俺を睨にらむ。
「よくもボクの純じゅん髪ぱつを汚してくれたな、この大罪人め!!」
「…………………………は？」
「キミたちは知らないだろうが！　この世界ではっ……父親以外に初めて自分の髪の毛を触った男性を、夫とするというしきたりがあるんだ!!」
「───カルチャーショックすぎる……」
　俺は魂が抜けて倒れそうになったが、ぎりぎりで踏み堪たえる。
「いや、そもそもあの時は君の方から髪の毛を触ってくれって言ったんだぞ!?　そんな大事な決まりがあるなら、何でその時に言ってくれなかったんだ!?　思念だったからか!?」
　トゥアールが腕組みをしながらうんうんと頷うなずいている。
「さすがですね総そう二じ様。一回ヤらせたんだから、あとは好きな時に好きなだけヤらせろ。そうです、男の子はそのくらい強引でいいんです!!」
「無む理り矢や理り変な言い方にしてんじゃないわよ!!」
　ロロリーは涙目になりながら、
「……あの時……？」
　まるで記憶喪失にでもなったかのように、俺の言葉を反唱した。
　その時。
「お兄ちゃ──────んっ!!」

　聞き慣れた甘え声がこだまし、俺たちは一斉に門の方を見た。
　ロロリーがもう一人、また門の向こうから走ってくる。
　驚いて正面を向く。そこにも、俺を親の仇かたきのように睨にらみ続けるロロリーがいるではないか。
「嬉うれしいよう、本当に来てくれたんだね!?」
　もう一人のロロリーが、俺に抱きついてくる。
「えっ……えっ……!?」
　目の前にいる二人のロロリーを見比べ、ようやく俺は会話が噛かみ合わない理由を得心した。
「まさか……君がロロリーなのか!?」
　俺の言葉に、抱きついてきた方のロロリーは元気いっぱいに頷うなずく。
「姉様アアアアアアアアアアアア！　そんな汚らわしい男に抱きつくなんて、駄目だよお!!」
　もう一人のロロリーは、俺に髪を触られた時よりも顔に絶望を湛たたえて叫んだ。



この子たちは、双子だったのか……!!

◇

「ようこそ、異世界の皆様!!」
お城のエントランスでターンし、スカートを摘つまんで可愛かわいらしくお辞儀をするロロリー。
「ふーん、この子が夢に出てきたの。可愛い子ね」
言葉に反して、愛あい香かの機嫌が悪い。来客を迎えるムードではない厳重な警護ぶりだ、無理もない。増員した護衛の騎士は要注意だと思っているのか、やけに俺をチラチラと見てくる。
双子のお姫様を目の当たりにして混乱する俺たちに、自己紹介が始まった。
「紹介するね。この子は、双子の妹のリルナ。そして私の本当の名前は、ロエルだよ」
姉と妹で、表情が対照的だ。
「じゃあ、ロロリーって……」
「ロロリーは、戦う時の名前なんだよ」
なるほど。俺でいうテイルレッドか。思念の時は、変身した状態だったんだな。
二人並んで立っていると、全く区別がつかない。口調が違うだけで、声も全く同じだし。
そのため、色々細かく工夫して間違われないようにしている点が目につく。
姉のロエルは、ピンクを基調としたドレスでも、チョーカーやブーツ、リボンなどが黒く、サイドポニーは左結び。妹のリルナは、逆にそれらが白で、サイドポニーは右結びだ。

「俺たち、強力な属性力エレメーラを目印にここまで来たんだけど、その反応は二つあったんだ。もしかしてリルナも……」
「ええい、話しかけるな！　変質者め!!」
　妹の方は、取り付く島もない。噛かみつかんばかりに睨にらんでくるリルナにガードされながら、ロエルは城の中を案内してくれた。歩きながら、俺たちも一通り自己紹介をしていく。
　居並ぶ豪華な調達品の拝観もそこそこに、最上階の来賓室へ通される。
　慧ぇ理ゥ那なや桜さくら川がわ先生はさすがこのような場に慣れていて落ち着き払っているが、俺は神しん堂どう家所有の無人島で豪ごう奢しゃなコテージを見た時から何の進歩もせず、ただただ緊張していた。
　まるで宝石を加工して造ったような艶えん光こうを放つ円卓を挟んで、全員が着席する。
　愛香が、ロエルたちの後ろに立つ騎士たちを見ながら、穏やかに説得を試みる。
「妹は……リルナ、だっけ？　そーじのやったこと、異世界人だから無効にならないの？」
　リルナは未いまだ顔を真まっ赤かにして怒っていた。
「そんな軽いものじゃない！　異世界人でも、エレメリアンならともかく人間なんだぞ!!」
「……ごめん……」
　掟おきてのことを知らなかったといえ、同意も取らず気軽に髪を触った俺が悪い。頭を下げる。
　愛あい香かは、なおも説得を続けた。
「そーじも軽率だったかもしれないけど、お姉ちゃんの方は自分から髪触らせたっていうじゃない。そりゃ油断もするし、そもそも全然守られてないじゃない、その掟おきて」

　そうなんだよなあ。あの時はロエルが俺たちの世界に来ていたから無効だっていうなら、逆にこっちの世界に来ている俺がすることも無効じゃないのか？
　言い訳がましいけど……。
「ううん、決まりはちゃーんと守るよ！　ロエルは総そう二じお兄ちゃんのこと大好きになったから、初はじ髪めてあげちゃったんだっ。……えへへっ、結婚するんだもん！」
　無邪気に笑いながら、ロエルは俺に可愛かわいいプロポーズをしてきた。
　あの時言った、俺と繋がったって、心じゃなくて婚約のことだったのか？
「姉様アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　リルナは号泣しながら、決して渡すまいとロエルを抱き締め、頬ほお擦ずりを始めた。
　愛香と慧え理り那なが立ち上がり、俺と姉妹を交互に見やる。
「そ、そーじ！　あんた、何そんな落ちついてんのよ!!」
「だって、子供の言うことじゃないか」
　俺は苦笑する。このぐらいの年の子なら、ノリで結婚するとか言ったりもするさ。
　ロエルを指差しながら、腕をぶんぶんと振る慧理那。
「あの目を見てください、本気ですわ！」
　桜さくら川がわ先生が、ロエルに諭すような優しい口調で言った。
「君は子供だから、まだ結婚という言葉に込められた重みを知らないだけなんだ。結婚の申し込みは、そんなに気軽にしていいものではないんだぞ」
　後ろの騎士は、何な故ぜ棒立ちのままなんだ。今こそ大おお嘘うそつき

の罪人をしょっ引く場面だぞ。
　そうか、子供だからというのもあるが、そもそも俺は、もはやプロポーズされるのが日常過ぎて、重くなんて感じられなくなっていたのか。
　……言葉にするとすげー嫌いやな奴やっだ、俺……。
　リルナが、奥歯を嚙かみ砕かんばかりの勢いで歯を食いしばり、俺に憎悪の目を向ける。
「ボクは生涯男に髪を触らせず、姉様と結婚するつもりだったのに！　貴様、ボクを汚したばかりか、あろうことか姉様の髪にまで触っただと！　絶対に許さんぞ!!」
　どちらかと言えば俺は、リルナの方に本気の気迫を感じるんだが……。
　ロエルは唇くちびるに指を当て、うーんと考え込む。
「でも、ロエルとリルナちゃんじゃあ、結婚できないよ？　……えへへ……赤ちゃんも、作れないもん。お兄ちゃんとなら、作れるもーん」
　本当にませた子だな。子供って、こういうことを覚えるとひけらかしたくなるものなんだろうけど。
「いいじゃないか！　お世継ぎなんて、ボクが頑張って姉様の子供を想像妊娠するよ!!」
　……この子はこの子で、変に耳みみ年どし増まだな。
　愛あい香かは歯ぎしりをしながら姉妹を睨にらみ、ドスの効いた声で吐き捨てた。
「帰りましょうそーじ。強化合宿はもう終わりよ。地方ルールを押しつけられて犯罪者にされちゃあたまらないわ」
「そうですわ、わたくし充分異世界を堪能しました！　明日からは地元で特訓ですわ!!」

　珍しく慧(え)理(り)那(な)も不機嫌そうな声だ。
「落ち着け二人とも!!」
　さっきからトゥアールはおとなしいな、と気になって見てみると、身の毛がよだつほど邪悪な笑顔で姉妹を見ていた。
　護衛の騎士もそれに気づいたらしく、姉妹姫に進言する。
「姫様！　その男はともかく、さっきからこっちの女の目つきが怪しすぎます!!」
　もはや憚(はばか)らずに抜刀し自分を警戒する騎士たちに、トゥアールは余裕の表情で返した。
「フッ、これだけハイポテンシャルなロリーズを前に昂(たか)ぶる私を、そんな鈍刀(なまくら)で止められると思っているのですか？」
　あの陽(かげ)炎(ろう)のように揺らめく邪心……。やはりロエルたちは、トゥアールの射程範囲か!!



　トゥアールは白衣のポケットから、ティッシュ箱程度の大きさの何かを取り出した。
「女騎士の御し方など心得ています。女騎士といえば、ある特定の刺激に対しては宇宙一防御力の低い生物。隙すきを見て愛あい香かさんにけしかけようと画策していたこの携帯型触手キット……アンチアイカシステム五号、アイカニュルニュールの敵ではありません」
「私たちはどんな目に遭おうとも、姫様を守り抜く！　心までは屈さぬからな!!」
　騎士の勇猛な宣言も、トゥアールは一言一句余さず想定済みです、と一笑に付した。
　愛香は乾いた声で薄ら笑った。
「よかったわね、それあたしにけしかけないで。その時は手加減できなかったと思うわよ」
　それを見たリルナは涙目で身体からだを縮こめ、俺を糾弾した。
「だ、だいたいお前は何なんだ！　姉様は、ツインテールの戦士を招待したんだぞ！　男はお呼びじゃない!!」
「違うよリルナ、総そう二じお兄ちゃんは、すっごく強い、ツインテールの戦士なんだよ！　ロエルの心が届いたのが証拠だよ？」
「そんな大声で言わないでくれ……」
　騎士たちの俺を見る目が、マッハで不信感を増した。
　だが、話の腰も折れたし、さっきの平原で目撃したことを言うにはちょうどいい。
「ここに来る前に、エレメリアンを見たんだ。ロエル、この世界には、まだ生き残りがいるみたいだから、気をつけた方がいいぞ」
　すると、ロエルから笑顔が消え、悪いた戯ずらを咎とがめられた子供のようにしゅんとしてしまった。
「……あのね、お兄ちゃんに謝らなくちゃいけないことがあるの」

　本当に言いづらそうに躊躇ためらいながら、ロエルは俯うつむいたまま言った。
「この世界……戦いは終わってないんだ。むしろ、相手が強すぎて、ロロリーじゃ、どうにもならなくなっちゃったの」
「何だって!?」
　愛香やトゥアールは、それを聞いてもやけに反応が薄い。むしろ、わかっていたような落ち着きぶりだ。そういえばトゥアールは、不時着の時から何か引っかかっていたようだった。
「だからね、誰だれかにロエルたちを助けて欲しくて、毎晩心を他の世界に飛ばしていたの」
「どうして初めから、助けを求めてくれなかったんだ……」
　問とい質ただす形にならないよう、努めて優しく聞く。
　ロエルではなく、リルナの方がその問いに答えた。
「キミは随分人がいいようだが……誰しもがそうじゃない。もちろん姉様は初めから助けを求めたが、一人も耳を貸してくれなかった。いや、そもそも誰にもそんな余裕はないんだ」
　……確かに。ツインテールの戦士なら誰もが、自分の世界で手一杯のはずだ。
「キミたちの世界は、アルティメギルとの戦いが終わっているのかい？」
「俺たちの世界は今、奴やっらから言いだして休戦中なんだ。数日後には再開するけどな」
「そうか。本当に奇跡のようなタイミングだったんだな……」
　やっとのことで、安あん堵どの表情を浮かべるリルナ。
　ぬか喜びをしないよう、自分を律していたような印象を受けた。
　一体、どれほどの世界に助けを求めたんだろう。どれだけ、気の遠くなるほどに。

「でも一度は、本当に平和になったんだよ。何度目かの戦いで現れた隊長に全く歯が立たなくて、どうしようって思っていたら、あっさり部隊ごとこの世界を出ていっちゃったんだ」
「ところがしばらくしたら別のエレメリアンがやって来て、そいつがさらにデタラメな強さだったのさ。あいつらが何をしたいのか、さっぱりわからないよ……」
　ロエルに続いてリルナも顛(てん)末(まつ)を説明するが、確かにそれだけ聞いても理由がわからない。
「途中で退却、ですか……」
　トゥアールは腕組みをして考え込むと、ロエルとリルナに質問した。
「ロリちゃんの世界に最初に侵攻して来ていた方のエレメリアン……どんな奴(やつ)らでした？」
「ほとんどみんな、巨乳のツインテールはおらぬかー、って言ってたよ。……ロエル、おっぱい小さいから、しゅんとしちゃった」
　ロエルがドレスの胸元の隙(すき)間(ま)に指を引っかけ、俺に見せるように伸ばした。
　愛(あい)香(か)が軽く睨(にら)むが、無言なのは共感しているからかもしれない。
　しかし今、割りと記憶に新しいフレーズを聞いたな。
「トゥアール……巨乳を探すエレメリアンって、まさか」
「ええ。十中八九、リヴァイアギルディとその部隊でしょうね」
「何だ、キミたちもリヴァイアギルディを知っているのかい？」
　きょとんとしているリルナに向かい、トゥアールはにんまりと笑って愛香を指し示した。
「その怪物を素手で血祭りに上げた化け物が、ここにいますよ、ロリちゃん」

「な、なんだとおおおおおおお!?」
……誇張じゃないのが困る。
「リヴァイアギルディとその部隊はロリちゃんの世界を侵攻している途中で招集を受けて、総そう二じ様たちの世界へ増援にやってきたんですね。一度行き来があった世界同士というのはロリちゃんの言う通り空間にトンネルができて、ぐっと移動の敷居が下がるんです」
さっきからトゥアールがシリアスな雰囲気を隠れ蓑みのにして、姉妹の頭文字を合わせた我欲全開の愛称をゴリ押ししようとしている気がする。
しかしそれなら、一度戦っておいてロロリーが見逃された理由も、想像がつく。
俺たちも、戦意を失ったブルーを案じたリヴァイアギルディに、初戦で見逃されたからな。
ロエルは、思い出すことすら嫌いやなのだろう、消え入るような声で敵のことを語った。
「それでね、あとからやって来たそのものすごく強いエレメリアンは、ポニーテール属性なの」
「……ポニーテール!?　そりゃまた……すごい属性だな」
アルティメギルは、ツインテール属性を最優先とする作戦目的上、髪型の属性のエレメリアンの台頭が極端に少ない。
現にケルベロスギルディは、三つ編みの属性であることを理由に引退していたほどだ。
ポニーテールぐらいメジャーな髪型の属性で、強力なエレメリアンが存在するなんて……。
「そいつはツインテール属性を奪われたくなかったら、ツインテールをやめてポニーテールにしろって言ってきたんだ。ロエルはこの

国のお姫様だから、パパに頼んでツインテールを禁止する法律を作ったの。この国のみんなを守るために」

　無邪気な笑顔はなりをひそめ、今悲しげに吐露している少女は間違いなく、世界の平和を憂う戦士であり、民を導く姫だった。

「とにかく、そのポニーテール属性のエレメリアンは俺たちがきっと倒してみせるから、もうツインテールを禁止するなんていう悲しい法律はやめにしてくれ」

　そいつもツインテール属性を奪おうとする以上、変身した俺たちを狙ねらわないはずがない。格好の囮おとりになるはずだ。

「本当か!?　ありがとう……！」

　ようやく俺に笑顔を見せてくれたリルナだったが、すぐにそっぽを向いてしまった。

「い、いや、当然だな！　ボクにあんなひどいことをしたんだ、罪滅ぼしだ!!」

　その時、扉が乱暴に開け放たれ、血相を変えた女性騎士が部屋に飛び込んできた。

「姫様大変です！　城下街まちに、エレメリアンが現れたとの報が！」

　報告を聞いて動揺もせず、リルナは騎士に詳細を尋ねる。

「炎はまとっていなかったそうですので、あのエレメリアンとは別のものかと」

　続けてもたらされた情報に安あん堵どし、姉妹は席を立った。

「行こう、リルナちゃん！」

「待て、俺たちが戦わなくていいのか!?」

「あのエレメリアンじゃなきゃ、大丈夫だよ！　お兄ちゃんも、ロロリーの活躍、見てて!!」

　慌てて制止するも、ロエルは相変わらずの無邪気さを振りまいて出ていってしまった。

　リルナも、姉の後に続こうとする。

「なあおい、リルナも、ツインテールの戦士なのか？」

「見ていたまえ、ボクと姉様の絆を。キミが割って入る隙すきなどない、完全な愛の形をね!!」

　俺の問いに、リルナは意味ありげな笑みと言葉を返し、嬉うれしそうに駆けていった。

　警護の騎士まで出払って、俺たちは部屋に取り残された形となる。

　トゥアールはひとまず納得したが、

「確かに、総そう二じ様たちはおそらく隊長であるそのポニーテール属性のエレメリアンを倒すことだけに専念する方がいいです。私たちも後を追って、お手並み拝見といきましょう」

「あたしたちが見に行ったら、また騒ぎになるわよ？」

　愛あい香かは街での騒動を思い出したようだ。ぬかりは無いとばかりに、トゥアールが胸を張る。

「大丈夫です、簡易型の認識攪乱装置イマジンチャフは常備していますから、これを使いましょう。私の側そばにいればロリちゃん以外は私たちの存在に気づけないはずです」

　あ、懐かしい機械だ。リザドギルディとの戦いの時に使って以来だな。

「よし、行こう！」

　俺たちは、揃ってロエルたちの後を追う。ワンテンポ遅れ、桜さくら川がわ先生もついてきた。

　喧けん噪そうのある場所が目印なのだから、現場には迷わずたどり着け

た。

　すでに多くのギャラリーが集まっており、それは俺たちの世界と変わらない光景だった。

　大型カメラに、中継車のようなものまで。街並みにそぐわぬ撮影機器が姉妹姫を撮っている。

　問題なのは、街の人々のポニーテールだ。ロエルたちの話を聞いた今なら、初めて見た時何に違和感を感じていたのか、はっきりとわかる。

　誰もがポニーテールにしていることが異様だったのではない。誰もが、ほとんどその髪型に愛着を感じていないように見えることに、俺は違和感を覚えていたのだと思う。

　強制されたゆえなのだろう、人々のポニーテールには、活力を感じない。

　悔しいが……ポニーテールが、万人に愛される髪型なのは間違いない。

　シンプルなことで裾(すそ)野(の)が広く、老若男女の誰(だれ)にでも似合うという大きな強み。

　ともすれば、子供専用と誤解される向きのあるツインテールと違い、ポニーテールの知名度は圧倒的だ。

　俺はツインテール以外の髪型は素人だが、昔ツインテールがもっと世に広まるにはどうすればいいか考えていた時、メジャーなポニーテールが羨(うらや)ましくて、研究したことがある。

　房の数が一つか二つかという単純な違いではない、もっと奥深い秘密が隠されているような気がしたのだ。

　気取らずにできるからこそ応用も容易で、決して没個性にならず、魅力を引き立てる。

　素晴らしい髪型だ。

　ポニーテールはツインテールのよき先輩であり、切磋琢磨（せっさたくま）する好敵手のはずではないか。

　ロロリーたちが勝てなかったというエレメリアンは一体、何を考えているんだ。

　いくらそいつがポニーテール属性だとはいえ、アルティメギルの最大の目的は、ツインテール属性を拡散し、奪取することだ。ツインテールをやめさせる代わりにポニーテールを強要しても、結局どちらの属性も芽吹かず、組織にもそいつ個人にも、何のメリットもない。

　これでは、もともとツインテールが好きだった人にとってポニーテールは憎しみの対象となり、反対にポニーテールが好きな人にはあまりにも息苦しい世の中になってしまう。

　ただ、悲劇を生むだけではないか……。

　ポニーテールに溢（あふ）れた世界。しかし異質なのは、人々だけではなかった。

　そこに現れた戦闘員（アルティロイド）もまた、俺たちの世界のそれとは一線を画していた。

「赤い……戦闘員（アルティロイド）!?」

　大勢の戦闘員（アルティロイド）が武器を構え、ロエルとリルナの前に立ちはだかっている。

　その全身は、ペンキをぶちまけたように赤い。見た目は完全にいつもの賑（にぎ）やかしで出てくる戦闘員（アルティロイド）だが、やつらは今まで一度として黒以外のカラーバリエーションは存在しなかった。

「何よ、あんなの見たことないわよ!?」

　愛香（あいか）も混乱している。

「モキュッ」

「モキュー!!」

いつもよりさらに声が甲高い上に、立ち振る舞いも若干違っている。

内うち股またなのを見て、慧え理り那なが驚く。

「女の子の仕草ですわ！」

「じゃああいつら、男の娘属性ガールズボーイの奴やっとかの部下なの？」

いや、ワームギルディたちと戦った時も、戦闘員アルティロイドは黒のままだったはずだ。

ほどなく、街に現れたというエレメリアンもやって来たが、それは見覚えあるピンクのエレメリアンだった。

「どうも姫様こんにちは！　私、チェリーブロギルディと申します!!」

……桜チエリー・ブロッサムだったのか。植物を意匠としたエレメリアンは、初めて見る。

周囲を見渡し、チェリーブロギルディはうんうんと満足げに頷うなずいた。

「いやぁ～、この世界の人たちは実に健康的です！　姫様を見て、よだれどぼどぼですよ！　大人気ですね！」

街の人々が、慌てて口くち許もとを拭ぬぐっている。

条件反射で涎よだれが出てしまうほど、ロエルたちは大人気なのか。

「よだれは健康の雫しずく！　よだれは愛の蜜！　スプリングハズカアアアアアアアアアアム!!」

「……またきっつい属性ね……」

違う意味で春満開な思考回路のエレメリアンに、愛香がたじろいでいる。

「言い得て妙だ。ボクは姉様のために、一日グラス二〇杯分は愛の蜜よだれを流すからな!!」

妹の方は、拭いもせずよだれを垂らして同意している……。

だがこれで、リルナのさっきの思わせぶりな台詞せりふの意味と合わせ、はっきりするだろう。

スタートゥアールの中で二つ探知した強力な属性力エレメーラは……ロエルとその変身アイテムとを合わせて二つ分なのか。もしくは、リルナもロエルと同じく、ツインテールの戦士なのか。

──しかし直後、俺たちはそのどちらでもなく、ある意味どちらでもある、驚くべき光景を目の当たりにした。

ロエルとリルナが、互いの手の平をそっと合わせる。

「「ツイン・コネクト!!」」

その言葉は、俺たちで言うテイルギアの変身機構起動略語スタートアップワードだったのだろう。

全てが瓜うり二つの姉妹。髪の一条まで余さず同調し、眩まばゆい光に包まれ、二人のシルエットが重なっていく。

虹にじの星を散らし、光の雫しずくを振りまき、二つのポニーテールだけが重ならずに新たな生命の脈動に輝いていた。

「ツインテールになった……!?」

重ならずに残った二つのサイドポニーは、一つのツインテールへと生まれ変わる。

「姉妹合体！　ロロリー参上っ!!」

アイドルのように三本指を眼前にかざし、決めポーズを取る。

ギャラリーが沸き立ち、チェリーブロギルディさえ気け圧おされそうになっている。

まさか、国民の前で堂々と変身してみせるとは……。

プラネタリウムのように無数の光玉弾はじけるピンクのドレスが、星の漣さざなみのようにあしらわれたスカートのフリルを風にはためか

せる。

　左右対称のサイドポニーが合体し、ツインテールになるなんて。

「異世界って、すげえんだな……」

　思わず感嘆が漏(も)れる。

　世界が星に、銀河に、宇宙にと内包されてゆくのではなく。逆に宇宙を一つの〝世界〟が内包し、その世界が銀河の星々のように連なっていくという極絶の尺度。

　それを、トゥアールとの出会いで俺たちは知った。

　その中にはまだまだ、俺の想像だにできない未知のツインテールが存在する。

　こんな、ファンタジックなツインテールがあったのか――。

　だが、同時に疑念も湧く。普段はサイドポニーという仮初めの姿の彼女たちが、有事にだけツインテールに合体し、内に秘めたツインテール属性を十全に発揮できるのだろうか？

　俺の懸念を払拭(ふっしょく)するかのように、ロロリーは舞い始めた。

「いくよ……ツインテールウィップ!!」

　ロロリーが手にしたステッキをかざすと、それに操られるようにツインテールがしなる。

「ツインテールが……伸びた!?」

　それも、生半可な伸長ではない。

　彼女たちの小さな身体(からだ)の五倍とも十倍とも、あるいは地の最果てまでも届くと錯覚するほどに伸び、殺到する戦闘員(アルティロイド)たちへ、意思を持ったように向かってゆく。

　赤い戦闘員(アルティロイド)たちがツインテールの鞭(むち)で強(したた)かに打たれ、宙を舞う。

　さらにボレーシュートのように戦闘員(アルティロイド)を落下ざま追撃し、次々に爆散させていった。

「すごいぞ、ロロリー!!」
　合体した方の名で呼ぶと、ファンの声援に応こたえるアイドルのように、ロロリーは決めポーズで振り向いた。
「愛だよ愛！　ツインテールへの愛が、ツインテールに無限の可能性を与えるんだよっ！」
　さっきの声が届いたのか、群衆に存在ごと溶け込んだ俺に向け、ロロリーが信念を語る。
「おおっ!!」
　そんな場合ではないとわかってはいても、俺は一人の観客として、ロロリーを応援していた。
　彼女たちは、たとえ普段のツインテールを奪われようとも決して屈せず、戦う時に姉妹二人でツインテールを解放すると誓いを立てたのだ。
　それが、彼女たちの心の強さなのか。
「素っ晴らしいわ！　合体して乾いたよだれのあと、セクシーよ!!」
「ロロリーはよだれなんか出さないもん！」
　アイドルの清純性を訴えて、ロロリーはチェリーブロギルディに向かっていく。
　チェリーブロギルディが手を薙なぐと無数の桜花弁が飛び出し、それが着弾した地面を地雷のように炸さく裂れつさせていった。
　ロロリーは右に左にと飛び跳ねて爆発を避かわし、滞空している花弁にツインテールの一いっ閃せんを見舞って誘爆させていった。
　そしてチェリーブロギルディの間合いに入り、ステッキを前方に突き出した。
　するとツインテールが砲塔のように頭と垂直に立ち上がり、その毛先に光が集束していく。

「ツインテールビ――――――――ムッッッ!!」
「見ろ、ツインテールからビームが発射されたぞ!!」
　俺は興奮を抑えきれず身を乗り出した。
　愛(あい)香(か)たちも大興奮でかぶりついているかと思えば、全員、目と口を直線にして棒立ちしていた。何(な)故(ぜ)だ、ヒーロー好きな慧(え)理(り)那(な)まで……。
「あつっ！　あっつっ！」
　ビームは必殺の威力こそなかったが、チェリーブロギルディを怯(ひる)ませるには十分だった。
　とどめとばかりにステッキをバトンのように回し、胸の前で構えると、彼女を中心に周囲の大気が吸い込まれ、渦(うず)を巻いていった。
「ひっさあああああああああああつっ！　ツインテールトルネ――――――――――ド!!」
「風はいや――――風はいやよ―――よだれが乾くわ――――――――っ!!」
　ツインテールが生み出した轟(ごう)風(ふう)に呑(の)み込まれ、チェリーブロギルディは爆散した。
　すかさず決めポーズをしたロロリーに、ギャラリーは大興奮だ。
「すげえ!!」
　俺はロロリーのマジカルツインテールについて二時間でも三時間でも語り合いたい勢いで愛(あい)香(か)たちに同意を求めようとしたが、逆に言葉を失って石化してしまっていた。
「なあなあ見たかよ、すげえな！　ツインテールから竜巻が出たぜ!?」
「……あんたにも見えたなら、目の錯覚じゃなかったのね、あれ……」

　俺たちがツインテールの力を科学で引き出して戦うなら、彼女たちは、ツインテールを魔法として使っているかのようだ。
　あくまで優雅に、あくまで愛らしく──。
　血生臭さを断固として拒絶する煌きらびやかなドレスをまとい、魔法を振るう彼女たちは、まさしく魔法少女だ。
　何てバイタリティあふれるツインテールだろう。
　ツインテールをアンカーのように操るイエローに触発され、俺も同じようなことができないかと悪戦苦闘したことがあった。
　結局ツインテールは自分の意思では一ミリも動かず、個人差があるのかと諦あきらめたものだ。
　だが、それが安易な逃げであったと、彼女たちが教えてくれた。
　俺は、縦横無尽にツインテールを操るテイルレッドの勇姿を夢想する。
「もしかして、愛香もビームとか出せるのに、俺に気を遣って隠しているんじゃないか？」
「出せるかあああああああああああああああああああ!!」
　そうか……。ツインテールの熟練者ならできるかといえば、そう簡単な話でもないらしい。

　城に帰った俺たちは、先ほどの戦いについてロエルに質問した。
「すごいじゃないかロエル。だけど、いつもあんな風にわざと戦いを見せているのか？」
　子供ならではの危ういヒロイン願望ならば、止めるべきか──そう思った俺は、彼女の芯しんの強さを目の当たりにした。
「この世界の人たちは元気がなくなっちゃってるから。ロロリーが頑張ってるところを見てもらって、元気になってもらうんだ！」
「そっか……」

　ロエルは、自分にできることを一生懸命考え、実行している。
　子供なのに向こう見ずにはならず、限界を知り、それでもあがいているんだ。
「今度はお兄ちゃんの戦うところも見せてね。お兄ちゃんが一緒に戦ってくれれば、きっとあんなエレメリアンなんてやっつけられるよ!!」
「ああ、任せておけ!!」
　この世界を救いたい。この子たちを助けてあげたい。
　自分の世界を守るだけで精一杯の俺には、身の丈を弁わきまえない願いかもしれないけど……強く、そう思った。

キャラクター名鑑 018

キャラクター名鑑 019

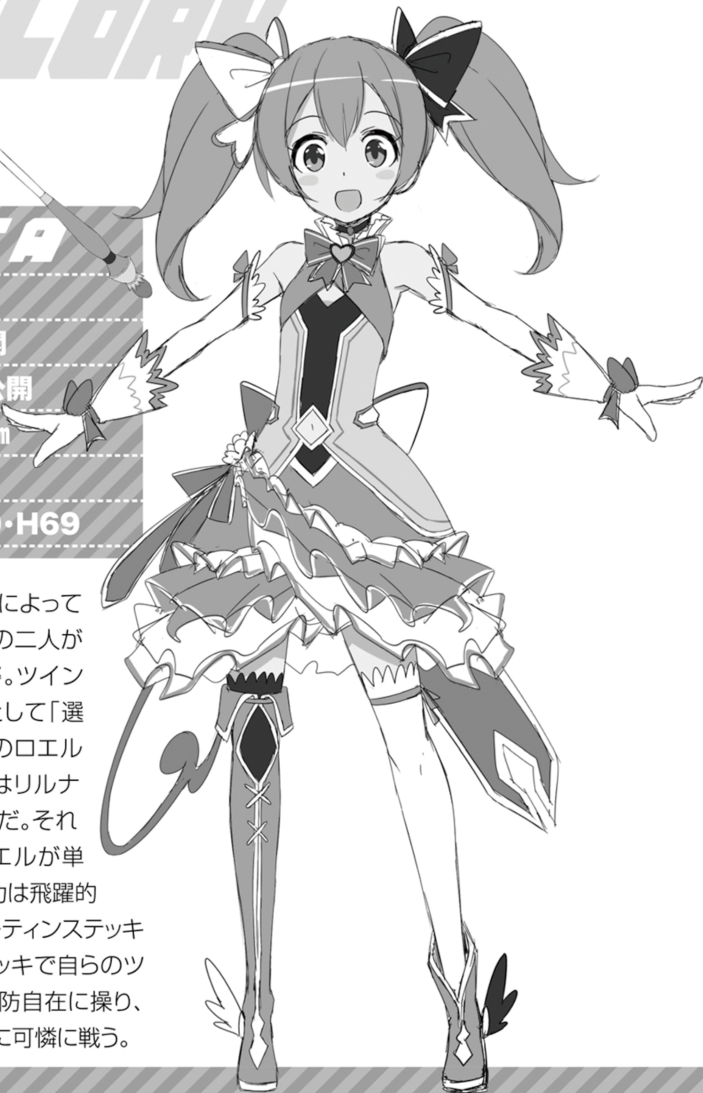


世界を統治する王家の双子姫の姉。世界よりまずツインテールを守ろうとする総二と違い、彼女は国民第一で、自らの正体を明かし戦うことで、国に活気が出ると信じている。妹と反対に純真無垢な子供だが、したたかな面も併せ持ち、男性の総二に興味津々。お兄ちゃんと慕う。

双子姫の妹。姉のロエルへの溺愛ぶりなら、トゥアールたちに勝るとも劣らない変態。覗き・忍び込みは当たり前。姉に対するセクハラは日に日にエスカレートしていく。そんな面も含めて、国民から愛されている。

キャラクター名鑑
020

ロロリー



DATA

- 性別：女
- 年齢：非公開
- 誕生日：非公開
- 身長：137㎝
- 体重：35㎏
- B64・W50・H69

ツイン・コネクトによってロエルとリルナの二人が姉妹合体した姿。ツインテールの戦士として「選ばれた」のは姉のロエルだけだが、彼女はリルナとの合体を望んだ。それは功を奏し、ロエルが単身で戦うよりも力は飛躍的に向上した。ハーティンステッキという名のステッキで自らのツインテールを攻防自在に操り、魔法少女のように可憐に戦う。

第三章　ツインテールとポニーテール。

　俺たちはお城の最上階の来らい賓ひん室で紅茶やお菓子をご馳走になりながら、ロエルや護衛の騎士さんたちとの親睦を深めていた。騎士さんたちも、かなり態度が軟化してくれた。

　この世界の、だいたいの事情は聞いた。まずトゥアールが探査機で調べた通り、陸地面積が限りなく小さいため、世界＝この一国という認識で間違いないようだ。

　そして、文明の進み具合や流行などに関しても、色々と教えてもらった。

　これだけ環境が違うのに、俺たちの世界と多くの類似点があるのが、異世界の興味深いところだな。

　例えば今、俺たちがいるこの城。蓋ふたを開けてみれば最新の家電や電子機器満載で、外装だけお城にしたテーマパークという第一印象は、むしろ的を射ているかもしれない。

　軒先のワイヤーに洋服を干す光景が似合いそうだった城下街の家々でも、きっとごく普通にドラム式洗濯機などを使っているのだろう。

　髪の毛に対する崇敬の念が非常に強く、それゆえに髪型への探求も盛んな世界だったので、アルティメギルが現れる前からツインテールもかなりの市民権を得ていたそうだ。それについては羨うらやましい。

「ロエルさん、リルナさん。あなたたちがお姫様で、国王……王様は今、ここにはいらっしゃいませんの？」

「父上はお年を召していて、実質引退していらっしゃるんだ。今は部下と一緒に、ツインテール禁止令を徹底させるために世界を回っ

ておられるよ」
「パパもツインテールが大好きだったから、つらいと思うんだ。頑張らなくちゃ」
　姉妹が続けて答えたあと、愛あい香かも問いかける。
「でもこのお城、そもそも男の人が一人もいなくない？」
　確かに、メイドさんだけならまだしも、護衛の騎士まで全員女性なのは不自然だな。
「この世界の掟おきては言っただろう。城中の男が王位目当てに叛はん意いを起こして、ボクたちの髪を触るとも限らない。ボクたちは本来なら、婚約が決まるまで男とはここまで近づかないんだ」
　聞けば聞くほど、日常生活に支障が出そうな掟だよなあ。まあ、戒律とかと同じで、それが当たり前になれば、傍はたから見て感じるほどにには気を遣わずに過ごせるんだろうけど。
「つまり、ここの女騎士さんやメイドさんたちは慢性的な男日照りなわけですね。どうりで総そう二じ様を見る目が次第にいやらしくなってきたと思いましたよ。タガが外れても困りますし……よろしかったら、予備のアイカニュルニュールをお貸ししますよ」
　憐れむような目をトゥアールに向けられ、騎士さんたちは猛抗議した。
「だから見くびるなと言っているだろう客人！　私たちは女を捨て、剣に生きるのだ!!」
「そ……そうです、騎士は全員、拷ごう問もんに対する自主トレもしましたー」
「言葉ではそう反論しつつも実は図星で身体からだが疼うずいている生命体が、女騎士！　あなたたちがロリちゃんを守る使命があるように、私も総そう二じ様の身体を守る義務があるのです!!」
　最初の頃ほど緊迫してはいないし、打ち解けてるって解釈してい

いのか、これも。
　俺はトゥアールと言い合いをしている騎士さんに、素直な感想を述べた。
「でも、騎士さんたちのポニーテールは、見事ですね。あなたたちは最初からポニーテールだったんですか？」
「わ、わかるのですか？」
　騎士さんに聞かれ、俺は頷うなずいた。
　ツインテールを日本刀に例えるなら、日本刀の審美だけが得意である俺が、だからといって拳銃を見てそのすごさを何も感じ取れないかといえば、また話は違う。
　技術的なことはわからなくても、なんとなくすごいとは感じるし、子供用の玩具おもちゃの銃と本物なら明らかに区別はつく。
　騎士さんたちは法に従ったのではなく、以前からのびのびとポニーテールにしていたのは、多くがしぶしぶ受け入れたようだった街の人と比べれば歴然だ。
「リルナちゃんはもともとみんなにおすすめしてたよね？　ポニーテールが好きだから」
「えっ、そうなのか、リルナ!?」
　ロエルに衝撃の事実を告げられてことさらに驚く俺を見て、リルナが反論した。
「ポニーテールとツインテール、両方好きだって構わないじゃないか!?　……ボクはこっちの髪型も大好きだぞ」
　そうか、リルナはポニーテールも好きでしていたのか……。
「ねえお兄ちゃん、そっちに行ってもいい？」
　そう言うとロエルは席を立って俺の元へとやって来た。
　椅い子すを引くように俺に頼むと、そのまま膝ひざの上に乗ってくる。

　一人っ子だからかな。こうして甘えられると、妹もいいものだと思えてきた。

「ああっ……いいなあ！　私にもさせてくだ座ざ位い!!」

　トゥアールは俺を見て指を咥くわえて羨うらやみ、リルナへと流し目をした。

「リルナちゃ～ん、いらっしゃ～い。異世界のクッションを堪能できますよ～」

「お前の上に座るなら総二の方がまだマシだ！」

「まあいいです。犯罪スレスレのグッズはたくさん持ってきました、勝負は夜ですね」

　トゥアールが元気になればなるほど、愛あい香かも対抗して活動が活発になるというのが自然界の掟おきてだが、やけにおとなしいな。

　寒気がして横を向くと、愛あい香かは目を逆三角にして。そして慧え理り那なは、唇くちびるを尖とがらせて。俺とロエルを凝視していた。

　吹き荒すさぶ寒波から身を守るためか、すっかり俺の膝ひざの上に居着いてしまったロエルが、猫のようにごろごろして身を寄せてくる。

「お兄ちゃん、国民のみんなの前で、結婚を発表しようよ！」

　幼稚園の先生になった気分だ。俺は苦笑しながらやんわりと断る。

「俺の世界では、男は一八歳にならないと結婚できないんだ。俺はまだ二年も先だよ」

　こんな普通な返ししかできない、ユーモアセンスの無さが悲しい。

　妹のリルナは、結婚は断固として認めない姿勢だ。

「姉様！　男の存在なんてチラつかせたら、ファンが一気に減ってしまうよ!!」

　子供なのに、変なところが現実的だなあ。妹の方は。
「あえて恋人の影をちらつかせるのも、テクニックだもーん」
　……姉は……純粋なはず……。
「それに、お姫様の結婚って、大ニュースだよ。みんな元気になるよ！」
　健気(けなげ)な子だ。この年で、国民のことを何より大切に思っている。
　いつになく真面目(まじめ)な表情で、桜川(さくらがわ)先生がロエルの肩を叩いた。
　普段はおちゃらけているが、俺たちツインテール部の顧問であり、頼れる大人だ。勢いだけの行動で人生を左右しようとしている女の子を、大人として諭してくれるのだろう。
「結婚は許さん！　観束(みつか)との婚約は、私が予約しているからな!!」
　………………そうだ、大人だけどもっとも勢いだけで行動している人だった……。
「予約？　今お兄ちゃんと結婚してるんじゃないんだよね？」
　余裕も余裕なロエル。どちらが大人なのかわからない。
「今は違う！　だが、毎日のように婚姻届(こんいんとどけ)を渡しているから、いつか根負けして夫の欄にサインをするはずだ!!」
　俺の心が折れるのが先か、桜川先生の心が折れるのが先か、というわけか。
　負けてたまるもんか！
　……結婚って、そういう精神勝負だったっけ……。
「お姫様、君はまだ若い。結婚などいつでもできる！　ここは、年長者に譲りたまえ!!」
　ロエルはこの世でもっとも見苦しい年功序列を説く桜川先生をま

じまじと見つめたあと、俺に向き直り言った。

「結婚するなら若い方がいいよね、お兄ちゃん！」

　小さなお姫様の挑発に、桜川先生は獣のように咆ほう哮こうした。

「小娘が言ってはならんことをおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「いかん！　姫様の危機だ、者どもであえー!!」

　血相を変えて桜さくら川がわ先生に飛びかかる、護衛の騎士たち。

　室内に控えていた騎士だけではなく、合図ですぐさま駆けつけた増員までをも相手取り、哀かなしみのメイドの大立ち回りが始まった。

「うわあ、何者だこの女！　格好はメイドなのに、束になっても歯が立たない!!」

「貴様何だこの薬指の指輪は！　騎士が人妻とは片腹痛いわあああああああああ!!」

　教師でもあるはずの桜川先生が、女性の社会進出に一石を投じる暴言を吐き散らし、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ。

　騎士たちは為す術すべ無く、次々に倒れていった。すいません、こんな客人一行で……。

「お兄ちゃーん、また撫なで撫でして～」

　あまりにロエルの仕草が猫っぽいので、ついついサイドポニーを撫でてしまった。

「……お兄ちゃん、ツインテールの時じゃないと、触り方下へ手たっぴだね」

　子供ゆえの、裏表のない感想が突き刺さる。

　何な故ぜだろう。女の子にツインテール以外の触り方が下手だと言われると、男として自信を無くす……。

　大好きな姉が他人とくっついているのが許せないのか、リルナは不機嫌そうだ。

「ボ、ボクだって総そう二じと結婚しなくちゃいけないんだぞ！　髪を触った責任を取れ!!」

　変に姉と対等になろうという意地が働いているのか、張り合うようなことを言う。

「どっちも駄目よ!!」

　ず――――――っとこっちを睨にらんでいて怖かった愛あい香かがリルナに怒ると、慧え理り那なとトゥアールも「そうですわ」「そうです」と同調した。

「決めるのは総二だろ！　キミたちは総二の何だっていうのさ!!」

　リルナに指摘され、愛香、トゥアール、慧理那、桜川先生は思い思いに答えた。

「……あ、あたしはそーじの幼おさな馴な染じみよ」

「私は妻です!!」

「観み束つか君は……その、一応、わたくしの許嫁いいなずけということになっています」

「お嬢様が正妻になれば私も二番目の嫁になっていいと、奥様から許可をもらっている!!」

　トゥアールの主張だけ記憶にないし、桜川先生に関しては俺も仕方のない嘘うそだと受け入れた覚えはないのだが……その凶悪な人間関係の暴露に、リルナはゴミを見るような目で俺を見てきた。

「なんだこいつ!?　重婚しまくりじゃないか、とんでもない悪党だぞ姉様!!」

「男の人にウワキはつきものだよ、ロエル怒らないもーん」

　姫たる器の大きさで、大罪を包み込もうとするロエル。

　むろん、冤えん罪ざいなのだが。

　愛(あい)香(か)が置いてけぼりを食らったように慌てふためき、トゥアールや慧(え)理(り)那(な)に食ってかかる。

「待ちなさいよ何かあたしだけ蚊(か)帳(や)の外みたいじゃない――――――っ!!」

「というわけで、一番関係性の薄いゴリラ女を一人だけ置いて行きますね。この世界の守り神として、末永く役に立ってくれると思いますよ！」

　暴力が来ると思ったのか「きゃっ」と身を屈(かが)めたトゥアールは、寂しそうに唇(くちびる)を噛(か)む愛香を見て、目をしばたかせた。

「あ、あんたは……あたしがいなくなってもいいの……？」

「ちょっ、な、何マジな顔してるんですかこの人っ……リアクションに困るじゃないですか!!」

　そんな二人を見て、リルナが何かを言おうとしたようだが――

　突如、部屋は激しい揺れに見舞われた。

「外から物(もの)凄(すご)い音が聞こえてくる！」

　愛香に言われ、桜(さくら)川(がわ)先生は窓に駆け寄って開け放ち、テラスへと出た。

　場違いな騒音が、由緒(あふ)れる部屋を汚してゆく。

　耳を押さえながらテラスに出た俺たちが見たものは、とんでもない光景だった。

「冗談でしょ、何よあの数……!?」

　眼下に広がる悪夢に、驚倒する愛香。

　それは俺も、他の皆も全く同じだった。

　こちら側から見えるのは、街と反対の広大な草原だが、城壁を挟んだその草原には、大地が蠢(うごめ)いていると見(み)紛(まが)うほどの途方も無い数の人影が集結していた。

　ここが城であることを思えばそれは、圧政に立ち向かう民衆の暴

動を思わせる。
　──だが、その全てがエレメリアンであるなどと、誰(だれ)が信じられよう。
　今までの戦いで、エレメリアンは、共闘するにしろ、覇を競うにしろ、二体までしか同時に現れなかった。
　無数の戦闘員(アルティロイド)と共に最終攻撃を仕掛けてきた時もあったが、それらを引き連れていたエレメリアンはただの一体だ。
　分身でも分裂でもない。ここに集ったのは、別個体のエレメリアンばかりだ。
　まるで獣の嘶(いなな)きのように爆音を響かせ、先ほど見たのと同じ植物のエレメリアンの集団が、バイクや車に乗って編隊を組んでいた。
　いや、編隊というほど統率されていない。
　むしろ、競い合うように居並ぶ姿は、言ってしまえば暴走族そのものだ。
　最後尾が紅(あか)い帯状に見えるのは、今日見たあの赤い戦闘員(アルティロイド)がいるからだろう。
「何十体いる……!?　もしかして、一部隊全部攻めてきているんじゃないのか!?」
　エレメリアンは、押しなべて自尊心の強い奴(やつ)らだ。
　誰(だれ)しもが、ツインテールという名の首(しるし)を我(われ)こそ討ち取る、という鋼(はがね)の気概を持っている。
　だから、奴(やつ)ら自身が数にものをいわせて徒党を組み攻めてくるという今のこの状況が、どうしても現実のものだとは思えない。
　乗っているのは全てが改造車、というよりボディが木材でできたような不思議なバイクや車ばかりだ。
　その中で、御(み)輿(こし)か、はたまたはしご車かと思わせる高い櫓(やぐら)

を搭載した車がある。
　かつてない奇抜なスタイルのエレメリアンが、その上に立っていた。
「特攻服トップク!?」
　特攻服を身にまとった、植物のエレメリアン。頭の上には、巨大な斑まだら模様の花弁が傘かさのように開いている。
　そのエレメリアンが、城に向かって大声で叫んだ。
「チェリーブロギルディのケジメェつけにきたぞオラァ！　さっさと出てこねえか!!」
　それに呼応するように、バイクを空ぶかしさせ、けたたましい騒音を重ねていく周りのエレメリアンたち。
　慧ぇ理り那なが耳を両手で押さえながら言った。
「どうやら、仇あだ討うちのつもりのようですわね……」
　いや、それでも解げせない。そもそも仇討ちなんて言ったら、ほとんどの戦いがそうだ。
　あいつらは、もっと大きく強い仲間意識で動いているのか……？
「何だよあれ、あんな数、反則じゃないか!!」
　悪夢のような光景を前に、リルナは怯おびえて身を竦すくませている。無理もない。
　しかし俺が声をかける前に頭を振り、リルナは決然とした態度で騎士たちに告げた。
「みんな、街に行って民たちを避難させてくれ！　巻き込まれてしまう！」
　騎士たちが慌ただしく部屋を飛び出していく。
　いい判断だ、リルナ。この規模ではいつものノリで民衆が見物に来れば、命取りになる。
「行こう、みんな!!」

俺の言葉に愛あい香かと慧理那が頷うなずく。
「お兄ちゃんたち、あんなたくさんいるのに戦うの!?」
心が折れかけているロエルに、愛香はごく当然に答えた。
「あたしたちね、強化合宿も兼ねてこの世界に来てるから。普段よりハードな方が身になるでしょ？」
何とも愛香らしい口実に、慧理那も苦笑する。
「本当の修行になってしまいますわね」
平然としている俺たちが理解できないのだろう、姉妹は言葉もなく立ち尽くしている。
よし、と自分の拳こぶしで手の平を打って気合いを入れ、俺は愛香と慧理那に提案した。
あまり人に見せるようなものではないけど、今、この姉妹になら見せられる。
「見張りもみんな出ていっちゃったし、ここはいっちょ、三人でやるか！」
すぐに意図を理解し、慧え理り那なが可愛かわいらしく両の拳こぶしを胸の前で握って笑顔になる。
「はい！　是ぜ非ひ！　是非やりましょう!!」
そして……やりたいことはわかったと思うのだが、愛あい香かはやはり抵抗があるようだった。
「…………」
「どうした、愛香？」
トゥアールはジト目でプププ、と笑い、
「……愛香さんはほんとムッツリですね、すぐ妄想する……」
「ち、違うわよ！　ホントの意味の方で！　恥ずかしいの!!」
しぶしぶという感じで愛香も加わり、俺たち三人は並び立つ。

「「「テイル・オン!!」」」

　愛香だけはそっと呟つぶやくぐらいの声量だったが、俺たちはこの異世界でついに、自分たちのツインテールを解き放った。


IS HOPE

「未み春はる艦長、バッチリ録画しましたよー!!」
『さすが総そうちゃんだわ！　わかってる、わかってるわ、もう!!』
　案の定、戦艦のモニターで俺たちを覗のぞき見していた母さんの通信が聞こえ、苦笑する。
「……まさか……それが……!?」
　俺の変身した姿を見て驚くロエル。リルナも開いた口が塞ふさがらなくなっている。
　女の子になるとは思わなかったんだろう。
「そういうことさ。俺も、言ってみれば『魔法』にかかるんだ」
　何気なく口にして、自覚した。
　この子たちの力を魔法、自分たちの力を科学と対比したが。
　そもそも、俺たちの科学ちからだって、奇跡をもたらす魔法だったんじゃないか。
「ロエル。リルナ。ポニーテールはツインテールの代替品じゃない。それぞれを愛し、大切に育はぐくんでいくべきなんだ。法で縛るのは……諦あきらめるのは、まだ早い」
　この世界の人々に、笑顔を取り戻すのは。
　この世界に本当のツインテールとポニーテールを取り戻すのは、君たちの役目だ。
「俺たちが、ツインテールの真の強さを見せてやる！　だから、君たちも諦めるな!!」
　誰だれよりも国民を思い、愛し、頑張ってきた、君たちにしかできないことだ。
　だから俺たちは、通りすがりのツインテールとして、精一杯の手助けをするよ──。
「お兄ちゃん……」
　ロエルは陶然とした瞳ひとみで俺を見つめ──視線を下に落とし

た。
「ちん○んどこいったの？」
　なんて純真ピュアな眼まな差ざしなんだ……。
　すげえ頑張って勇気づけたつもりなんだけど、幼い好奇心にスルーされてしまった。
「きっとそこだけ分子分解されて消滅するんだよ、姉様」
　女体化の具体的なプロセスを理解するとくじけそうだから、やめてください。
「よおし、総そう二じは大切な部分を消し飛ばしてまで戦おうとしてくれているんだ、ボクたちも負けていられないね!!」
「うん！　リルナちゃん!!」
　姉妹は手と手を合わせて再び合体した。
「「ツイン・コネクト!!」」
　先程までの怯おびえはすっかり消え去り、俺たちたった五人のギャラリーに向け、合体したロロリーは決めポーズを取った。
　うん……元気になってくれたならいいんだ。俺は本望なんだ。
　俺にかかった「ちょっと格好つけると台無しになる呪のろい」は、相変わらず強力だなあ……。
　ちらっと窺うかがい見ると、ブルーとイエローは俺からさっと視線を逸そらした。何な故ぜか俺をガン見していたらしい。
「その幼い声でちんち○って口走られたらたまりませんなゲハハハハハハハハ!!」
　特に勇気づけてもいないのに、髪が逆立ちそうなほど元気になってる人もいるし……。
　そんなトゥアールを拳けん圧あっだけで天井に突き刺し、ブルーが左腕をかざした。
「いくわよ――属性玉エレメーラオーブ、髪紐属性リボン！」

俺は、ロロリーの手を力強く握る。
ブルーを中心に手を繫つないだ俺たち四人は、テラスから飛び立った。

◇

「夏休みシーズンにメディアに露出できないのは痛手じゃが、メガネドンのサマーグッズは何とか市場投入が間に合った。ファミリー層の人気獲得のチャンスじゃ」
「……そんなにメガネドン推しで大丈夫なん？」
屈強なエレメリアンですらが生身で放り出されれば超圧力で五体が四散するであろう、宇宙空間よりも凶悪な環境。
ここは、異なる世界と世界を繫ぐ〝世界の狭はざ間ま〟だ。
ところが無む謀ぼうにも、その世界の狭間を、遊園地のアトラクションでも楽しむかのように、生身で談笑交じりに突っ切る少女がいた。
戦闘機形態メガネウインガーに変形したメガ・ネプチューンＭｋ．IIに搭乗した、ダークグラスパーである。
ステルス戦闘機状のフォルムに、搭乗用のシートを備えており、そこからダークグラスパーの頭の上まで、ドーム状の力りき場ばが覆っている。いたいけな少女に性の芽生えを迎えさせてはならないと、最近はボディの振動にも気を遣っており、至れり尽くせりだ。
死のトンネルをドライブしている雰囲気など微み塵じんも見せず、ダークグラスパーはメガ・ネと仕事の話をしていた。
任務ではなく、アイドル活動の方だが。
「何や、闇あん子こちゃんよりメガネドンの方がブレイクしてきてるような気がするで……」

変形時はメガ・ネの頭部が完全に格納されているため、ハンドルの前の小型モニターから彼女の声が響いている。

「フッ、メガネドンを気に入ったのなら喜ばしいが、メガ・ネよ、それは自己評価が過ぎるぞ。まさに、色(いろ)眼(め)鏡(がね)というやつよ。ハハハハ」

「あー、うん。イースナちゃんがええなら、それでええんや……」

メガ・ネの懸念は正しい。善(いい)沙(すな)闇子の人気はうなぎ上りだが、ゆるキャラ・メガネドンはそれをさらに超える勢いで、デビュー一か月足らずで爆発的にブームを巻き起こしている。

まるでコンビやユニットのように、常にアイドル・善沙闇子の側(そば)にいたのだ。覚えられ、親しみを持たれるのは当然だ。

イースナが通過点として定めていた、世界レベルでの知名度も獲得した。

しかしそのワールドワイドなゆるキャラの中の人である彼女は、凄(すさ)まじい高性能を誇る。

アルティメギルの各部隊にしても、トゥアールにしても、異世界の移動には頑強な装甲で満遍なく包んだ移動艇を用いる。

……というよりも、技術の限界として用いざるをえない。

彼女はトゥアールの技術をコピーし製作されたが、属性力(エレメーラ)から生まれた自我により変革がもたらされ、オリジナル技術とは別個の進化を果たした存在となった。

単独での世界間移動すら可能とした、人造(バイオ)エレメリアンにして、機甲(メタル)エレメリアン。それが、メガ・ネプチューンＭｋ．IIなのだ。

イースナたちと目的地とのおおよその距離が、モニターにビーコンで表示されている。

「貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)、一部隊全員で追撃しとるんやし、そのまま

戦ってもらえばええんとちゃうの？」
　ある意味当然なメガ・ネの問いに、ダークグラスパーは頭を振った。
「敵は手強い、無駄な犠牲は出させられぬ。わらわより先に発見しただけで十分じゃ」
「そら、イースナちゃんがあんなもたもたしてたから……。でも優秀な部隊なんやし、呼び寄せて美の四心ビー・テイフル・ハートと一緒に戦ってもらえばええんとちゃうの？」
「……それはできぬ。あ奴やつらは、どうあっても別部隊と共闘させられぬ理由があるのじゃ」
　ダークグラスパーは、グリップを握る手に力を込めた。
「貴の三葉ノー・ブル・クラブは、あまりにも問題児ばかりだったゆえ、一部隊にまとめてわらわの直轄としたのじゃ。ちょうど欠組となっていた、葉クラブの位ランクに据えられてな」
「それってつまり……」
　体ていのいい押しつけやないの、と言いそうになり口くち籠ごもるメガ・ネ。
　ダークグラスパーはゆっくりと頭を振り、珍しく頬ほおに冷や汗を伝わせた。
「如何いかな豪傑でも、奴らは制御できぬ。これぱかりは、同じ女であるわらわでなくてはな」
「……………………………………同じ、女？」
　モニターの奥で、メガ・ネが息を呑のむ。
「貴の三葉ノー・ブル・クラブ──全てのエレメリアンをかけ算してしまう、恐るべき女傑の集まりよ……!!」
「かけ算やって!?」
　時にすら見放された生なき空間……世界の狭はざ間まに、メガ・ネ

の叫びが木こ霊だましたー。

◇

　滑空しながら城門を越え、暴走族たちの前に降り立つ。
　俺たちの姿を見るなり、特攻服のエレメリアンは櫓やぐらから飛び降りた。
「なんだぁ信号機みてぇな連中が増えてんぞ!?　この世界のツインテールの戦士は、あのお姫サン一人じゃあなかったのかよ？」
　がなり立てられ、部下と思おぼしきエレメリアンが恐縮して答える。
「へい姐あねさん！　チェリーブロギルディをやったのは、そのちっこい姫のはずですぜ」
「じゃあこいつらは何モンだ、あん!?　どいつもこいつも、イカしたツインテールしてやがる！　特に赤いちっこいの、オメェだ!!」
　ご指名のようだ。俺は堂々と前に進み出た。
「俺たちのツインテールは、そんなにイカしてるか？」
「……マジで何モンだ。相当修羅場をくぐってやがるな、そのツインテールは……」
　途端、余裕ぶった巻き舌はなりをひそめ、鋭い声になる。
　肌がひりつくほど叩きつけられるプレッシャー。
　……なるほど、格好にだまされるところだったが、こいつも相当な強敵だな……。
「姐さん、こいつら見覚えがありますぜ！　ほら、写真で回ってきた……最近うわさの!!」
　特攻服のエレメリアンは、部下に急せかされて俺を凝視したあと、狼ろう狽ばいしてたたらを踏みながら指差してきた。

「！　て、てめえら、ツインテイルズか!?　マジかよ!?　なんでこんなとこに!?」
「そうだ！　俺たちはツインテイルズ！　縁あって、今はこの世界を守らせてもらう!!」
　ここまで名が知れ渡っているなら、隠しても意味はない。
　仮にこいつらが俺たちの世界の部隊へとこの情報を伝え、今のうちに攻めろ……なんて言っても、やつらはプライドにかけて受け入れはしないだろう。
　綱渡りだが、そう信じるしかない。
　特攻服のエレメリアンが、指をバキバキと鳴らし始める。
「ツインテイルズと聞いちゃあ、ますます黙っちゃいられないねえ。チェリーブロギルディだけじゃねえ、てめえらはあたいらの妄想ドリームをことごとくブッ壊しやがったんだからよぉ!!」
「何のことだ？」
　身に覚えがないことだったが、直後に出てきた名前を聞いて、合点がいった。
「あたいのオキニだったリヴァイアギルディ君×とクラーケギルディ君を倒したのはてめーらで間違いねえな!?　おう!?」
　何か、「と」の言い方が引っかかるな。
　奴やつらと仲がよかったというのなら、俺はその憎しみを甘んじて受ける。
「リヴァイアギルディとクラーケギルディを倒したのは、俺だ!!」
　俺は、特攻服のエレメリアンに向けて宣言した。
「何一人でかっこつけてんのよ、倒したのはあたしとイエローでしょ!?」
「そうですわ、わたくしあの戦いの録画映像はもう一〇〇回くらい見ましたわ!!」

　ブルーとイエローが訂正しようとするが、俺はそれを制した。
「最後に合体した二人にとどめを刺したのは俺だ。怨うらむなら、この俺を怨め!!」
　ところが、復ふく讐しゅうに燃えていたはずの特攻服エレメリアンは、俺の言葉に奇妙な食いつき方をしてきた。
「何!?　最後に合体だと!?　詳しく教えろオラァ!!」
　ぷすん、とガス欠のような音を最後に、けたたましい騒音がピタリと止ゃんでしまった。
　周りのやつらも単車のエンジンを切り、固かた唾ずを呑のんで俺の言葉に耳を傾けている。
「合体って……いや、触手を……」
　うおおおおおおおおおおおお、と、エンジン音に成り代わって轟とどろく大音声。
「ど、どっちの触手で挿したんだ!?」
　友の最さい期ごを、詳しく記憶に焼き付けようというのか。
　特攻服エレメリアンは、目を血走らせて聞いてくる。
　不審に思いながらも、俺はあいつらの最期の勇姿を脳裏に浮かべる。
「クラーケギルディが、触手を二本……リヴァイアギルディに刺した」
「二本だとおおおおおおおおおおおおおお!?」
　隣り合った者同士、ハイタッチをし始め、収拾がつかなくなっている。
　エレメリアンたちは、やけにヒートアップし始めた。
「強気受けかよ……ハアハア」
「バカ、あの二人ならリバれんだろうが！」
「姐あねさん、アタシが予想した通りでしたぜホホーイ！」

「やべえ、花粉はなぢがとまらねえ!!」
　未知の会話に戸惑う俺を余よ所そに、敵はどんどん盛り上がっていく。
　気まずそうに目を逸そらしているブルーは、内容がわかっているのだろうか？
　植物のエレメリアンの特性だろうか、部位は違えどそれぞれ叫びと共に花粉を周囲に撒まき散らし出した。
　花粉症の人が見たら卒倒するほどの濃度の花粉が、俺たちを取り巻いていく。
「くそっ……！　テメエすげえな、あの二人はまだまだ時間がかかると思ってたのによう、テメエとの戦いでの覚悟が、一気に仲を深めたってわけか……じゅるり」
「時間……？　何のことだ？」
　特攻服のエレメリアンは咽むせび舞う花粉の仲、名乗りを上げた。
「いいだろう、こりゃマジでかからねえとな！　あたいらは首領直属部隊、貴の三葉ノー・ブル・クラブ！　人呼んで、悩のう舞ぶ流る苦く羅ら武ぶ!!」
「前後でどう違うのよそれ!?」
　ブルーのツッコミに、俺も心の中で同意する。
「そしてあたいはラフレシアギルディ。貴の三葉ノー・ブル・クラブの特攻隊長ヨ！　ぁえて嬉うれしいぜ、テイルレッド!!」
「その名前……まさか、ダークグラスパーの部隊か!?」
　部隊名からして、美の四心ビー・テイフル・ハートと関連性があるのは間違いないだろう。
「確かに直属の上司はあいつになるが、別にあいつの部隊じゃねえよ。あたいらは、あたいらの先生だけの生徒チームだからヨォ!!」
　ということはその先生と呼ばれる隊長が、ポニーテール属性のエ

レメリアンか！
「ロロリー、ポニーテール属性のエレメリアンはいるか？」
　奴ゃっらに聞こえないよう小声で尋ねると、ロロリーはほどなく首を振った。
　今この場にはいないようだが、この騒ぎは部下たちの独断なのか……!?
「……貴を謳うたってる割りに、ちっとも雅みやびな格好じゃない気がするんだけど……」
「うるせえ、あたいらは確かにアルティメギルから後ろ指差されたアウトローの集まりよ。だがな、あんな閉鎖的な連中より貴とうとく輝いてんだ!!」
　ブルーの突っ込みに、イエローが疑問を重ねる。
「それよりも……ずっと気になっていたのですが、チェリーブロギルディも、このエレメリアンたちも……まるで、女性のように高い声をしていますわ」
　その答えは、驚くべき言葉で俺たちに告げられた。
「あたりめーだ。どこに目ぇつけてやがる、あたいたちは全員女だ」
「「「えええええええ!?」」」
　俺たち三人は声を揃えて驚いた。
　そんなことを気にせず戦っていたのか、ロロリーだけがきょとんとしている。
「珍しいか？　だろうなあ、女性の活性体シルエットで生まれるエレメリアンは、そうそういるもんじゃねえ。それがこうして集まって仲間チームになったのが、あたいらなのさ」
　チェリーブロギルディも妙な言葉遣いだったが、興奮するとオネエ言葉になったケルベロスギルディの例もあるし、特に気にしな

かった。
　今まであれだけ戦ってきて、一度も遭遇しなかったんだ。女性型のエレメリアンが存在するなんて、考えたこともなかった……。
　ラフレシアギルディは、俺たちの戸惑いをさして気にもせず続ける。
「あたいらはよぉ、裏切り者を追ってこの世界に来た。そいつ引き渡したらすぐに出ていくつもりだったんだ。それを、仲間を倒ゃられたとあっちゃあ、おめおめ帰るわけにもいかねーじゃねえか!!」
「裏切り者を追って……？」
　あの結束力の高いアルティメギルに、裏切り者が現れるのか？
「ハン、こんな侵略価値のなくなった世界なんざどうでもいい。あたいらはただ、落とし前つけなきゃ気が済まねえだけだからさぁ!!」
　自分本位な言い分に、俺はさすがにムッとした。
　この世界のツインテールを萎い縮しゅくさせた張本人は、お前たちの仲間だろう!!
「そこまで言うなら、とっととこの世界から出ていけ！　お前らが何もしなけりゃ、無理に戦おうなんてしない!!」
「そりゃこっちの台詞せりふだぜ。チェリーブロギルディは何もしてねえ、属性力エレメーラを奪おうともしてねえのに、攻撃してきたそうじゃねえか!!」
　思い返せば、確かにそうだ。
「……そ、そういえば……」
　チェリーブロギルディは城下街まちで、誰だれかの属性力エレメーラを奪おうとしていたわけじゃなかった。
　よだれが素敵だって騒いでいただけで……。
　ロロリーが戦闘員アルティロイドを蹴散らしたあと、自衛のためにか

かってきたようなものだ。

　さらに遡さかのぼれば、ゴリラや俺たちに平原で遭遇した時も、何もせずに見逃している。

　エレメリアンが現れることと一般人が狙ねらわれることがイコールとして身体からだに染みつきすぎて、何の疑問も持たなかったけど……確かに何もしていないと言えばその通りだった。

　戸惑う俺とは違って、ブルーはこいつらの言い分を一いっ蹴しゅうした。

「何とでも言えるじゃない。普段さんざん好き勝手侵略しに来ておいて、今日はやる気がないのに手を出してきてそっちが悪い、なんて因縁つけて、あんたら何様のつもりなのよ」

　そうか……そうだ。ブルーの言う通りだ。

　明確な意思を持って侵略に来ている奴やつらなんだ、見ただけで条件反射的に攻撃してしまっても無理はない。

　何より、せっかく戦いが終わったと安あん堵どしていたロエルとリルナに、ツインテール禁止令という悲しい決断をさせたのはこいつらなんだ。

「ふうん、なかなか肝が据わってんじゃねえか。てめえがテイルブルーだな。そこらの部隊の腰抜けどもがブルってるってのも、こりゃあフカシじゃないらしいぜ」

　ブルーとラフレシアギルディは、臨戦態勢で向かい合った。

「怨うらみを晴らしに来たってんなら、こんなガン首揃える必要はないでしょ」

　ブルーは、挑発的にツインテールをかき上げて言った。

「タイマンで決け着りつけようじゃない。あんたらみたいのは大好きでしょ、タイマン」

「タイマンだあ～？」

「それとも群れなきゃ怖くて戦えないわけ？　別にあたしは一人でいいわよ、全員相手でも」

　俺はイエローに視線を送り、頷うなずき合う。

　確かに、この場で殲せん滅めっ戦になれば、城や城下街への被害は避けられない。

　しかしブルーが一対一の代表戦に持ち込めれば、それは最小限に抑えられる。

　ポニーテール属性のエレメリアンもろとも、倒さずとも追い出せばいいだけの話だしな。

「姐あねさん！　あんなこと言われっ放しじゃ、ウチら悩のう舞ぶ流る苦く羅ら武ぶの名折れですぜ!!」

　案の定、部下たちは挑発に乗ってラフレシアギルディにタイマンの受諾を懇願する。

「っしゃあああああ!!」

　ラフレシアギルディが気合い一喝、ブルーの前に立ち、顔を寄せ合って視殺戦が始まった。

「おう。タイマンじゃ、負けた時のいいわけができねえぞ？　多勢に無勢でしたってよぉ」

「そっくりそのまま返してやるわ。数に物言わせなきゃ勝てませんでした、ってね」

　二人の睨げい戦せんは周囲にプラズマを発生させ、周囲の草花や枯れ木に引火していく。

　貴の三葉ノー・ブル・クラブの隊員たちが、身を震ふるわせて恐れ戦おののいていた。

「あ、あいつ何モンだ……姐さんとまともにガンつけあえる女なんて、今まで見たことねえぞ」

　そりゃあ。族ゾクに腰引くなら、野生の熊やゴリラの方にビビって

然しかるべきだもんなあ……。

　前哨戦ガンつけが終わり、一歩ずつ後退して距離をとるブルーとラフレシアギルディ。

「なかなかやるな」

「あんたこそ」

「はん、たりめーよ。あたいらエレメリアンは、舐なめられたらおしまいなのさ」

　……その心意気は買うが、俺たちの世界じゃエレメリアンは、もはや侵略される側の人間からも舐められてるからな。

　幼稚園児すら、指差して笑ってるという……。

　ブルーはランスの柄つか尻じりを地面に叩きつけ、ともすれば和みかけていた空気を一いっ蹴しゅうした。

「お見合いなんてしてる時間はないのよ。とっととかかってきなさい」

「威勢がいいじゃねえか。まあおめーも、そんな貧乳だ。ツッパらねえと生きてけなかったんだろうな、ってのぁよおくわかるぜ……」

「チンピラに同情されるほど落ちぶれちゃいないわよ!!」

「似たようなもんじゃねえか！　あたいは組織の落らく伍ご者しゃ、てめーはメスの落伍者だ!!」

『エレメリアンのくせに上う手まいこと言いますねぷふーふふふ』

　通信機越しにトゥアールの笑い声が聞こえる。どうしていつも、後で間違いなく殴られるのをわかっていて敵の煽あおりに同調するのか。

「だいたい、あんたださってペタンコじゃない！」

　エレメリアン相手に、涙ぐましくも胸の大きさを競おうとするブルー。

「あたいはサラシだってえの。ほらよ」
　ラフレシアギルディは、胸元に巻いていたサラシを取り払った。
　新体操のリボンのように、サラシが輪を描いて宙を舞う。
　その下からは若干硬質的ではあるものの……たゆん、と、まるで人間の女性と同じような胸が現れた。
　エレメリアンの場合、体表が鎧よろいのような見た目なので、あくまで胸のように膨ふくらんでいるだけ、なのだが──
「…………」
　それを見て茫ぼう然ぜん自じ失しっとし、ランスを取り落とすブルー。
　ラフレシアギルディは、怪け訝げんそうにブルーを見つめた。
「あん？　何だ何だ、急にしけたツラになりやがってよお！　おめー、自分の貧乳吹っ切れてねえのか!?」
　部下たちが賛同し、ブルーに野次を飛ばし始める。
「きっとそうに違いないっすよ、姐あねさん！　メチャ気にしまくりですってヒャハハハハハ！」
「こりゃあこの勝負、姐さんの勝ちで間違いないですぜ!!」
「「「ひーんーにゅう！　（あそーれ）ひーんーにゅう!!」」」
　手拍子に歓声、指差して爆笑。
　あおるる。
　あー、これは……やばい。

「───そう……あたしは……エレメリアンにすら、おっぱいで負けるのね……」

　ブルーの目が、紅あかく染まってゆく……。
　理性の青が、双そう眸ぼうの紅くれないで、怒りに塗り込められてゆく。
「まずいですわ、レッド！」

「ああ！」

　頼もしげに見守っていたロロリーを、俺とイエローが左右から腕を抱えて引き離した。

「え、何々、どうしたの⁉」

「すまんロロリー！　助けると言っておいて何だが、今日この世界は滅ぶかもしれない‼」

「えええええええええええええええええええええ突然言われても⁉」

　ロロリーにとっては青天の霹へき靂れきだろう。

　だがここは、この未み曾ぞ有うの災厄を何度も経験した俺たちの忠告を、素直に聞いて欲しい。

「な、何だこいつ、目がイッちまってる⁉」

　さしものラフレシアギルディも、一歩後あと退ずさる。

　部下の何体かが、彼女を守るように前へと躍り出た。

「ラフレシアの姐さん、すんません！　水差させてもらいやす‼」

　ブルーのこの世ならざらぬ迫力に危機感を懐いだいてか、タイマン勝負を反ほ故ごにして部下たちがブルーへとかかってゆく。

「どいつもこいつも……うおあああああああああああああああああああああ‼」

　しかし、部下たちもほどよく女性的なプロポーションを持っていたことが、火に油を注いでしまった。

　咆ほう哮こうと共にブルーは部下たちに摑つかみかかっていく。

「ギャーこいつ強つぇえー‼」

「あ、あたいが押さえている間にバイクで突っ込……おわああああああああ‼」

　目の前のエレメリアンを血祭りに上げただけでは収まらない。

　バギーを素手で引き千ち切ぎり、乗っていたエレメリアンを引きずり下ろし、一撃の下に爆散させてゆく。

もはや、生命のある無しにすら頓とん着ちゃくせず地上の全てを蹂じゅう躙りんする、破壊神そのものだった。

「や、やめろ――――――！　タイマンだっつってんのがわかんねえのかあ!!」

ラフレシアギルディの制止の声が、空しく響く。

「があああああああああああああああああああああああああああ!!」

「あたいはこっちだ！　そいつらに手を出すんじゃねえ!!」

ラフレシアギルディがブルーに攻撃を仕掛け、何とかタイマンに軌道修正した。

「くう、こいつやべえ！　おっぱいの部分を重点的に潰そうとしてきやがる！　女なら本能で忌避してしまうような攻撃に、何の躊躇ためらいもねえ!!」

ほんとにね……。

ずっと一緒にいる俺でさえその生態を解明できていないのに、こんなの突然見たらビビるよね、やっぱ……。

震ふるえる手で、そっと俺の手を握りしめてくるロロリー。

「お兄ちゃん……ロロリーは、救世主に来て欲しかっただけなの。悪魔じゃないの……」

「テイルブルーがこの世界に救世主として語り継がれるか、悪魔として畏おそれられ続けるか……俺にもわからない。きっと、神様でさえもね……」

後ろを振り向くと、騎士の皆さんが城門の扉に身を隠し、震えていた。

後者の可能性が色濃くなってきたな……。

「と、とにかくテイルブルーを止めなくちゃ！　イエロー！」

一緒に止めようと提案したが、イエローも軽くビビって震えてい

る。

　テイルギアの通信機を通して、他ひ人と事ごとのように呑のん気きな通信が聞こえてきた。

『え～、あのまま好きに暴れさせておけば、いい感じに敵を間引いてくれたあとブルーも自滅して、めでたしめでたしですよ』

　城のさっきいたテラスの方を見ても、トゥアールの姿はない。部屋の中で簡易の通信セットでも広げて高みの見物モードなのだろうが……数十秒後にもこの怪獣が城を倒壊させるかもしれないと、何な故ぜ考えないんだ。

　俺は意を決してブルーを止めに駆け出したが……タケノコのようなエレメリアンが空から降ってきて、目の前の地面に突き刺さった。

　今ブルーを止めようと組みつけば、俺もこいつのようになってしまうのか。

　直属部隊とはいえ本人が言うように実力重視で結成された部隊ではないようで、貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンは、一体一体の戦闘力は危き惧ぐしたほどではなかった。

　だがラフレシアギルディはさすがに幹部級、防戦一方とはいえ暴走状態のブルーと互角にやり合っている。

　仕舞いには四つに組み合い、拮きっ抗こうした力が行き場を失って二人を中心にしてクレーター状に地面が陥没した。

　その状態でラフレシアギルディは、何かに気づいたようにはっとし、顔の険が消えた。

　口や鼻の区別のないマスクのような顔をすんすんと寄せ、ブルーに向けぼそりと呟つぶやく。

「……おめえ、何か不思議な匂いすんな」

「…………………………は？」

　血よりも紅あかく染まっていたブルーの目が、元の色に戻ってゆく。

「いや何か……今まで嗅かいだことがねえような匂いがすると思って。何だろうな」

「な、何言ってんのよ、エレメリアンは味覚や嗅きゅう覚かくが人間と違うんじゃなかったの!?」

「あたいの属性力エレメーラは、匂い属性フレグランス！　嗅覚は人間と違うが、心で匂いを嗅ぐのよ!!」

　よくわからないが、ラフレシアギルディに匂いを嗅がれた恥ずかしさで元に戻ったようだ。

　今度ブルーが暴走したら、俺もああすればいいのだろうか。

「いや、うん、こりゃ興味深いぜ。独特な感じだ。戦いの匂いか？」

「変な言い方するなあ！　ち、違うからね、そ……レッド！　あたし、汗くさくないからね!?」

「そんなのわかってるよ。敵の術中に塡はまるな、ブルー！」

「わかってる、とか……ばかっ……!!」

　ブルーの声が萎しぼんでいく。

　恐竜から子犬になるような変へん貌ぼうぶりで大人しくなり、すっかり立場が逆転してしまった。

「せめてツインテール……髪とかの匂いにしなさいよ、何で体の方なのよ!?」

「馬ば鹿かかテメエ！　シャンプーだの香水だの、んなもん、作りモンの匂いだろうが！　生命ライブじゃねえんだよ生命ライブじゃ!!」

　植物とは思えない、身も蓋ふたも無い持論だ。

　体勢を立て直した部下たちが、あれほど暴れたブルーへ憎しみの目を向けることなく、むしろ賞賛していた。

「姐さんがあれだけくんかくんかするとは、あいつやっぱただもんじゃねえや……」
「全然嬉しくないわよ、……ちょっ、やめて、嗅がないで!!」
　ブルーのハイキックが炸裂するが、ラフレシアギルディは微動だにしない。
「いい感じに蒸れてるかもしんねえ、そのブーツを脱いで、足の指と指の間をくんかくんかさせてくれや!!」
「最悪────────────────ッ!!」
　ブルーはへたり込み、にじり寄るラフレシアギルディから後退った。
『大丈夫ですから、テイルギアは通気性抜群ですから!!』
　いつもテレビで見るテイルレッドのような醜態に、さすがにトゥアールも通信でフォローしてくるが、ブルーは触手に次ぐ弱点を白日の元に晒してしまった。
「匂い嗅がれるぐらい、そんなに嫌なもんか……？」
　俺にはいまいちぴんとこない。
「ロロリーたちも戦おうよ！」
「ブルー、あのままだと心に消えない傷を負ってしまいますわ!!」
　……イエローとロロリーの焦り具合からすると、男の俺がそういうのに無頓着なだけで、女の子には死活問題なんだろう。
　これで完全にタイマンは決裂……どちらかが全滅するまで戦いは終わらないだろうが、やむを得ない。
「ブルー！　今助けますわ!!」
　見かねたイエローがヴォルティックブラスターを両手で構え、ラフレシアギルディへ目にも止まらぬ三速射を見舞った。
　その射線上に、銃撃を上回る風の速さで、何者かが割り込む。
　己を盾にするように、棒立ちで雷の弾丸をその身に受けた。

「おふうん……効くわあ」
　またも、奇妙な見た目のエレメリアンが現れた。
　頭頂から伸びた葉が、全身黒に近い深緑のラバースーツのような身体(からだ)を包むように垂れ下がっている。
　根野菜をそのまま人型にしたようなそのエレメリアンが自分を守ったことに気づき、ラフレシアギルディは豪笑する。
「おっ、珍しいじゃねえかマンドラゴラギルディ、いつも眠ってるおめえが重い腰上げるなんてよお。気に入ったんなら、その黄色いのは任せたぜ」
「言われなくてもそうするわぁん」
　声の高いこいつらの中でも、とりわけ大人びた、艶(つや)のある声だ。
　マンドラゴラギルディというそのエレメリアンはやけに全身をくねらせながら、イエローに近づいていった。
　反射的に、構えたままのブラスターを連射するイエロー。
　しかし、弾丸を受けて一瞬のけぞりはするものの、マンドラゴラギルディはすぐに前進を再開する。
「ヴォルティックブラスターをまともに受けても、全く効いていませんわ!?」
「いいえぇ、だいぶ効いてるわあ！」
　効いていると嘯(うそぶ)きつつも防御も回避もせず、マンドラゴラギルディは総身に弾丸を受けながらイエローへ悠々と歩を進めていく。
「ひいいいいいいいいい、何か怖いですわっ!!」
「もっと撃ちなさい！　いい感じよん!!」
　……言ったら怒られるかもしれないけど、このエレメリアン、似てるかもしれない……。

　トランスした時の、イエローに。
「ふおおおおおおおいいわ！　とってもいい！　あなたわかってるわ――――――っ!!」
「ッ……何て声ですの！」
「あなた！　犬っぽい顔しちゃって、そそるわねえ！　ご主人様の前でちゃんと粗相できるのかしらん!?」
「え、そ、そのう……」
　無(む)茶(ちゃ)苦(く)茶(ちゃ)な挑発に、何(な)故(ぜ)かイエローは俺をちらちら見ながらしどろもどろになった。
「ちゃんと粗相するって何だよ!?」
　俺が訴えても、マンドラゴラギルディは聞く耳持たない。
　やむを得ず、武装を全開放して集中放火しようとするイエロー。
　部下たちも余計に散り散りになって暴れだし、収拾がつかない状態だ。
「ロロリー、君はここで待ってるんだ。あの戦いに巻き込まれちゃいけない！」
「ロロリーも戦うよ！」
「駄目だ！」
　巻き添えを食わないよう、ロロリーを説得していた、その時。

「待てええええええええええええええええええええええええいっ!!」

　瑞(みず)々(みず)しく、精気に満(あふ)ちれた声が戦場に響いた。
「誰(だれ)だ!?」
　全員が手を止め、声の主を探した。
「！　あそこだ!!」
　一番最初に発見した俺が、誰にともなく叫んで空を指差す。

空が、燃えていた。
そいつからは世界を分かつ真紅(しんく)の炎がほとばしり、絶対の不可侵を豪語していた。
その場の誰もが、神々しい面容に目を奪われてしまう。
まとった炎以上に、そいつ自身が熱く燃え盛っている。
天を摑(つか)むように巨大に広がる翼に、太陽風(コロナ)を宿したような棘(とげ)立(だ)った身体(からだ)。
素顔を隠すような仰々しい仮面状の頭部と、それを以(もっ)ても抑えきれぬ、爛々(らんらん)と輝く双眸(そうぼう)。
ほんの薄皮一枚の下に、マグマが流動していてもおかしくはない。
テイルギアをまとっていてすら、暑いではなく熱いと感じる圧倒的な熱量。
一目で確信した。
こいつは──違う。別格だ。
だが……突如として訪れた緊迫感は、空から響く音色に破壊された。
「な、何だ……!?　どこからともなく、渋いトランペットの音が聞こえるような!?」
ラフレシアギルディが叫ぶと同時、空中のエレメリアンの目が、一際煌々(こうこう)と光を灯(とも)す。
「フッ……。追われる身だが、多勢に無勢は見過ごせねえ。義によって助太刀するぜ!!」
陽光を背に、腕組みをしながら空に浮かぶエレメリアンは、妙に勿体ぶった口調で眼下に向けて宣言した。
「ポニーテールは世界を繫(つな)ぐ架け橋！　太陽の戦士、フェニックスギルディ見参!!」

　フェニックス……不死鳥。やはり幹部級か。それも、特上の！

　呆あっ気けに取られて口をぱくぱくさせていたロロリーが、

「あ、あ、あ、あいつだよ、ロロリーが全然勝てなかったエレメリアン!!」

「何だって!?」

　あいつが、この世界にポニーテールを強要した張本人、貴の三葉ノー・ブル・クラブの隊長か!!



だが、何か雲行きが怪しくなってきた。

「姐あねさん！　あいつ、自分から現れやがりましたぜ!!」

「何ィ!?　ツインテイルズどころじゃねえぞ、こりゃあ!!」

貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンたちは無防備に俺たちに背を向け、空に向かってがなり立てた。

「テメエ、勝負しろオラァ!!」

どう考えてもあいつは、貴の三葉ノー・ブル・クラブの隊長じゃない。組織の意思に背き、単独で動いている。

「さっきラフレシアギルディが言ってた裏切り者が、あいつなのか!?」

入り組んだ事態をようやく察し、俺は歯は噛がみする。

乱戦に次いで乱入、もはや戦場は昏迷の一途をたどっていた。

「とうっ!!」

ビルの上から飛び降りるように宙返りし、フェニックスギルディは地面に降り立った。

ラフレシアギルディを守るように飛び出してくる影。全身がサボテンのように丸みを帯びてトゲだらけの、薄緑色のエレメリアンだ。

「やっちまいましょう姐さん！」

血気に逸はやった仲間が、フェニックスギルディと対たい峙じする。

「いや待て、カクタスギルディ！　こいつはあたいらが……」

何か因縁があるのだろうか。

それでもラフレシアギルディは止めようとしたものの、二体は戦い始めてしまった。

「くらえ!!」

カクタスギルディは、突き出した腕から銃弾のようにトゲを発射する。

　フェニックスギルディはそれを片手ではたき落とすと、妙ないちゃもんをつけてきた。
「おいてめえ！　必殺技名はどうした!?　何な故ぜ叫ばねえ!!」
「そ、そんなもん考えてねえよお!!」
　トゲも意に介さず、フェニックスギルディはカクタスギルディの両肩を摑つかんで揺さぶる。
「この無法者がァ！　己の信念を込めて必殺技を叫ぶ！　それが血生臭い戦場において相手に払う敬意じゃあねえか！　それができねえ奴やっはただのケダモノだぜ!!」
「アタシらは所詮無法者！　ケダモノ上等だ！　それにアタシの愛する邪険属性クルールの信条は、とりあえず拒否る！　んな暑苦しい名前、お断りだよお!!」
　カクタスギルディは腕を払いのけて飛とび退のくと、両腕を引き絞って身体からだを強こわ張ばらせ、さっきのトゲを今度は全身から、マシンガンのように連射させた。
「俺様の燃え滾たぎる正義の炎の前に！　そんな攻撃は効かないぜ!!」
　フェニックスギルディは腕組みしたまま炎を放ち、迫る無数のトゲを空中で溶解させた。
「うわあ……」
　フェニックスギルディの熱血ぶりに、愛あい香かは一人ドン引きしている。
　ラフレシアのせいで完全に戦意を失ったところに、この暑苦しさは厳しいか。
　それに対し、俺やイエローは特に何とも思わないが……というかイエローが「わかりますわ」とばかりに拳こぶしを握り締めている。
　呆ぼう然ぜんとしているカクタスギルディ目掛け、フェニックスギル

ディは軽やかに跳躍した。

「うおおおおおおおおおお、フェニックスパ――――――ンチ!!」

　天空から振り下ろされる豪腕が命中すると同時に、反動で宙返りをする。

「とどめだ！　フェニックスキ―――――――――ック!!」

「うわああああああああああ!!」

　暑苦しい拳と蹴りの二連撃で、カクタスギルディは倒されてしまった。

　全身炎に包まれた、お腹なかいっぱいな熱血漢。

　今、真夏の俺たちの世界でこいつと遭遇していたらと思うと、空恐ろしくなる。

「確かに言う通りだ。必殺技っぽく叫ぶだけで、ただのパンチやキックがとてつもなく重い一発に感じる……！」

　ついそう漏もらした俺に目ざとく反応し、フェニックスギルディは振り向いた。

「ほおう、さすがだな、うわさのツインテイルズ」

　こいつも、俺たちのことを知っているのか！

「やはり、一流の戦士はしっかりと必殺技を叫ぶものだぜ。斜に構えて無言で何か撃ってくるようなヒーローなんて、見てても心は躍らねえよな!!」

　あいつ格闘ゲームでいえば、弱中強、空中直立しゃがみそれぞれでパンチに別の名前とかつけてそうなタイプだな。

　さすがに俺はただのパンチには名前はつけないが……必殺技名をしっかり叫ぶことの重要性は、俺が愛あい香かに何度も説といたことだ。つい共感してしまう。

「お兄ちゃん！」

　ロロリーに腕を引っ張られ、我われに返る。

　そうだ、感心してる場合じゃない。こいつこそ、倒さなきゃいけない敵じゃないか!!

　だが、目の前で仲間を倒され、貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)のやつらが黙っているはずはない。

「やっちまえうおおおおおおおお！」

「来やがれ！　俺様を追ってきたんだろう、全員受けて立ってやるぜえええええええ!!」

　隊員総出で、フェニックスギルディへとかかっていこうとしていた。

「何!?　俺たちはどうすればいいんだ……!?」

　俺は狼狽(ろうばい)して視線を彷徨(さまよ)わせた。まさか、エレメリアン同士で戦い始めるなんて。

「どうするもこうするもない！　エレメリアンは全部倒す、それで問題ないでしょ!!」

　……思考の袋小路に嵌(は)まった時、ブルーの脳筋は本当に頼もしいなあ……。

「こら――――――――――っ！」

　先ほどのマンドラゴラギルディの奇声に、勝るとも劣らない大音量。

　ロロリーと同じぐらい甲高い、子供の声が城前の平野に響いた。

　器用にバイクの壁が左右に割れ、奥から小さなエレメリアンが歩を進めてくる。

　本当に小さい。体長は今の俺の、膝(ひざ)下ぐらいしかないのではないだろうか。

「先生ェ！」

歩いてきたエレメリアンはそう呼ばれた。じゃあこいつが本物の、貴の三葉ノー・ブル・クラブの隊長!?

「私を置いてどこに行ったかと思えば……駄目でしょ！」

何と表現したものか。

一本の木がラジコンのように地面を自走しているような、コミカルな見た目だ。

ところどころに女性らしさが垣間見える他の貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンたちとは、統一性が全く無い。

「騒がしくて、失礼しました！　私は貴の三葉ノー・ブル・クラブの隊長をやっています、ユグドラシルギルディといいます!!」

俺たちを見て頰ほお（といっても木の幹だが）を膨ふくらませたユグドラシルギルディは、跪ひざまずいたラフレシアギルディの肩に飛び乗った。

「フェニックスギルディさん！　あなたを処罰するのは私たちの仕事ではありません！　でも、仲間を倒したことは先生許しませんからね!!」

許しません、と言った瞬間、眼前で何かが閃ひらめいたように見えた。

「俺様は俺様の正義に従っただけだ！　お前たちが何をどうしようと、いつでも受けて立つぜ!!」

フェニックスギルディの爽快なほどの無鉄砲な返事に、ユグドラシルギルディは嘆息する。

「帰りますよ、みんな！」

「あーやっぱ先生の匂いが一番だぁ」

幸せそうに全身を打ち震ふるわせながらも、ラフレシアギルディはブルーを力強く指差した。

「おうテイルブルー！　すぐにリベンジしに来っからよお、決着つ

けようや！　今度こそタイマンでな!!」

　爆音を轟とどろかせ、変態の編隊が去って行く。

　それを見届けてうむ、と腕組みで頷うなずくと、フェニックスギルディは飛び去っていった。

　俺たちは、元凶をむざむざと見逃してしまったことになるのか。

　憔しょう悴すいしきった顔で、ブルーは珍しく弱音を吐いた。

「絶対ヤダ、お願い、あたしもうあいつと戦いたくない！」

「じゃあ、俺が戦うから……」

　未いまだへたり込んでいるブルーに手を貸そうとした俺は、何かに蹴け躓つまずいて転びそうになった。

「────な……」

　地面が、裂けている。

　ちょうど俺たちと奴やつらとの境目に、巨大なギロチンを落としてめり込ませたかのように、地面が抉えぐられていた。切られたとしか言いようがないほど、鋭利な断面で。

　深さは、一メートル以上はある。

「レッド、これ、まさか……」

　あの一瞬の閃せん光こうを、イエローも見ていたのだろう。俺は頷うなずいて、冷や汗を拭ぬぐった。

「ユグドラシルギルディだ……」

　駄々をこねるような触手の振りで、これだけの衝撃波を生み出し、警告の傷きず痕あとを刻んだ。

　また攻めて来ると言い残した、小さな怪物。

　そして、それを受けて立つと言い放った反逆の怪物──。

　名状しがたい不安を胸に、俺は、何とか守ることができた城を見上げた。

キャラクター名鑑 021

フェニックスギルディ



DATA

身長：226㎝

体重：218㎏

属性力：ポニーテール属性

上級幹部は確実と目されていた戦士だったが、ある事件で親友を失い、アルティメギルに反逆。以降、異世界を渡り歩き、正義の味方を自称してアルティメギルと対立してきた。一度は首領の手で封印されたが、のちに脱出し、今回、総二たちの前に現れた。“正義に犠牲はつきもの”が信条で、彼の行いは人間に平和だけをもたらすわけではない。数々の恐るべき能力・特性を持ち、首領さえもが危惧するほどだというが……？

第四章　正義のエレメリアン。

　エレメリアンの生態は、なぞに満ちている。

　属性力エレメーラから生まれる生命体で、自我を持つ存在。

　やはり、元になるのが人間の心ゆえだろうか。人格は男女に分かれる。

　繁殖の必要がなくとも、人格の影響で活性体シルエットと呼ばれる彼らの肉体も女性のように完成する。その割合は、男性型に比べ圧倒的に少ない。女性型は植物のエレメリアンとして生まれるケースが、特に多く見られる。精神生命体とはいえ、生命の神秘としか言いようがない。

　しかし多くが無骨な戦士である彼らエレメリアンにとって、同族の女性は人間の女性以上にコミュニケーションをとり難いという問題があった。

　ただでさえ稀き少しょうな女性エレメリアンは、疎外感を感じ、理解を得られないことに苦しみ、ドロップアウトしてゆく。人間と同じ、悲しい社会の縮図といえた。

　そんな彼女たちを救ったのが、教師属性ティーチャーの女性エレメリアン、ユグドラシルギルディだ。

　精鋭部隊の隊長を務めることのできるほどの実力を持つ彼女は、それをあえて蹴った。

　非行に走った少女たちを見捨てず、一体、また一体と、配下ではなく「仲間」として迎え入れていったのだ。

　そして首領直属、ダークグラスパー配下の四し頂ちょう軍ぐんの一角──貴の三葉ノー・ブル・クラブという栄誉と、組織内での居場所を勝ち取った。

　戦闘力が高い者ばかりが集まっているわけではないが、このような事情もあり、彼女たちの結束力は、紛れもなくアルティメギルーといえる。
　しかし、そんな彼女たちを問題児というなら、そもそもエレメリアンにはほぼ問題児しかいないはず。彼女たちは何(な)故(ぜ)、コミュニケーションしづらいと避けられたのか。
　それはもちろん、総(そう)二(じ)の前で嬉(き)々(き)として語った、あの話題が大きかった。

　貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)の面々は、この世界に〝接(せつ)舷(げん)〟した自艦を拠点とし、そのホールで作戦会議を開いていた。大テーブルの上には、この世界の戦士であるロロリーではなく、テイルレッドの顔写真が印刷された資料が広げられている。
　作戦会議といいつつテイルレッドの鑑賞会となるのは本家と同じか……と思いきや、彼女たちの興味は、むしろテイルレッドが倒した豪傑たちにあるようだった。
「見ろよ。テイルレッド……こいつが倒したエレメリアン。とんでもねえな、何だよこの錚(そう)々(そう)たる面子(メンツ)は……。信じられねえ、あのドラグギルディさんもだぜ？」
「一人でこんだけ幹部を倒したツインテールの戦士なんて、史上初めてじゃないっすかね」
　ラフレシアギルディの賞賛に、部下が続ける。
「おお……ワームギルディとスネイルギルディ、一緒に出撃しまくってたみたいだぜ！」
「そして二人同時に倒されたのかよ……ロマンスじゃねえか、畜生!!」
「あの二人のことだから、そりゃもーべたべたうねうね絡むんだろ

うなあ!!」
　そう。今行われているのは、死闘の果てに眠る英霊たちへの、敬意のかけ算である。
　ホールの隅では、マンドラゴラギルディがマイペースにも専用穴で睡眠をとっていた。
　自室以外にもいたる所にこうした穴を作り、頭の葉だけを出して埋まり、睡眠をとるのが彼女のポリシーだ。
　無理に起こそうとして葉を引っ張ると、壁が吹き飛ぶほどの大声で叫ぶという。
　したがって就寝中の彼女は決して起こさぬよう、危険物として扱われていた。
「姐あねさんほら！　アラクネギルディさんも!!」
「何!?　するってーと……ワームギルディとスネイルギルディとで……！」
　禁断のトライアングルかけ算に、一同は歓喜する。
「残るはビートルギルディさんとスタッグギルディさんか!?　あんつーか、もう、ゲへへ」
　小さな隊長・ユグドラシルギルディは、はしゃぐ部下たちを慈いつくしみの目で見つめていた。
　ラフレシアギルディはそんな彼女の視線に気づくと、無言で俯うつむいてしまった。
　伝でん播ぱするように喧けん噪そうが収まっていき、最後にはホールを静寂が包んだ。
「……どうしたんですか、みんな？」
　ユグドラシルギルディが不思議そうに尋ねる。
　パンキッシュなメイクを施ほどこしたような容よう貌ぼうの部下が、嗚お咽えつを漏もらし始めた。

「すんません、先生。アタッシらこんなで……。先生一人なら、いくらでも出世できるのに、アタッシらが足手まといになって……!!」
　その言葉が着火剤となり、皆、次々に泣き始め、膝ひざから崩れ落ちたり、拳こぶしで床を叩いたりし始めた。
　ラフレシアギルディだけは気丈に立っているが、それでも頬ほおに涙を伝わせている。
「もー、みんな！　またですか!?」
　皆がへたり込んでようやく同じ目線の高さになったユグドラシルギルディは、一体一体、肩を優しく叩いて慰めていく。
「先生はみんなといられるだけで幸せなんです、出世なんてどうでもいいんですよ！」
「けど、今回の任務だって、今から来るあいつの手柄になっちゃうんでしょう!?　やりきれないっすよ！」
「フェニックスギルディの野郎、自分から喧けん嘩か売って来やがったのに！　何が正義の味方だ、ふざけやがってあの鳥野郎!!」
「仲間も倒されたんだ、あたしらの手で仇かたきを討ちたいっす!!」
　皆、フェニックスギルディの無法ぶりに憤ふん懣まん遣やる方かたない。
「いいじゃないですか、見つけて見張るだけでいいんです、楽ちんしちゃいましょう！　……確かに、仲間が倒されたのは辛つらいし悲しいですけど、それは、私たちの宿命です」
「あたいらが我慢できても、先生はっ……!!」
　ユグドラシルギルディがどんなに慰めても、迷惑をかけ、出世を逃のがさせてきた負い目がある生ぶ徒かたちは、納得しない。それでも彼女は、根気よく諭さとしていった。
「……みんな、やればできる子だって、わかってます。先生は未来

の優秀な戦士を青田買いして、一人占めしてるんですよ！」

　ユグドラシルギルディ。

　その小ささに似合わず、包み込むように大きな慈愛を持ったエレメリアンだった。

　社会の爪つま弾はじきにあった若者たちを、根気よく、我わがことのように慮おもんぱかって導く。

　正しく教師たる資質のある大人にしかできないことだ。

「みんなだけじゃないですよ、先生だってかけ算大好きですから。それにもう先生、一度ポカやっちゃってますし、出世なんてどの道できません」

「ッ……すんません……先生ェ!!」

「あたいらが馬ば鹿かだったよう！」

　これ以上心は砕かせられないと、皆、涙を拭いて立ち上がっていく。

「うんうん、みんな、先生の大切な生徒ですよ!!」

　……ここまでのやりとりは、これでかれこれ三〇回目になる。

　この隊の、様式美と化していた。

「だいたい、あの人たちがケチなだけなんです！　自分たちだっていろいろ妄想しているくせに、先生たちがかけ算すると『ほんと、やめてください』とかマジトーンで謝ってくるんですから！　本人の目の前で言うわけじゃないのに！」

　そうだそうだ、脳内は不可侵領域だ！　と声が上がる。

「大丈夫ですよ、先生のお友達の子に男同士愛属性ボーイズラブのエレメリアンがいますけど、マイペースに生きていますから!!」

　さりげなく交友関係の広さを伝え、安心させようとする。ユグドラシルギルディの優しさだった。

「でも、ツインテールの戦士って、女性ばかりだから困りますよ

ねー。男性でもツインテール属性がものすごく強い人、異世界をくまなく探せばどこかにいると思うんですけどね。いつかその人とエレメリアンのみんなとで、かけ算したいなあ」
「はは、先生。さすがにそんな稀き少しょう種がいたら、首領が黙ってませんって」
　ラフレシアギルディが苦笑する。
　……そう。その存在は、あまりにも稀き少しょうなのだ。

　世間話に危険なニアミスを孕はらみつつ、貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンたちの談笑は続いた……。

◇

　ロエルが用意してくれた城の客間で、俺たちは束の間の休息を取っていた。
　トゥアールがノートＰＣを畳み、機械とは不ふ釣つり合いな猫脚のテーブルの上に置く。
「敵襲があったばかりですし……合流しましょうと未み春はる艦長に連絡しましたが、母親がいない方がイベントが進みそうなので、スタートゥアールに残ったままでいいそうです」
「イベントって何だ……」
　まあ、スタートゥアールの中はシェルターのようなものだし、ここに来るよりはむしろ安全だろう。だけど、見知らぬ場所で一人きりって、怖くないんだろうか。
　……いや、母さんならそれも燃える要素として楽しむんだろうな。
「疑問だったこともあらかたわかった。あのフェニックスギル

ディってやつはアルティメギルの裏切り者で、組織の命令で動いてるわけじゃない。だから、ツインテールをやめてポニーテールにすれば許す、なんて自分勝手なことをしているんだろう」

「そして貴の三葉ノー・ブル・クラブは、この世界に現れたフェニックスギルディを追って、一部隊丸ごとやって来た、という状態なのですわね」

　俺は、ユグドラシルギルディが部下の矛ほこ先さきを収めさせたのが気になる。

　あの強さだ。隊に損害を出さないよう、一対一で戦うつもりなのかもしれないが。

　それともう一つ……決戦を挑む前に、割りと深刻な問題があった。

　ちらっと愛あい香かの様子を伺うと、ベッドの上で体育座りをして黄昏たそがれていた。

　ラフレシアギルディとの戦いの後から、ずっとこんな具合なのだ。

　時折、自分の腕を鼻先に近づけ、すんすんと匂いを嗅かいでいる。

「だーいじょうぶですから！　そんな何度も匂い確かめないでください!!」

　いたたまれなくなったのか、からかいもせずトゥアールが真ま面じ目めに愛香を励ましている。

「で、でもそーじ、聞いたでしょ？　あいつが……」

「何か匂いがするってのだろ？　別に俺はシャンプーとかのいい匂いしか感じないぞ」

　慰めたつもりだったが、愛香は一層顔を真まっ赤かにして身を縮こまらせてしまった。

「愛香。あいつは匂い属性フレグランスのエレメリアンなんだから、嗅きゅう覚かくに相当する力だってそれこそ、犬みたいに並外れてるんだろ。人間生きてたら何かの匂いはするんだし、気にするなよ」

「だって、あたしにだけ言ったもん……」

　もん……て。

　愛あい香かがやばい。覇気がないなんてもんじゃない。

　すっかりトラウマになっている。

「相手が変態であるほど愛香さんが頼りなのに、こんなときに乙女ってどうするんですか!!」

　こういう時に、普段の鬱うっ憤ぷんを晴らそうとつけ込もうとしないトゥアールを見ると、やっぱり二人は親友なんだと実感できて、心強い。

　男の俺より女の子のトゥアールの方が、デリケートな問題には適任だろう。

「愛香さんがこんなですけど、今回は厳しい戦いになりそうです。戦力の増強が急務となります。皆さん、こちらに」

　トゥアールに手招きされ、俺と慧ぇ理り那な、桜さくら川がわ先生も愛香の座るベッドの周りに集まった。

「愛香さん、慧理那さん、テイルブレスを貸してください」

「……」

　愛香は右腕からテイルブレスを外すと、渡す前に軽く匂いを嗅かいでいた。

「だから、大丈夫ですから!!」

「だって……」

　ブレスを受け取ったトゥアールは、親が子供に諭すように、根気よく愛香に説明する。

「テイルブレスは普段は空気のようなものだと前に説明したじゃな

いですか！　意識して触れようとしない限り、分子を透過するようにできているんです！　愛香さんが身体からだから咽むせるような獣けもの臭しゅうを漂わせようが、ブレスに匂いなんてつきませんから!!」

「でも……」

……言い返しもしねえ。駄目だ、これはちょっとやそっとじゃ立ち直れそうにないぞ。

トゥアールは、食器洗い機のような機械を用意した。

前面のバイザー状の蓋ふたを開き、二人のテイルブレスを入れて、ノートＰＣとコードを繋つなぐ。

ピアノを弾くような軽やかなキータッチでプログラムを打ち込み、装置が微振動を始めた。

そこから待つこと数分。

装置のバイザーを開け、テイルブレスを取り出して二人へと返した。

トゥアールが自信たっぷりに胸を張って言う。

「属性玉変換機構エレメリーションの上位装備、属性玉多重変換機構エレメアディッションを追加しました！」

慧理那が復唱する。

「エレメ……アディッション？」

テイルギアへ機能を追加する、アップデートだったようだ。

「アラクネギルディの男の娘属性ガールズボーイを解析したところ、二つの属性を結び合わせる能力だったようなんです。当初はこれを使って新装備を開発しようとしたのですが、出力が安定しませんでした。というわけで、再び属性力エレメーラのハイブリッドに挑戦したんです」

二つの属性力エレメーラのいいとこどりをするっていうあれか。俺は

トゥアールに尋ねた。
「ハイブリッドって……もう一つは？」
「スネイルギルディの性転換属性トランスセクシャルです。似ているようで正反対。正反対だけれど似ている。二つの属性が互いを補完し合い、この強化を可能にしたんです」
　トゥアールは申し訳なさそうにし、
「それと、総そう二じ様。レッドはプログレスバレッターの力でテイルギアが私の設計を超えた変化をしていますので、今はう闊かつに武装を追加できないんです。すみません」
　二人分だけを受け取った時点で、そんな気がしていた。かえって俺の方が恐縮してしまう。
「ああ、大丈夫。俺、属性玉エレメーラオーブはあんまり戦いで上う手まく使えないし。それで、これはどんな機能なんだ？」
「属性玉多重変換機構エレメアディッションは、属性玉エレメーラオーブの力を同時に二つ発動させることができるのが特徴です。二つの効果を同時に得られたり、相性がよければ相乗効果で思わぬ力を発動できる可能性もあります」
　なかなか難しそうな機能だが、これを聞いただけで慧え理り那なは概要を摑つかんだようだ。
「髪紐属性リボンで空を飛びながら、学校水着属性スクールスイムで重力操作ができたりするわけですわね」
　使用中の属性玉エレメーラオーブを解除せずに、別の力を発動できるわけか。
　属性玉エレメーラオーブの使用頻度が多い愛あい香かなら、特に重宝するだろうな。
「トゥアールさん、この装備では、どんな属性も掛け合わせることができますの？」

　慧理那の質問に、さすがですね、とトゥアール。

「そう、弱点もあります。反発する属性、対極の属性など、相性の悪い属性同士は多重使用できないんです」

　覚えることが増えてきたので、俺はすぐに質問していく。

「対極って……例えば？」

「今ある中で一番わかりやすいのが、巨乳と貧乳の属性です」

　すかさず慧理那が異を唱えた。

「ですが、わたくしたち、その二つを合体技として使えましたわ」

　トゥアールは頷うなずき、わかりやすい答えを提示してくれた。

「それはブルーとイエロー、二人がそれぞれ独立して使用したからこそ、合体技として成立するんです。一人で同時発動する場合、反発する属性同士は掛け合わせることはできません」

　なるほどなあ。

　強力な反面、使いこなすのが難しそうな装備だ。

「使用する際は、属性玉変換機構エレメリーションでまず男の娘属性ガールズボーイか性転換属性トランスセクシャルを発動させてください。それで強化装備が装着されます。ただし、テイルギアへの負担も大きいので、使用は一日に一度までにしてください。あくまで、切り札です」

　さっそく慧え理り那なは今所有している属性玉エレメーラオーブの名前を紙に書き出して、確率計算の数式のように、全部の組み合わせの一覧を作る作業を始めた。

「手持ちの道具では属性玉多重変換機構エレメアディッションの起動コマンドが入力できないので、私は明日一度スタートゥアールに戻りますね。次の戦いには間に合わせたいですから」

　ふと横を見ると、桜さくら川がわ先生もちゃんと説明を聞いていた。意外と装備関係のことでも耳を傾けるのは、慧理那のためだろうか。

……あるいは、寂しがりや気質ゆえ、連帯感を求めてしまうせいだろうか。

説明は終わったが、肝心の愛あい香かはトゥアールの言葉も上の空で聞いていたようで、どんよりとした空気をまとって俯うつむいていた。

トゥアールは多少強引に愛香の肩を揺らし、意地悪く耳元で暴言を吐く。

「だーかーらー愛香さんの匂いなんて気にしませんから！　自意識過剰な貧乳とか、いったい何のために生きているのか理解しがたい存在です。ねえ総そう二じ様！」

「え？　う、うん。どうしたんだ愛香、いつものお前なら、匂いなんかより胸を気にしていただろ？」

ここはトゥアールに合わせて発破をかけて、俺も二、三発殴られておこう。

身体からだを動かしているうちに、愛香も嫌いやなことなんて忘れてしまうはずだ。

「……匂いも……気にするもん……」

「何ですかその駄目な女々しさは――っ！　さあ来なさい！　暴れてください!!」

「……やだ……きっと汗かく……」

愛香の豹ひょう変へんぶりに、トゥアールが口からエクトプラズムを出して倒れてしまった。

どうすればいいんだ。

新装備を手にした二人だったが、早速色々組み合わせを考えている慧理那とは対照的に、愛香の落ち込みようは、今回ばかりは深刻なようだった。

◇

　しばらく使われていなかったという来客用の浴場だが、お城のメイドさんたちがあっという間に掃除を終え、湯を張ってくれた。
　桜川先生も「なかなかだ」と認める仕事ぶりだ。
　慧理那と桜川先生、愛香、トゥアールの順に入ったあと、俺が入る番になった。
　来客用といっても、銭湯ぐらいの大きさがある。
　大理石でできた柱が神殿のように立ち並び、異国情緒もバッチリだ。
　疲労回復に特に効果があるという、ミルクのような白色の湯に浸つかってくつろいでいると、湯気の向こうにうっすらと、入り口のドアを開ける人影が見えた。
「……あれ、メイドさんか？」
　お城のメイドさんが、全員入り終わったと勘違いして来たのかもしれない。
　まだ入っています、と伝えようとしたのだが──
「あの、観み束つか君……向こうを向いてください！」
　聞こえてきた声は、意外な人のものだった。
「慧え理り那な、さっき入ったんじゃないのか!?」
　やがて湯気の中に見えたシルエットが本当に肌色ばかりなのに気づき、俺は全力で背を向けた。
「ごめんなさい……。でも、こんな場でもなければ、観束君と二人きりで話はできないと思いましたので……」
　少しだけ振り返って見た、慧理那のツインテールは真剣そのものだった。
「ツインテールは解ほどいていませんわ。湯船に浮いて、お行儀はよ

くありませんけれど……」
　お湯に浸（つ）かってしまえば互いの身体（からだ）は見えないので、とりあえずほっとする。
　普段のリボンではなくゴムでだが、確かに慧理那はツインテールを結んだままだった。
　それこそが、俺と大事な話をするための証拠と言わんばかりに。
　だったら俺も、恥ずかしがってばかりいるのは失礼だな。
　慧理那は、再び後ろを向くよう求めてきた。
「背中に寄りかかって、いいですか……？」
「あ……うん。話って、何？」
　合わせた背中から、お湯とは違う温かさが……慧理那の体温が伝わってくる。
　互いの顔を見ないまま、無言の時間が過ぎた。
「不思議ですわね。陸地と海の大きさは違っても、地球の大きさは同じで。こうして見る夜空と、月も、わたくしたちの世界と変わらない……」
　慧理那の言う通り、浴場の天窓から見える夜空には、半月が輝いている。
「わたくしたちはこの世界で、どうすることが正しいのでしょうか……」
　月の優しい光に心安らいだのか、慧理那は話題を切り出した。
「仮に、ここで貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）やフェニックスギルディ、全てを倒すことができたとして。この世界は、直属部隊を退けた要注意の世界として、より強力なエレメリアンが送り込まてしまうのではないでしょうか？　わたくしたちの世界と同じように……」
　堂々巡りになるのではないか──慧理那は、そう危（き）惧（ぐ）しているの

だ。
「そうだな……。でも、だからといって俺は、この世界がこのままでいいとは思えない」
　この世界の誰よりもツインテールを愛しているロエルが、自分の手でそれを禁止しなければいけないなんて。頑張って戦い続けた幼いあの子が、世界の理不尽を一身に背負わなくちゃいけないなんて……俺は、いやだ。
　ロロリーが戦っているのを見ている街の人たちは、すごく嬉うれしそうだった。
　いつか、戦いが終わると信じてるんだ。姫に迷惑をかけまいと、全員、法を受け入れているんだろうけど……やっぱり、侵略者を恐れて自由を奪われるのは、つらいことだ。
「一度部隊が完全撤退した世界なんだ。俺たちがこの世界にいるエレメリアンを全て倒せば、戦いは終わるって信じようぜ。今のこの世界は、アルティメギルの内紛に巻き込まれているだけで、侵略を受けているわけじゃないんだから」
　一番いいのは、フェニックスギルディが追っ手を恐れてこの世界から逃げてくれることなんだけど……むしろあいつ、受けて立つと言ってたからな。戦いは避けられないだろう。
「最低限、ここからあいつらを追い出すだけでもいいんだ。頑張ろう、慧ぇ理ゥ那な」
「観ゅ束っか君は、強いですわね……」
　背中合わせでも、心臓の鼓動は伝わる。
　心なしか、慧理那の鼓動が早くなっているように感じた。
「わたくし、観束君たちの役に立てているでしょうか……」
「何言ってるんだ、慧理那にはすごく助けられてるよ」
「津っ辺べさんが落ち込んでいるのに、わたくしは、どう励ませばい

いのかわかりませんでしたわ。仲間として……友達として、こういう時こそ支え合いたいのに。トゥアールさんのようになりたいですわ。遠慮なく叩かれて、大声で怒鳴り合って……」



程度の問題はあるだろうけど、あの二人の喧けん嘩かを見ていて微笑ほほえましいと思うのは、やっぱり俺だけじゃないんだな。

「観み束つか君と津つ辺べさんは幼おさな馴なじ染みなのですから、わかります。でも、津辺さんとトゥアールさんが出会ったのは、わたくしとそう変わらないはずですわ。それなのに……」

「愛あい香かだって言ってたじゃないか。慧え理り那なのおかげで立ち直れたこともあったんだ。焦らずに、自然体で仲良くなっていこう」

「……そうですわね。焦ってばかりでは、駄目ですわね……」

合わせた慧理那の背中が、ビクリと震ふるえる。

「だ、誰だれか入ってきますわ！」

「今度は誰だよ!?」

「ど、どうしましょうわたくし、こんな大それた真ま似ねをしているところを他の女性に見られてしまったら……はあ、はあ……」

焦っているのだろう、慧理那の息が荒い。

「慧理那、俺の後ろに隠れて！」

「は、はい！」

やむを得ず、俺は背中と壁の間に慧理那を隠した。

間一髪のタイミングでドアが開く。湯気の向こうに、小さなシルエットが見える。

「お兄ちゃん！　一緒に入ろっ！」

「ロエル!?」

「ロエルね、お兄ちゃんと二人っきりでお話がしたかったんだ！」

ロエルもシンプルな髪留めに変え、サイドポニーを下ろさずにいる。

「大丈夫だよ、湯浴み着バスウエアを着てるから」

「ああ、それなら……」

背を向ける必要もない。まあそもそも、子供だしな。

安心しかけた俺は、自分を抱き締めるように漂っている髪の毛に気づいた。
しまった、慧理那のツインテールが湯面に浮いている！
頭隠してツインテール隠さずとはこのことか!!
俺は慧理那のツインテールを努めて優しく摑つかみ、湯に沈めた。
「はあ、はあ……」
湯の中で腕が摑まれ、思わず声を上げげそうになる。軽くホラーだ。
慧理那が、ツインテールを摑んだ俺の腕を、より強くと催促するように引っ張っているのだ。
そうしないと辛つらいのだろうか？
とにかく、ばれてしまいそうで怖いので、これ以上息を荒らげないで欲しい。
しかし、意外だ。ロエルなら、気にせずすっぽんぽんで入ってきそうなもんだが。
気を遣って湯浴み着バスウエアは着てくるし、ふざけて飛び込んだりしないどころか、湯に入る所作まで様になっている。そこはやっぱりお姫様、ということか。
ロエルは俺と向かい合い、足を崩して座った。
「……お兄ちゃん、ロエルと結婚して、ずっとこの世界にいてよ。お願い」
そんな俺の緊張を余よ所そに、ロエルはひたむきな思いを投げかけてきた。
「ロエル、お兄ちゃんと結婚したい。本気だよ」
「それは……ごめん、無理だよ……」
ロエルは悲しそうに俯うつむく。
だけどこの子は、無邪気なようでいて、守るべき世界のことを第

一に考えている。強き次期国王として俺を迎えようと、結婚を望んでいるんだろう。

　世が世なら最優先すべき問題だが、世継ぎのことまで姉妹揃って考えていたしな。

　自分の意思で、政略結婚を仕掛けたようなものだ。そんな悲しい決断には賛成できない。

「リルナちゃんも照れてるだけで、ホントはお兄ちゃんのこと、大好きだよ。思ったことと逆のことを言っちゃったりするだけで、
とってもいい子だから。ロエルと一緒に、お兄ちゃんと結婚してもいいって思ってるかも」

　俺の考えを見透かしたかのように、リルナの意思も添えて、なおも食い下がる。

　何か、やけに饒舌（じょうぜつ）だな。

　慧理那（えりな）の震（ふる）えが、ツインテールを通して伝わる。俺は身体（からだ）が震えるのを必死で誤魔化（ごまか）す。

　だが、その間俺が沈黙していたせいで、ロエルはより傷ついてしまったみたいだ……。

　というか、水中で震えが伝わってくるってすごすぎないか、慧理那のツインテール。

「どうしても、ダメ？」

「ああ。それだけは無理だよ。ロエルが必死で戦ってきたのは、この世界が好きだからだろう？　俺も同じだ。自分の世界が好きだ。だから……帰らなくちゃ」

「……お兄ちゃん……」

　今にも泣き出しそうなロエルを見て、いたたまれなくなる。

　何とか慰めの言葉をかけてあげたいと、思わず身を乗り出し――握ったままの慧理那のツインテールを、思いっきり引っ張ってし

まった。

「はふんっ……」

「へっくしょん!!」

咄とっ嗟さにくしゃみをし、慧理那の声を隠す。のぼせてきたことより、さっきから緊張しっ放しで汗が止まらない。冷や汗が。

「……あれ」

お風呂に入ってきてからのロエルには、些さ細さいな違和感は何度か覚えていた。

だがこうして間近で身を乗り出したことで、それは顕著に感じられた。

俺は、確信を持って彼女に告げる。

「……お前……リルナだろ？」

「なっ!?　な、何を言っている……のっ!?」

俺でさえ簡単に見抜ける明らかな動揺をしてしまい観念したのか、ロエル……いや、リルナは恨めしそうに睨にらんできた。

「ううっ……どうしてわかったんだ！」

左右の結びを入れ替えれば見た目は全く一緒とはいえ、確かに口調や仕草は完かん璧ぺきだった。

だけど、本人では確認できないような小さな違いが、俺に気づかせてくれたんだ。

「……サイドポニーだよ。リルナ、君はすごく慣れていて、バランスも完璧に見えた。だけどロエルは……多分サイドポニーって、片側に髪の重さが集中するからなんだろうな、ほんの少しだけ、首が傾いて見えたんだ」

長年同じ髪型なら、サイドポニーでもきちんとバランスは取れるのだろうが、ここ数か月で髪型を変えたばかりなら、不慣れなのも無理はない。ましてロロリーに合体している時はツインテールで正

中線が完璧だったから、余計に普段の不慣れが目立って見えた。
「リルナはポニーテールも好きだと言ってただろ？　だから、サイドポニーにも前から慣れていたんだろう、って思ったんだ」
　俺たちは強大な属性力(エレメーラ)を二つ探知していた。姉妹合体した二人を見て、すっかり二人ともツインテール属性だと思っていたけれど……この慣れ具合だ。
　……もしかして、リルナの方は──。
　リルナは呆(あき)れとも感心ともとれる笑いを浮かべ、肩を竦(すく)めた。
「キミは本当に、ツインテールを愛して、よく見ているんだね。そうか、まさかサイドポニーの慣れ具合とはなあ……。ボクの趣味は姉様のモノマネだからね、絶対見破られないと思ったのに……そこまでは気づかなかったよ」
　人の趣味はそれぞれだが、大丈夫なのか、その趣味。
「姉様が本当にキミと結婚したがっていたから、お節介をしちゃったんだ。姉様には内緒にしておいておくれよ」
「ああ、もちろんさ」
　この二人は、本当に互いを大切に思っているんだな。
　リルナは、はっとした後やおら顔を真(ま)っ赤(か)にし、勢いよく湯をかいてパニックになり始めた。
「ちちち違うぞ、あれだぞ！　キミを大好きとか言ったのは、姉様なら優しいからそうフォローすると思って！　完璧に姉様のふりをしただけなんだ‼」
「わかってるよ。落ち着いて」
　姉ならフォローしてくれると確信していることそのものより、『姉が自分をいい子だと思ってくれている』と信じているリルナが微笑(ほほえ)ましかった。

しかし、リルナは一転して不機嫌そうに顔を顰(しか)めた。

「何なんだ、キミはっ……！　やたら女に慣れていて、気に入らない！　ボクだって、今まで周りに男がいなかっただけで、ちょっと慣れれば軽くあしらってやれるんだ!!」

少し、違うんだよな。それは。

「そりゃあ、女に変身して戦うからな。少しは慣れたよ」

テイルレッドの姿を思い出したのか、リルナが苦笑する。

「そうか……そうだったな」

リルナは俺に近づき、上目遣いで甘えるように見上げてきた。

皮肉にも、その仕草は真(ま)似(ね)る必要もなくロエルにそっくりだった。

「お願いだ、総(そう)二(じ)！　ここに残ってくれ……！　ボクもキミをお兄ちゃんと呼ぶ！　妹になる！　それに……ボクだって、掟(おきて)に従えばキミと結婚しなくちゃならないんだ……ボ、ボクも、お前に尽くす！　だから、ずっとこの世界にいてくれ……!!」

二度目の風呂でのぼせているんだろう、慧(え)理(り)那(な)が頭を俺の背中にくっつけてきていて、見つからないかと気が気じゃなかった。

そのせいで、必死に訴えているのは伝わってくるのだが、リルナの言葉が今ひとつ頭に入ってこない。

「愛(あい)香(か)だって、あんなに強いじゃないか！　総二がいなくたって、世界を守れるだろう!?」

「リルナ。戦力の配分なんて機械的なものじゃないんだ。俺は、俺の世界を守りたい。愛香も慧理那も、トゥアールも同じさ。この世界に残りたくないんじゃない。君たちがこの世界を愛しているように、俺たちは俺たちの世界を愛しているから……守りたいんだ」

一方その慧理那の吐息が、だんだん小刻みな笑い交じりになってきたように感じる。

　いよいよやばい。

「キミの仲間は、どれだけ恵まれているかわかっていない！　どんなに強くたって、女だけじゃ、心細いんだ……。くじけそうになるんだ……！　敵がどんなにお馬ば鹿かでも、終わりが見えなくて怖いんだ！　ボクたち二人は双子の姉妹だから、感じる不安も同じ……勇気づけ合うこともできない!!」

「……うん、ごめん。こんなの、リルナの言う通り、恵まれた立場だから言えることだよな。一緒に戦ったり、バックアップしてくれる仲間がいる、俺だから……」

　民衆に見せびらかすように戦うことも、民を勇気づけるためだけではなく、彼女たちの心細さの裏返しだったんだろう。

　ただ期待を背負って、責任を感じて、戦い続けて。二人で一人の戦士、ツインテールだったリルナたちは、頼るべき仲間がいなかった。それは、どんなに不安なことだっただろう。

　多分……孤独に戦い続けたトゥアールも、同じだったはずだ。

　きっとそれは、今も数あま多たの世界で戦い続ける、全てのツインテールの戦士も……。

「帰る前に、この世界の敵を全部やっつけるよ。少しでも、君たちの不安を消してみせる。それが俺にできる精一杯のことだ。わかってくれ、リルナ」

　一期一会のツインテールを守る。俺は、俺たちは……そう決めたんだから。

「っ……総そう二じ……いやだ！　ボクは、キミを帰したくないっ!!」

　感極まったように、俺の胸に飛び込んできたリルナが……俺の隣に浮いているものを見て、目を点にした。

　……お尻だ。

　お尻が浮いている。

「うおあああああああああああああ総二の尻が分離して浮いているうううううううううう!!」
「すまん、それは俺の仲間の尻だ！　ツインテールだけじゃなくて尻も隠れてなかったみたいだ!!」
　ゆだった慧(え)理(り)那(な)が、ツインテールとお尻を湯面に浮かべてぷかぷかと浮いていた。
　俺は慌てて抱き起こそうとするが、慧理那が今、何も着ていないことを思い出す。
　そもそも、真(ま)っ赤(か)っかで色気皆(かい)無(む)なので判断が遅れたが、お尻だって見ちゃ駄目なんだ！
「リルナ、頼む！　慧理那を抱き起こしてくれ！」
　慧理那の存在に気づいて肩を支えるリルナだったが、
「……な、なんて破(は)廉(れん)恥(ち)なやつだ！　婚約前の男女が一緒に入浴するなど、重罪だ!!」
　出会った時のような激しい剣幕で、俺を糾弾してきた。
「なら率先して法を破ってんのはお前だろうが!!」
「黙れ！　ボクは父様に代わって、この世界の法と秩序を守る責務がある！　偶然お風呂場で出会った男女がたまたま合意しましたなどという言い訳は、聞く耳持たんぞ!!」
　いったい何を言っているんだこの子は……。
　ポコッ、と小さな泡が浮き上がった直後。
　ゴーグルだけつけた裸のトゥアールが、水(みず)飛沫(しぶき)を弾(はじ)かせて湯面から飛び出してきた。
「フッ……やはりこのロリ、油断ならない耳(みみ)年(どし)増(ま)ですね」
「「うわああああああああああああああああああああああああ!!」」
　裸ゴーグルという、流行を二世紀ほど先取りしたファッションが

網膜を直撃し、俺は自由になった両手で自分の目を覆い隠す。
「何だキミは、いつから潜ってた!!」
「お風呂というのはもっとも無防備な空間。殿方が油断し、全てをさらけ出す場所。ゆえに潜水力とは、女子の基本スキルなのです」
　全く答えになっていないが、とにかく考えたくないほど長い時間潜んでいたことだけはわかった。
「いやー、いいもん見ました！　はい慧理那さん、特製の冷却シートですよ」
　のぼせた慧ぇ理 り那なの救護をしてくれるのは、ありがたい。
　いつも突拍子もない行動をするけど、さりげなく、そしてしっかりとみんなを助けてくれるんだよな、トゥアールは。
　――しかし、あいつがこんな騒ぎを聞きつけないはずがないのだ。
「な、何してんのよみんなで……！」
　再び浴場のドアが勢いよく開け放たれたかと思うと、愛あい香かがわなわなと震ふるえながら入ってきた。着衣のままで。
　トゥアールは慧理那のおでこにシートを貼り終わると、愛香を指差して笑った。
「ヒャハハハハハハ、負け犬の貧乳が匂いがどうのとクンクン鳴いている間に、私はおしべもめしべもバッチリフォーカスしましたよ！　今夜はいい夢見れそうです!!」
「……永久に夢を見続けなさい――!!」
　愛香は目を逆三角にして湯に飛び込むと、スイミングスクールでおばさまたちの羨望の眼まな差ざしを受けること必至の超速アクアウォーキングでトゥアールに摑つかみかかった。
「ごああああああああああああああああコンクリートの固さ!!」
　ジャンプし着水するマンボウのように、ビタンビタンと湯面に叩

きつけられるトゥアール。

愛香はすっかりいつもの調子を取り戻していた。

……そうか、トゥアールは愛香に元気を出してもらうために、一芝居打ったのか。

「ありがとう、トゥアール」

ビタンビタンという音がどんどん硬質になっていくのを聞きながら、俺はトゥアールに感謝するのだった。

◇

貴の三葉ノー・ブル・クラブの移動艦の空き部屋に、ユグドラシルギルディとラフレシアギルディの姿があった。

他の部下はいない。密談のようだった。

「…………手柄？」

ラフレシアギルディが聞き返す。

「うん。みんな、先生が手柄を横取りされる、って気にしてたでしょ。でも手柄が必要なのは、先生じゃないの。この貴の三葉ノー・ブル・クラブのみーんなで、大きな手柄を立てよう。そうすれば、もうみんな自分がキライだって泣いちゃったりはしないでしょ？」

「先生……」

ユグドラシルギルディの突然の提案に、ラフレシアギルディは戸惑いを隠せずにいた。

今日も隊のみんなで泣いて、笑った。いつも通りそれで終わりだと思っていたのだろう。

「どうしてこの世界にツインテイルズが現れたのかはわからないけど、先生たちと同じ目的じゃあないでしょ？　だったら……ね」

ユグドラシルギルディは、たまに驚くほど大胆なことを言い出

す。

「けど、ツインテイルズはダークグラスパーが指揮している部隊が戦ってるんすよ。横から掠かすめ取るような真ま似ねしたら、あの女、またアドレス教えろだのムチャクチャ言ってきますぜ」

「ダーさんは、何もしなくてもアドレス聞いてくるから、大丈夫」

　そう言われては、何も言い返せない。

　思えば、はぐれ者の自分たちより、組織の中でたった一人の人間であるダークグラスパーの方が、よほど孤独なように感じられた。

「先生たちは、攻撃を受けた側ですもの。自衛として戦って、そして勝ったなら、何も言えないわよ」

「そうっすけど、いざ喧けん嘩かふっかけて、あいつらバックれたらどうします」

「大丈夫。先生が、そうできないようにするから」

「！　まさか先生……」

　ユグドラシルギルディは、深い覚悟を瞳ひとみに湛たたえ、頷うなずいた。

「先生のあれは……確か、首領に禁止されたんじゃあ」

「アルティメギルには、何の益ももたらさない危険な技だからね。でも、多少お目玉を食らっても、ツインテイルズを倒せちゃったら、充分プラスになるよ」

　自分たちに華を持たせるため、ユグドラシルギルディは危ない橋を渡ろうとしている。

「ツインテイルズの属性力エレメーラは……ラフレシアギルディちゃん。みんなで力を合わせて、勝ち取って」

「せ、先生ェ……」

「みんな、泣き虫さんだね。でも、今から先は、絶対に泣いたら駄目だよ？」

　涙を振り払い、ラフレシアギルディは覚悟を決めた。
「はい！　先生も、どうかご無事で!!」
　ラフレシアギルディは特攻服を翻ひるがえし、部屋を後にする。
　華を持たせてもらうのではない。
　恩を返すのだ。
　愛する恩師に、今こそ最大の華を持たせるのだ――。

　　◇

　翌朝、俺は身支度を調え、部屋の前でみんなと合流した。
　俺は一人別の部屋だったが、隣の愛あい香かたちの部屋でドッタンバッタンしている音だけは、寝つくまでずっと聞いていた。
　一人だけしゃきっとしている慧え理り那なに挨あい拶さつした。
「おはよう慧理那。よく眠れた？」
「眠れませんでしたけど、修学旅行みたいで楽しかったですわ！」
「枕の代わりにトゥアールが飛んでいたぞ」
　桜さくら川がわ先生の一言で、だいたい情景が浮かんだ。
　トゥアールと愛あい香かは、睡眠は少しだけのインターバルに過ぎないと言わんばかりに、早くもいがみ合っている。
「何で総そう二じ様が別の部屋なんですか！　旅の情事……もとい情緒がまったくありません！」
「ほんっっっっっとあんたは体力だけは底無しよね！　あんなに何発も叩き込まれて、なんで諦あきらめて寝ようって思わないのよ!!」
「それはこっちの台詞せりふですよしつこいですね！　今回進展しなかったら、また未み春はる艦長の不興を買ってしまうじゃないですか！　そろそろ私が一発の季節です!!」
　目の下にくまを作りながら、それでも朝から戯たわむれる。みんな

元気だ。
　何より、愛香がペースを取り戻してくれたのが心強い。
　俺は、昨夜こっそり俺の部屋に来たロエルに提案されたことを、みんなに伝えた。
　ちなみに、そのロエルは壁ドン（多分トゥアールだろう）に驚いて、すぐに帰って行ったのだが。
「みんな。ロエルが、『朝食後に城下街まちに行くから、みんなで一緒に行こう』ってさ」
　愛香と慧理那は承諾した。
「この前はロロリーの戦いだけ観て引き上げたし、ゆっくり観光するのも悪くないわね」
「ええ、わたくしも行きますわ」
　昨日言っていた、属性玉多重変換機構エレメアディイッションの最終調整のためだろう、トゥアールは別行動を提案した。
「それじゃあ私は一旦、スタートゥアールに戻ります。尊みことさん、ついてきてください」
　一人じゃ危険だとトゥアールに忠告する間もなく、桜川先生が指名された。
「何な故ぜ私が!?　私も城下街を散策したいぞ!!」
　大人げなくごねる桜川先生。
「あなた顧問だって言ってついてきたじゃないですか、護衛ぐらいしてください！　またゴリラに襲われたらどうするんですか!!」
「私は変身できないしだな……」
「だからこそですよ！　ツインテール属性のない尊さんはエレメリアンに狙ねらわれる危険はありませんから、純粋にボディガードとしての腕を見込んでいるんです！」
　なるほど、俺たちの誰だれかが送っていくより、そちらの方が安全

だ。奴やつらの襲撃の危険がある以上、ツインテイルズの戦闘要要員三人は揃っていなければいけないしな。
　桜さくら川がわ先生は歯切れ悪く抵抗する。
「いや、だって……お前、私と二人っきりで話がもつか？　沈黙になったらつらいぞ……」
「中途半端に現実的ですね！　大丈夫、私があふれる若さをたっぷり自慢してやります!!」
「うーん……何でかわからんが、お前のことはあまり羨うらやましいと感じんのだよなあ。津つ辺べたちほど若さを感じないというか。人生で培つちかった、私の直感だな」
「ペッ!!」
　トゥアールは二八年の人生で培われた女の直感にたやすく唾だ棄きし、桜川先生を強引に随伴させて出て行った。

◇

　世界に国は一つだけで、可愛かわいい双子がお姫様で、そのお姫様が世界を守るため戦っている。
　これだけ条件が揃って、人気が出ないはずがない。
　ロエルとリルナが城下街まちを歩くだけで、パレードのような騒ぎとなった。
　見かけるのはやはり、ポニーテールの人ばかりだ。
「姫様！　昨日もかっこよかったよー!!」
「うん、ありがとう!!」
　騎士団に護まもられて先行するロエルたちは、人々に声をかけられては笑顔で返していた。
　愛あい香かや慧え理り那なは騎士団のすぐ後ろを歩いているので、リル

ナが許可した人間だと思われているのだろう、さすがに今回は妙なリアクションに晒さらされることはなかった。

　トゥアールから簡易の認識攪乱装置イマジンチャフを借りることも考えたが、騒ぎにならず一安心だ。

　もちろん、今この世界ではかなり稀き少しょう価値があるのだ、注目までは避けられないだろうが。

　街の人たちの視線には物珍しさというより、憧憬すら感じる。

　この人たちにとっては、ツインテールとは侵略を思い出させるものなのかもしれない。

　俺は、ツインテールがそんな風に見られるのはいやだ。

「お若いの」

　後ろから声をかけられて振り返ると、少し離れたところで、白しら髭ひげをたっぷり胸までたくわえた小柄なおじいさんが手招きをしていた。

　俺？　と自分を指差すと、笑顔で頷うなずく。

　慧理那にすぐ追いつくと伝え、俺はおじいさんの元へ駆け寄った。

「あの、何ですか？」

　おじいさんは、俺ではなく、前を歩いている愛香や慧理那の背を……いや、ツインテールを見ながら言った。

「お前さんたち……ひょっとして、別の世界からやってこられたのでは？」

「……え……」

　正直に答えていいものかわからず、俺は言い淀よどむ。

　おじいさんは俺の心中を察したように、優しく語り始めた。

「ツインテールが、いきいきしておる。この世界ではあんな子、今はもう見れぬよ」

　──なかなかの洞察力だ。
　俺は、あえて肯定はせず、この世界の人たちに聞きたかったことを聞いてみた。
「あの、おじいさん。ツインテールを禁止されて、辛つらいと思ったことは？」
　おじいさんは空を見上げ、
「辛いですじゃ。ツインテールを見ることが楽しみで、この年まで存ながらえてきたというに……。ですが、世界の平和のためですからのう。孫の代までの幸せを思えば、儂わしの生き甲が斐いなど」
「……そうだな……。ごめん、おじいさん。愚問だった」
　後の世のために、今ツインテールを諦あきらめる。
　俺に、そんな決断ができるだろうか……。
「ふぉっふぉっふぉ、いいのですじゃ。一番は他にありますからのう。若い頃からずっと好きだった熟女が、今の儂の年齢では何もおかしいとは思われませんからのう。これからの余生は、熟女を愛めでて過ごしますじゃ。お若いの……熟女について語りませぬか」
「遠慮します」
「全く、熟女の魅力がわからぬとは、まだまだ青いですのう」
「そりゃ、若いんで……」
「若い頃から熟女を愛すると、世界が見違えますぞ」
　間違いなくそうなるだろうな。
「年寄りの話につき合ってくれてありがとうのう。風のうわさで、姫が異世界から助っ人を呼ぼうとしている、と耳にしたもので……もしや、と思いましたじゃ」
「いえ、俺も話せてよかったです」
　極秘事項のはずだが……この人は、どこでそれを聞いたんだろうか。

　しかし、こうして生の声を聞けて、安心した。ツインテール禁止を強行して、ロエルたちは本当のところは民衆にどう思われているかと心配だったけど、取り越し苦労だったようだ。
　きっと、民を守るために戦う幼い姫は、皆の心の支えだったんだろう。
　誰(だれ)もがその苦しみを理解し、受け入れてくれている。
　俺もおじいさんと同じように、空を見上げた。
　雲一つない、抜けるような青空だ。

　その青空が――突如、朱(しゅ)色(いろ)に染まった。

　赤色の粉が、雪のように降り注いでくる。
　城下街(まち)で行われるイベントか何かだと思ったが、ほどなく街中いたるところから悲鳴が上がり始めたのを聞き、これが何なのか見当がついた。
　昨日貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)の連中が、俺の話に夢中になった時に振りまいていた花粉にそっくりだ。
　しかし、いったいどこからどうやって振り撒(ま)いているのか、およそ四方八方どの方角の空を見上げても、満(まん)遍(べん)なく舞い落ちている。
「うう……」
　突然おじいさんが胸を押さえて座り込んだのを見て、慌てて駆け寄る。
「おじいさん！」
「これは一体……。あんなに大好きだった熟女が……何とも思いませんですじゃ……。心に、穴が開いてしまった……。ああ、熟女が……熟女が……」

　そうしておじいさんは、熟女熟女とうわごとのように呟つぶやきながら、気を失ってしまった。
「まさか、この粉が原因か!?」
　おじいさんを壁にもたせかけ、俺は愛あい香かたちに合流すべく走り出した。
　人々は皆さっきのおじいさんと同じように、気絶して地面に倒れていく。
　もう、一人一人を介抱するゆとりもない。
「愛香、慧え理り那な……大丈夫か!?」
「そーじ、大変よ！」
　愛香たちに追いつく。騎士団の女性たちは貧血を起こしたようにへたり込み、その側そばではロロリーに合体した姉妹が顔を真まっ青さおにして膝ひざをついていた。
　何ともなく立っていられているのは、俺たち三人だけだ。
　ロロリーは立ち上がることもできず、俺のズボンの裾すそを握って上目遣いで見つめてきた。
「……お兄ちゃん……この粉、みんなの属性力エレメーラを持っていっちゃったよ……。ロロリーも、奪われないようにするのがやっとで、苦しいよう……」
「何だって!?」
　騎士の一人が、苦しみ呻うめいている。
「おねしょが……姫様のおねしょの思い出が、消えてしまった……もういや……」
　心中は察するけど騎士の人、同僚の前でその非常に特殊な属性は口にしない方がいい。
　……どうやら本当に、属性力エレメーラが奪われていっているようだ。

　まさかこの粉……あいつらが属性力エレメーラを奪うあの巨大なリングと、同じ効果があるのか!?

　トゥアールたちはもうすでにスタートゥアールには辿たどりついている頃だ。

　恐ろしいことに異世界でも繫つながるトゥアルフォンを取りだし、トゥアールと連絡を取る。

　最初に聞こえたのは、何な故ぜか桜さくら川がわ先生の声だった。

『おい観み束つか！　びっくりしたぞ、道中、足の生えた魚の大群の大移動を見かけてだな……写真撮ったからあとで見せてやろう』

『貸して下さい、尊みことさん！　……総そう二じ様、状況は把握しました、今、この世界の属性力エレメーラが次々に奪われていっています!!』

　トゥアールの言葉は予想通りだったが、できることならこればかりは外れて欲しかった。

「だけど、この世界はまだツインテール属性が拡散していないんだぞ!?　全ての人に、奪われるほど強力な属性力エレメーラが発現しているわけないだろ!?」

　禁止されて秘め隠しているツインテールへの思いを、強引に奪っているだけだ。

　それ以外の属性だって、手当たり次第だ。もはや属性の強弱すら意に介していない。

『その通りです。全く熟していない果実を、行き当たりばったりで収穫しているようなもの……エレメリアンには何の意味もありません。いえ、もしあるとすれば……』

　貴の三葉ノー・ブル・クラブ──仲間を倒された落とし前をつけると言ってはいたが、ここまで無差別な当てつけをしてくるような奴やっらだったとは！

『とにかく、いつもエレメリアンが使用しているリングほどの強制

力はありません。テイルブレスを装着している総二様たちは無事ですし、スタートゥアールの中も問題ありません』

　しかし、ロロリーほどの強力なツインテール属性でも、抗あらがうのがやっとなのか……。

　ロロリーのツインテールが、赤の花粉で彩られていく。

　世界を守るために日常のツインテールを捨てた彼女たちが、心に秘めたツインテールまでをも奪われるなんて……絶対に許せない!!

「トゥアールさん。この花粉が貴の三葉ノー・ブル・クラブの仕業なら、発生源に彼女たちがいるはずでは!?」

　慧え理り那なの言う通りだ。そこに行って、決着をつけてやる……！

『街を出て変身してください、目印が見えるはずです。私たちの位置からは、見えています』

「わかった！　ロロリー、君はここにいるんだ！　絶対に動いちゃ駄目だぞ!!」

　俺の言葉にも応こたえられないほど、ロロリーは疲ひ弊へいしてしまっている。

　愛あい香かはロロリーをじっと見つめ、その場から動こうとしない。

「おい愛香、気持ちはわかるけど急ごう！」

「……そうね」

　俺たちは街を出て、人目がないことを確認し、変身する。

　赤青黄三色並んだテイルギアも、濃霧のような花粉の前では放つ光が霞かすんでしまう。

　強化された視力の目に飛び込んできたのは、とんでもないものだった。

「な、何だ、あれ……」

昨日までは……いや、さっき街に来た時はなかったはずのもの。
天を貫くような巨大な樹が、地平の彼方に屹(きっ)立(りっ)し、花粉を噴き出している。
あまりにも巨大になっていたのですぐには気づけなかったが……あれは紛れもなく、昨日見たユグドラシルギルディそのものだ。

◇

ブルーは自分の眼前に左腕をかざし、俺にも切迫した声で促してきた。
「レッドも発動して！　属性玉(エレメーラオーブ)──脚属性(レッグ)!!」
脚属性(レッグ)を三人一斉に発動して脚力を強化し、無人の地平を駆け抜ける。
目印とした巨大なユグドラシルギルディに辿(たど)りつく前に、昨日の焼き直しのような律儀さで集結した、貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)のエレメリアンたちに遭遇した。
地面をブーツで抉(えぐ)りながら急ブレーキをかけ、俺たち三人は元凶の一味と対(たい)峙(じ)した。
「昨日より、少ないですわ……」
イエローに言われてよく見てみると確かに、倒した分を差し引いてもずっとエレメリアンの数は少ない。
「オメーラ！　腹から声出してけヨ!!」
ラフレシアギルディが先頭に立ち、部下たちを鼓舞するように拳(こぶし)を突き上げた。
「オッス姐(あね)さん!!」
今日は、すでにバイクを乗り捨てている。
猛(たけ)りに猛った彼女たちの声が、昨日の爆音以上に大気を震(ふる)わ

せていた。

「突(っ)因(いん)帝(てい)龍(る)頭(ず)オラァ！　あたいらと勝負しろや!!」

「俺たちまで、族(ゾク)のチーム名みたいなことになってる……!!」

　そして、特攻服を翻(ひるがえ)し、武装と思(おぼ)しき鉄パイプ状の武器を手に近づいてきた。

「ラフレシアギルディ……いったいこれは何だ！　この世界に、何をした!!」

「ッ……先生さ……！　先生の秘技、〝撒死舞霧(マキシマム)〟だ！　名付けたのはあたいだがな!!」

　口惜しそうに歯(は)噛(が)みしながらも、ラフレシアギルディは誇らしげにそう断じた。

「先生は、最終闘体になっちまった。もう、誰(だれ)も止めることはできねえ。この世界を蹂(じゅう)躙(りん)し尽くすまで、決して元の先生には戻らねえんだ……」

　そんなこと、させてたまるか。俺は力の限り叫んだ。

「冗談じゃねえ。俺たちが止めてみせる！」

　すでに赤の花粉は、火山灰のように地面に積もり始めている。ラフレシアギルディの言う通り、このままでは世界を覆い尽くすまで降り続けるだろう。

　焦る俺たちの行く手を阻むように、ラフレシアギルディは両腕を広げた。

「先生のところには行かせねえぞ！　突(っ)因(いん)帝(てい)龍(る)頭(ず)！　おめえらブッ倒して大金星あげて、あたいらは胸張って組織で生きるようになるんだ！　それが、先生の願いだ!!」

　ラフレシアギルディの頭の花弁にちりばめられた大小の斑(はん)点(てん)が妖しく発光し、全力の開放を如実に語る。

「……ふざけるなよ……今日という今日は本当に頭に来たぜ……。

生きる糧としてじゃなく、ただ存在を誇示するためだけにこの世界の人たちの属性力エレメーラを奪うなんて、許せねえ!!」
　全開なのは俺の怒りも同じだ。
「レッド。その怒りは全部、あのデカブツにぶつけてやって。ここは、あたし一人でいいから」
　ブルーがウェイブランスを発動させ、ラフレシアギルディと睨にらみ合った。
「ラフレシアギルディと戦うっていうのか!?　昨日あんなに……」
　それ以上言うなとばかりに、俺の口くち許もとへと腕を突き出すブルー。
「……いいから行って。いつもこうだったでしょ。あたしの苦手な敵が現れたら、レッドが庇かばって戦おうとしてさ……」
　それを言ったら俺だって、ブルーに庇われることが何度あったか。
「この先どんなとんでもない変ャ態ッが現れるかわかんないのに、この程度でビビってたら、戦ってけないわ。あたしはこいつで恐怖を乗り越える。……だから……先に行って、二人とも」
　それでもこれはブルーにとって、昨日悩みに悩んで見つけた、乗り越えるべきハードルなのだろう。それに、こいつらの理不尽に激しい怒りを燃やしているのはみんな同じなんだ。
　俺とイエローは頷うなずき合い、ブルーの意思を汲くむべく走り出す。
「あんた、匂いが大好きなんでしょ。香水とかじゃなく、生き物独特の匂いが。なら、とびきり生命ライブに浸れる匂いを嗅かがせてやるわ」
「はん、何だってんだよ、そりゃあ」
「あんた自身の血よ」

　ブルーとラフレシアギルディが同時に地を蹴り、互いの獲物で切り結ぶ。
「さあ行って！　レッド、イエロー‼」
「……頼んだぞ、ブルー‼」
　部下たちも、横を抜けていく俺たちを止めようとはしない。
　俺たちを確実に足止めするため、戦力を分散させているのは明白だった。

　イエローと二人、ユグドラシルギルディを目指し、走る。
「トゥアール！　奪われた属性力エレメーラは、どれぐらい時間が経たつと元に戻せなくなるんだ⁉」
　強化戦闘員アルティロイドを蹴散らしながら、縋すがるようにトゥアールに通信する。
『わ、私も正確な時間はわかりません……。ですが、長く離れれば離れるほど、属性力エレメーラは元の肉体に固着できなくなります。一刻も早く取り戻さなければ‼』
　そうなるよな、やっぱ……。腹を括くくって戦うしかない。
　保護色のように花粉の中を動き回る、赤い強化戦闘員アルティロイド。狙ねらいなど定めても意味はない。ただひたすら、俺はブレイドを振り回した。
　イエローと二人でようやく強化戦闘員アルティロイドを一掃した、その時。
「レッド！　危ないですわっ‼」
　イエローに突き飛ばされた直後、俺が立っていた場所は散弾で粉々に吹き飛んだ。
「うふん。いい忠誠心のワンちゃんね——決着をつけましょお？　テイルイエロー」

「マンドラゴラギルディ!!」

　髪のように茂った頭の上の若草を逆立たせ、マンドラゴラギルディがリベンジマッチにやって来た。

　イエローはヴォルティックブラスターを構え、俺に言った。

「ここはわたくしに任せて、先に行ってください、レッド」

「だけど、あいつだって幹部だぞ！」

「わたくしを信じてください。大丈夫。必ず勝って、後から追いつきますわ」

　いや、あいつとイエローが戦ったら何か化学反応が起こりそうで、怖いんだが……。

「一度言ってみたかったんですの、この台詞せりふ。ブルーに先を越されてしまいましたけれど」

　イエローは照れくさそうにウインクした。

「そうか……すまない、任せるぞイエロー！」

　昨日のお風呂と同じように、俺たちは背を合わせた。

　その時とは身長差も随分とできたし、何より、肌の温もりは感じない。……けれど。

　確かな信頼を体温の代わりに預け合い──俺とイエローは同時に、地を蹴った。

「おふおおおおおおおおおもっと撃ちなさぁい！　温ぬるいわ！　温いわよ!!　くまなく全身をよおおおおおお!!」

「撃てば撃つほど喜ぶ敵……！　は、はふぁ、こ、これは……脱ぬぎ甲が斐いがありそうですわ……!!　ご、ご主人様、や、やっぱり最後まで見ていってくだ……」

　………………本人の願い通り、俺は脇わき目めもふらず走り抜ける。

　もう決して後ろは振り返らないぜ、イエロー。信じてるからな。

　俺とすれ違いで、バイクや改造車が駆け抜けていく。マンドラゴラギルディに加勢しに向かった、残りの貴の三葉ノー・ブル・クラブの面々だろう。
　一刻も早く、ユグドラシルギルディの元へたどり着かなければ！
　再び脚属性レッグを発動しようとした俺に、トゥアールが緊迫した声で通信してきた。
『総そう二じ様、気をつけてください！　また何か来ます!!』
　俺にもほどなく見えた。陽かげ炎ろうのように周囲を揺らめかせながら、悠々と歩いてくる影が。
「くそ、まさかこんな時に……!!」
　炎のように紅あかい身体からだと翼を持つエレメリアン。フェニックスギルディだ！
「よう！　また会ったな、テイルレッド」
　街中で友人に会ったかのように、手を挙げて呼びかけてきた。
「俺様をいぶり出すための罠わなかと思えば……属性力エレメーラの無差別奪取か。無む茶ちゃ苦く茶ちゃしやがる」
　空の惨状を見ながら、無警戒なままに俺へ近づいてくる。
「……時間はないけど、どの道こいつも倒すか追っ払うかしなきゃいけなかったんだ!!」
　己を鼓舞するように独りごち、俺はここでこいつと戦う決意をする。
　だが、フェニックスギルディはばったり会っただけでなく、その後散歩につき合うと言い出すかのような気軽さで、俺の横に並んだ。
「おし、俺様も手伝うぜ。あいつを片づけに行くか！」
「お前、ユグドラシルギルディと戦う気か!?」
　貴の三葉ノー・ブル・クラブは、こいつと戦わないとはっきり念押しして

いたが……。
「世界を壊そうとしているやつを、放っておけるかよ!!」
「本当か……」
「おうよ、俺様は、正義の味方だからな!!」
　いちいち暑苦しいほどに大仰だが、嘘うそを言っているようには見えない。
　この気持ちがいいほどの清々しさと、ロエルから語り聞かせられていた悪魔のような所業が、どうしても同一人物のものとして一致しない。
　正義の味方……か。こいつの直情径けい行こうさと、ロエルの純粋さとの間に、致命的な誤解が生まれてしまっているのかもしれない。ユグドラシルギルディから人々の属性力エレメーラを取り返した後は、こいつとじっくり話し合う必要があるな。
「……わかった。とにかく今は、あいつを止めるのが先決だ。行こう」
「おう、これじゃあせっかくこの世界に芽吹いたポニーテールが台無しだからな。ったく、ツインテールだけ奪うならともかく、無む茶ちゃ苦く茶ちゃしやがって！」
　その言葉に、俺の足は地面に縫ぬい止められた。
「──フェニックスギルディ。これだけは教えてくれ。お前は、正義のために……エレメリアンに襲われる人たちを守るために戦っている、それは嘘じゃないんだろ!?」
「ああ。そのためには、アルティメギルの最大の目的である、ツインテールの拡散を阻止することが必要じゃねえか。俺様は異世界を旅して、諸悪の根源であるツインテールを世界から消して回ってるのさ！」
　俺は頭に血が昇り、フェニックスギルディに食ってかかった。

「てめえ何が正義の味方だ！　稀代の大悪党じゃねえかこのペテン師が‼」

「お、おい、急ぐんじゃ……」

　確かに口論してる暇はない……！　だが、こいつを放っておくこともできない！

「勝手にツインテールを悪者扱いすんな！　お前が世界を守りたいって言うなら、そんな回りくどい真似しないで、アルティメギルと戦えばいいだろうが！　俺たちと同じように‼」

「ようし、よく聞け。お前らツインテールの戦士は、ツインテール中心で物事を考えるのがいけねえ！　もっと大局的にものを見な！　正義のためにな‼」

　フェニックスギルディはまたも大仰にポーズを取った後、俺を力強く指差した。

「言い方はよくねえが、俺様が元のさやに収めているんだ。世のあるべき姿にな！　文明も、生物の進化も、急激すぎるとすぐに終しゅう焉えんを迎える。ツインテールもそうだぜ。元は、マイナーな髪型じゃねえか。ほどほどの状態になるのが、一番だぜ！　ポニーテールは、万人に受け入れてもらえる。普通はそうだろ⁉」

　なんて傲ごう岸がんな考え方だ。ツインテールに、身の程を弁わきまえろと言っているように聞こえる！

「俺は、ツインテールが決して無む茶ちゃな進化をしているとは思わない！」

　憧あこがれで拡散した愛まで否定してしまっては、それこそ進化すらせずに終焉を迎える‼

　たじろぐフェニックスギルディにさらに詰め寄り、俺は激げき昂こうした。

「この世界を見ろ！　そのポニーテールが、受け入れられている

か!?　多くの人には、自由を奪う枷でしかない……！　何もほどほどじゃない、お前こそポニーテール中心で物事を考えてるじゃないか！」

　ポニーテールが好きな人も、そうでない人も窮きゅう屈くつな思いをして生きていく……この世界のどこを見て、あるべき姿だなんてほざきやがる!!

「ツインテールを禁止してポニーテールを世界に強要するお前の提案……異世界のツインテールの戦士たちは、本当に心から受け入れたのか？　違うだろ!!」

「む、それは……！」

　ロロリーはこいつと戦って勝てなかった、だからこいつの要求を呑のんだって言った。

　こいつはどの世界でも、自分の信念こそ正義だと、偽悪に酔って彼女たちの思いを力尽くで踏みにじってきたんだ。俺様みたいに強いエレメリアンはまだまだいるんだ、戦い続けても無駄なんだぞ、と心を折って。対話の余地なんてない、このやり方が一番だと盲信して。

　多くの結果を求めるがあまり、本当はどんな助けを求めているかなんて見向きもせずに。

「正義という理想に溺れたいだけなら、大きなお世話だ！　お前のやり方の果てに待つのは、ツインテールもポニーテールも輝きを失い、悲しみと憎しみに彩られた世界じゃないか!!」

　フェニックスギルディは、不敵に笑って腕組みをした。

「ぬぬっ……何て奴やつだ、ツインテールを信じ抜き、微み塵じんの迷いもねえ！　なるほど、アルティメギルのアイドルだけあって、容姿だけじゃなく信念も本物ってわけか！　面白え!!」

「当たり前だ、偽りの信念で、命を懸かけて戦えるか!!」

こいつは持論を過信して、人の心の強さを見くびっている。
「だが！　人様の説教でコロっと趣旨替えするほど、俺様の信念も薄っぺらかねえぜ!!」
「ああ……だろうな」
俺は、フェニックスギルディの信念を、完全に否定できるほど立派な人間じゃない。
こいつの言い分は全くの極論だが、ツインテールが消えることで救われる人がいるという側面も確かにある。表面上は、平和にもなるのだろう。
だけど、少なくとも俺は、この世界で見ている。
ツインテールを押し込められた人々の悲しみを。嘆きを。
そんな世界にせめて笑顔を取り戻そうと頑張る、小さな少女の姿を……！
「俺は、はっきりと助けを求められた。だから絶対に救ってみせる。これは、俺の戦いだ。この世界に、本当のツインテールと、ポニーテールを取り戻すためのな!!」
友情になるかもしれなかった儚(はかな)い思いを絶ち切り、俺は踵(きびす)を返した。
「……待ちな」
フェニックスギルディに呼び止められ、振り返る。
「……ええと、何ていうか、よう……そういう、クソ真(ま)面(じ)目(め)で熱いとことか……」
先程までの勿体つけたポーズはやめたのか、もじもじしながら俺を見ている。
「か、可愛(かわい)いな、テメエ!!」
きゃっ、言っちゃった、と言わんばかりに身を縮こまらせるフェニックスギルディに、開いた口が塞(ふさ)がらなくなる。

「突然何言い出すんだ!?」

　この落差は何だ!?　こいつ、どこまでマイペースに巻き込むつもりだ!?

「俺様と結婚してくれ!!」

　熱烈な求婚をされるが、俺は大仰に溜(ため)息(いき)をついて即お断りした。

「……悪いけど、プロポーズなんて売るほどされてんだよ」

　人間にも、エレメリアンにもな……。本当に。

「な、なんだと……そんな清純をツインテールにしたみてえなナリしておいて、どんだけ恋を弄(もてあそ)んでやがる!?　男の風上にも置けねえやつ！」

　お前こそ、エレメリアンへの意識が変わりそうだった俺の心を弄んだんだぞ！　……いっそそう言ってやりたいが、もう構ってられるか。無視して進もうと思った、のだが──。

「……今何て言った、お前」

　またも俺の足は、地面に縫(ぬ)い止められた。

「ははは、隠さなくていいってえの。テメエの正体が男なのくらい、俺様のフェニックスアイをもってすればたちどころに見抜けるぜ。その上で、結婚を申し込んでるんだ！」

「ギャアアア」

　ブレイザーブレイドを取り出し、ブンブンと振り回す。

　ねちっこい足取りで、フェニックスギルディが近寄ってきた。

「寄るな！　寄るな──────────────っ!!」

「いいや寄るぜ！　俺様も一緒に行くから、あの神樹(ユグドラシル)の下で愛を語り合おうぜ!!」

　何を言ってるんだこいつは！　何を言ってるんだこいつは！
　何を言ってるんだこいつは────────────っ!!
　これは漏もらす！　もう漏らす!!　やだ漏らす!!　後は頼んだ下半身の超科学!!
　へたり込み、小動物のように震ふるえる俺へ、刻一刻と迫ってくる最強の変態。
「さあ、テイルレ──」
「教育的指導ォ────────────ンッ!!」
　無人の銀色のバイクが激走してきて、フェニックスギルディにブチかました。
「うおおおっ!?」
　横腹からの完全に意識外の攻撃だったためか、もろに衝突され、地面を転がるフェニックスギルディ。
「危ない危ない、何や遠くから見てもヤバい絵面やったから、ＭＡＸでブッ飛ばしたったわ」
　バイクは金属質の音を響かせ、火花を散らし、人型のロボットへと変形した。
「メガ・ネプチューン……!?　どうしてここに!?」
　いや、そもそもこいつがこの世界にいるってことは……。
「間一髪じゃったようじゃのう、テイルレッド」
　黒いマントが、朱に染まった世界を闇やみに切り取る。
　案の定、後方から勿体つけるようにゆっくりと─ダークグラスパーが現れた。
「ダークグラスパー!?」
　どういうことだ……こいつが、俺を助けるなんて!?



キャラクター名鑑
022

ユグドラシルギルディ



DATA

身長：68cm→154m

体重：42kg→推定30万t

属性力：教師(ティーチャー)属性

幹部エレメリアン。やさぐれていた女性エレメリアンたちを保護し、一部隊としてまとめあげた。属性どおり真摯な教師肌で、貴の三葉(ノーブル・クラブ)のメンバーたちは敬愛する彼女に手柄を取らせたいと願うも、いつも空回っている。しかし、実は彼女こそ一番の問題児で、真の能力が人間の心そのものを破壊しかねないため、首領や幹部たちから警戒されていた。巨大化能力も持ち、小動物サイズから要塞じみた巨体にまで変化する。

第五章　ツインテイルズ総力戦。

　ラフレシアアギルディが、すんすんと、器官としては存在しない鼻を鳴らす。
「やっぱいい匂いだ。今日も変わらねえ。てめえのその匂いは、一体何なんだ……？」
　もう匂いを嗅(か)がれることは我慢することにしたが、テイルブルーは貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)のエレメリアンたちに四方を囲まれてしまっていた。
「こんだけ子分引き連れて囲み倒して、何呑(のん)気(き)なこと言ってくれてんのよ!!」
「こいつらは子分なんかじゃねえ。同じ先生に救われた生徒(チーム)だ!!」
　そうだそうだ、と拳(こぶし)を突き上げるエレメリアンたち。
「先生はよ、アルティメギルの中でもクズと蔑(さげす)まれてたあたいらを見捨てねえでくれたんだ。居場所もくれた！　あたいら全員、先生のためなら命なんざ惜しくねえんだ!!」
　この仲間意識が厄介だ。
　個の手柄、報償、武勲。そんなものには目もくれないため、目的のためならいくらでも徒党を組んで向かってくる。
「おう」
　ランスを構えるブルーへ、ラフレシアアギルディは小さな鋸(のこぎり)のようなものを差し出した。
「何それ、糸ようじ……？」
　困惑するブルーへ、ダイレクトな要求をするラフレシアアギルディ。

「これで歯と歯の間をお掃除して、その匂いをかがせてくれや!!」
「最悪――――――――――――――――――――――――――っ!!」
　ラフレシアギルディから距離を取りつつ、手近なエレメリアンに攻撃を仕掛ける。
　しかし、この前のように容易たやすくは捉えられなかった。
　目的意識が、覚悟が、貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンたちを強くしている。
『愛あい香かさん！　以前のように、後先考えずフルパワーで兵隊を倒しまくっては、ラフレシアギルディと戦うだけの力は残せません！　ここは、新装備・属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンで、兵隊を一気に殲せん滅めつしてください!!』
　通信でのトゥアールのアドバイスは、実はブルーも今し方考えていたことだった。
　しかし、ただでさえ名前通りの効果とは限らない属性玉エレメーラオーブ、組み合わせた先の力を予測して使うなど、ブルーには難易度が高すぎた。
「……どう組み合わせれば強いかなんて、わかんないわよ！　トゥアール、何か考えて！　こういう変態分野はあんたの十お八は番こでしょ！」
『どの口が言いますか!?』
「……口……」
　それを聞いて、閃ひらめいた。
「そうだ、唇属性リップと、涎属性スロバー!!　同じ口だし、合わせられそう！」
　ロロリーは倒したエレメリアンの属性玉エレメーラオーブは回収しないので、チェリーブロギルディの涎属性スロバーを譲り受けていた。口に関連するもの二つなら適合するだろうと、ブルーは見当をつけたの

だ。
『だけど、涎属性スロバーの効果は未確認のままですよ!?』
　トゥアールが心配そうに通信してくる。
「ものは試しよ!!」
　ぶっつけ本番上等。ブルーは躊躇ためらわずに、新装備を発動させる。
「属性玉エレメーラオーブ……性転換属性トランスセクシャル!!」
　新装備を使用するための起動属性である二つのうち一つ、性転換属性トランスセクシャルを属性玉変換機構エレメリーションに装そう塡てんする。
「……これが、属性玉多重変換機構エレメアディツションョン……」
　左腕の属性玉変換機構エレメリーションに、さらに上から覆い被かぶさるように、新たなパーツが積加された。
〈唇属性リップ〉
〈涎属性スロバー〉
　未いまだ未知数の属性力エレメーラを含め、二つの属性玉エレメーラオーブが発動する。
　ただならぬ雰囲気を感じ取ったのだろう。部下のエレメリアンたちは身を挺してラフレシアギルディを守ろうと、一斉に前に立ちはだかった。
「姐あねさん！　任せてくだせえ！」
「あたしらだって、役に立ってみせますって!!」
　そして──。

「ロロリーも、行かなくちゃ……」
　世界を覆う花粉から自らの属性力エレメーラを守るだけで精一杯のロロリーだが、総そう二じの言葉通りじっとして待っているなど、彼女の責任感が許さなかったのだろう。

街を出て、柄を伸ばしたステッキを地面について身体からだを支えながら、一歩一歩テイルレッドたちの元へと向かっていた。

やっとのことで分断戦の一番目、ブルーの戦闘場を僅わずかに望めるだけの距離まできた時。

うすぼんやりとしたロロリーの視界に、飛び込んできたのは――

「ぎゃあああああああああああああ!!」

「何だこいつ、やべー！　姐さん、逃げうおあああああああ!!」

口から怪光線を吐く、テイルブルーの姿だった。

悲鳴を上げているのは、むしろ異形の怪物たちの側。

青色の光線は止めどなくテイルブルーの口から放射され、怪物たちを、無慈悲に烈はげしく吹き飛ばしていく。見開かれたブルーの目も、僅かに青白く光っている。

もはや、この世のものとは思えぬ惨状だ。

城前での戦いも合わせ、二度も悪鬼となる様を見せられた。もうそれは逆に、人間の真ま似ねもできるだけで悪鬼そのものだと認識すべきではないのか。

「これは……うん、ロロリーがいない方がいいよね！　えへへっ」

ロロリーは半ば白目でかわゆく自己完結をし、この地獄をう回かいするのだった。

「はあ、はあ……。見た目はともかく、なかなかの威力ね……。雑ざ魚こを一掃できたわ」

『すっごくかっこよかったです愛あい香かさん！　総二様の世界に帰ったら、ギャラリーの前でまた使いましょうね！』

声を弾ませて通信してくるトゥアール。

　つまり人前で使えば最後なのだろうと悟り、愛香はこの組み合わせの封印を決意した。
「て、てめえ……！　あたいのダチを！　仲間を！　家族を！　よくも!!」
　アルティメギルの仲間意識を目の当たりにすると、たまに自分たちの方が悪いことをしているような気さえしてしまう。
　だが、ラフレシアギルディにとって、仲間を倒されたことの次に腹立たしいことがあった。
「それが口から吐いた光線で、しかも無味無臭だってのがとてつもなく許せねえ!!」
「あたしは逃げも隠れもしないわ。さあこれで、正真正銘のタイマンよ!!」
　鉄パイプ状の武器を地面に突き刺すラフレシアギルディ。
　意図を察し、ブルーはウェイブランスを同じように突き立てた。
　大おお股また歩きで互いに歩み寄り……拳こぶしと拳の乱打戦が始まった。
「うおらあああああああああああああ！」
「このおおおおおおおおおおおおおっ!!」
　子供の頃から喧けん嘩かっ早ぱやかった愛あい香かだが……後先考えない殴り合いなど、これが初めてだった。
　テイルギアに守られ、直接自分の頬ほおや腹を殴られているわけではないが、それでもブルーは笑った。祖父や総そう二じとの稽けい古こでも、このような拳のぶつけ合いはしたことがない。
　一度でいいから、こんな馬ば鹿かをやってみたかった。
　女として成長していく中、強引に忘れていった希望だったが……今日、叶かなったのだ。
「どうしたオラァ!!」

　しかし、手数の多さではラフレシアギルディに分があった。
　がむしゃらな喧嘩殺法だが、身体能力の高さがそれを補って有り余る。
　なまじ格闘術を習得してしまった分、ブルーの動きには無駄がなく、だからこそ、純粋な喧嘩ではその実直さが無駄だ。
　ブルーは爆撃のような拳けん打だをもろに浴び、吹き飛ばされた。
「ぐうっ……!!」
　身体からだ中じゅうが痺しびれる。
　想像以上に痛めつけられているのだと、その時ブルーは初めて悟った。
　虚ろになる視界に、巨大な樹が映る。
　あそこで今戦っている男のことを思えば、ここで悠長に寝てなどいられない。
　立ち上がったブルーに、ラフレシアギルディは最大の賛辞を送った。
「……てめえ、そんだけボコにされても、すげえいい匂いしてんのな」
　鉄パイプを地面から引き抜くラフレシアギルディ。
　そしてブルーのランスも引き抜くと、放り投げて渡してきた。
「そろそろ終わりにしようぜ」
　それは、ブルーも望むところだった。
　あと一撃。それが限界であることを悟っている。
　ただ必殺技をブチ当てただけでは、決定打にはならないかもしれない。それほどの相手だ。
　二度目はない。その一撃を、かつてない練度で放たなければ。
　しかし、一日一度の切り札である属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンは、もう発動できない。

　必死に考えを巡らせる。
「……なら、一個ずつありったけ使えばいいか……!!」
　ブルーの鋼はがねの脳筋が、大博打ともいえる戦法を思いつく。
　直後、咆ほう哮こうと共にラフレシアギルディが突進してきた。
「いっくぞオラアアアアアアアアアアアアアアア!!」
〈学校水着属性スクールスイム〉
　学校水着属性スクールスイムで地面を泳ぎ、ラフレシアギルディの周囲を何度も旋回して加速するブルー。
「何だ!?」
　地中に消えたブルーに戸惑った一瞬。
　その隙すきを見逃さず、ブルーはトビウオのように勢いよく地面から飛び出した。
「うおおっ、てめえ!?」
　真下から砲弾のように殴りつけられ、ラフレシアギルディはブルーと共に空高く舞い上がった。
〈髪紐属性リボン〉
　さらに髪紐属性リボンを発動して飛翔による加速力もプラスし、そのまま遥はるか高空へと押し上げていく。赤い花粉の層を突き抜けた時、ラフレシアギルディを宙空に置き去りにして、ブルーは急降下した。
　ラフレシアギルディの落下を待たず、ブルーは空中で勢いを殺すことなく地面に向かって飛翔し続ける。翼に変形したリボンが元に戻っても加速は止まらず、さらに発動の電子音が重ねられた。
〈兎耳属性ラビット〉
　あわや墜落という惨事の寸前で見せた冒険。
　落下の勢いを殺さず、ブルーは地面に着地した。
　両足が悲鳴を上げる。筋を痛め、骨を軋きしませてなお、何の躊ちゅ

ぅ躇ちょもなく渾身の力で地面を蹴り抜く。大地は陥没し、土砂が噴き上がった。
　兎耳属性ラビットの跳躍力に落下の勢いを上乗せし、テイルブルーはさらに倍加した速度で再び天へ昇る。ウェイブランスが完全解放ブレイクレリーズし、穂先から光があふれてゆく。
「はは、てめえ……ほんと、生命ライブなヤツだな」
　轟ごう然ぜんと迫るテイルブルーを目に、ラフレシアギルディからは感嘆しか出なかった。
「エグゼキュート……」
　オーラピラーに裂く余剰力さえ惜しみ、テイルブルーは残る全ての力を最後の一撃に託した。
「ウェ――――――――――――――――ブ!!」
　被害の心配も、相手を拘束する必要もない空だからこその一撃必殺。
　渾身の槍やりはラフレシアギルディを捉え、空に大だい瀑ばく布ふを咲かせた。

　限界を超えた衝撃で、ウェイブランスは砕けてしまった。
　死力を尽くした戦いは、ここに決着を迎えたのだ。
「あたいの負けだ……それにしても、強つぇえーなあ、お前」
　身体からだから放電し、今まさに散ろうとするその時、ラフレシアギルディは、喧けん嘩か友達にのされたような清すが々すがしさで、屈託なく笑った。
「大切な人のために戦ってんのは、あんただけじゃないのよ」
　それを聞き、ラフレシアギルディは納得したように目を伏せた。
「ああ。やっとわかったぜ……。ずっと気になってた、お前の匂いだ」

　自分でも気になっていたことを蒸し返され、ギクリとするブルー。
　しかし、紡（つむ）がれた言葉は、とても優しかった。
「愛……。そうだ、これは、愛ってやつじゃねえのか……？　へへ、どうりでいい匂いのはずだ。先生に似てらぁ……」
　その匂いが全く同じではなかったのは、愛の種類の違い故（ゆえ）だろう。
　属性力（エレメーラ）という、人同士の愛とは本質を違える心の力から生まれた生命でありながら、家族愛にも似た仲間の繫（つな）がりを拠（よ）り所とした彼女だからこそ、感じられたのかもしれない。
「テイルブルー。お前の匂いは、愛だ……。愛の香りだな……」
「変態のくせに詩人じゃない」
　頭と頭を向かい合わせ、大の字になって倒れる二人。
　ここが河原だったら絵になるだろうか……と、ブルーは苦笑した。
「おうテイルブルー。てめえ、倒したエレメリアンの力……さんざん使いやがってよう」
「悪い？」
　咎（とが）めるというよりは拗（す）ねるような口調で吐き捨てたラフレシアギルディ。
　直後の言葉は、さすがにブルーも予想できないものだった。
「あたいのも、ちゃんと使えや」
「え……」
「あばよ」
　照れくさそうに鼻を搔（か）いたあと、爆散するラフレシアギルディ。
「愛の香り、ねえ」

まるで自分の手の平に吸い込まれるように飛んできたラフレシアギルディの属性玉エレメーラオーブを受け止め、ブルーは……愛あい香かは微笑ほほえんだ。
「そうだったら……嬉うれしいわね」
レッドを進ませるために殿しんがりを務め、見事敵を撃破した。
あとは、レッドの勝利を信じて、このまま倒れて休んでいてもいいはずだ。
「さて、と」
それでもブルーは、満まん身しん創そう痍いの身体からだに鞭むち打って立ち上がる。
自分の戦いを遠望していたロロリーには気づいていたが、彼女の姿はもうなかった。
「……もう一つ、ケリつけなきゃね……」
酷こく使しすぎてまともに動かない足を引きずり、ブルーは遥はるか彼方のユグドラシル目指して歩き始めた。

◇

あの時、城前での乱戦をユグドラシルギルディが止めた理由が、やっとわかった。
貴の三葉ノー・ブル・クラブは、あくまで追跡役。フェニックスギルディへは、刺客が差し向けられていたんだ。
闇やみの処刑人──ダークグラスパーが。
「な、何で俺を助けるんだ、ダークグラスパー!!」
俺の問いに、ダークグラスパーは意味ありげに笑った。
「つれぬことを申すな。お前はわらわの嫁となる娘。こんな焼き鳥ごときに渡しはせぬ」

　どうしよう。ダークグラスパーなのに、婚こん姻いんを仄ほのめかされてもすげえほっとする。

　さっきのショックがでか過ぎたんだ。これを繰り返されたら、俺は洗脳されてしまうかもしれない。

「焼き鳥だとぉ!?　もっとかっこよく呼べ！　たった一人の戦士にねちねち大勢でかかるてめえら根暗なアルティメギルと違って、俺様は正義の鳳ほう凰おうなんだぜ!!」

　すかさず糾弾するフェニックスギルディに、ダークグラスパーは涼しい顔で言い返す。

「フッ……裏切り者風情がアルティメギルの在り方を語るなど、片腹痛いわ」

「ほおう」

　……あ、スイッチ入った。

　だんだんフェニックスギルディのこともわかってきたぞ。わかりたくないけど……。

　案の定、手の平で顔を隠して腰にくねっと角度をつけた妙なポーズになり、フェニックスギルディはダークグラスパーを挑発する。

「闇の支配者ダークグラスパーか。虚むなしい名前だぜ」

「何？」

「闇とは、絶無だ。無為の存在の支配者……とはな。ハ、これ以上無ぶ様ざまな肩書きがあるかよ。幼な子が砂場に線を引いて領地を主張するのと、何も変わらねえ……!!」

　浸ってるなあ……。

　負けじとダークグラスパーも言い返す。

「貴様こそ、外そと見みに合わず随分と可愛かわいい喩たとえをするものよのう。ならば、その愚ぐ蒙もうな嘲あざけりとともに朽ちてゆけ」

「俺は朽ちねえよ。この世にポニーテールある限り、何度でも蘇よみ

がえってやらぁ!!」
　二人は一触即発だ。どうする？　目的は同じだし、ダークグラスパーに加勢すべきか!?
「……何をもたもたしておる。テイルレッドよ、早く行け」
「だけど、こいつは一人じゃ……」
　制御できない変態だぞ……と言おうとして、メガ・ネが俺の背中を軽く叩いた。
「一人とちゃう、うちがついてる。これは任務やから、気にせんといて。でもどうしてもお礼がしたい言うてくれるなら、イースナちゃんに一通でええからメール送ったってな」
「ええい、おかんか貴様！　だが確かに、メールは欲しいぞ!!」
　そういえば、ＱＲコードでアドレス教えられたんだった。
　トゥアルフォンに……入ってたかどうだか……。
「一つだけ聞きたいことがある。お前たちは……今後もこの世界を侵略するつもりなのか？」
「ふむ？　リヴァイアギルディ部隊の報告書には、この世界、人口も少なく肝心のツインテールの戦士も成長の気配がない、侵略価値は薄いとあったからのう。わらわも、その真偽を確かめるほど暇ひまではない。この任務の後も、アイドル活動のスケジュールがぎっしりじゃ」
　ダークグラスパーのその不遜な言い回しの中に、確かに仁を感じた。この戦いが終われば、この世界は平和になるとはっきりわかったんだ。がぜん、闘志が湧いてきた。
　ダークグラスパーは、噴き上がる花粉で地上から紅あかい橋の架かった空を見上げた。
「それに、我われを忘れて暴走しているとはいえ、ユグドラシルギルディは人望のある戦士じゃった。わらわ自ら手を下すには忍びな

い。お前に託す……!!」
　ただの利害の一致だとわかっている。けど、こいつに助けられたのは確かだ。
「じゃあ……ここは任せたぞ、ダークグラスパー!!」
　フェニックスギルディが俺の正体に気づいていたのは気になるが、どうせ反逆者の言葉にアルティメギルが耳を貸すはずもないだろう。
　処刑人と反逆者とで決着をつけるというなら、俺は、俺のやるべきことだけをするまでだ。
　ユグドラシルギルディ目指し、俺は再び走り出した。

◇

「うむ、やはりテイルレッドは素直で可愛いのう。トゥアールが入れ込むのもわかるのじゃ」
　小さな背中を見送り、ダークグラスパーはフェニックスギルディへと向き直った。
「くそおおおおお……！」
　これほど歯は噛がみしているのを見ると、本気で迫っていたらしい。阻止して正解だった。
「それほどまでに話し相手が欲しいのならば、わらわのアドレスをくれてやる」
　たとえ裏切り者相手でも機会は逸しない。ダークグラスパーは携帯電話を取り出し、挑発するようにフェニックスギルディの眼前に突きつけた。
「裏切り者にさらっとアドレスを渡すその剛胆さ。伊だ達てに首領直属戦士じゃねえな!!」

　アドレスを交換し、シンプルな挨あい拶さつメールを送り合う二人。
「やるな……。わらわの送信速度に追いついてくるとは」
「まさか、それで全力じゃねえだろうな？　ダークグラスパーさんよ。メールが来るのが遅すぎて、てめえのアスキーアートをこしらえちまったぜ!!」
　ぼけーっとした表情のダークグラスパーが、見事にＡアスキーＡアートで再現され、スマートフォンの画面を彩っている。
　しかし、ダークグラスパーとて、やられっぱなしではない。
「たわけが。それはわらわも同じよ。メールを送り終えて暇ひまじゃったので、すでに貴様のアカウントを作り、何気ないことを呟つぶやき終えたところじゃ」
「ぬおっ……！　てめえ、いつの間に!!」
　フェニックスギルディが勝手に作られた自分のアカウントを見ると、すでに八〇もの呟きが投稿されているではないか。恐るべき、ダークグラスパーの早はや業わざだった。
「おい、もう二人にフォローされちまってるじゃねえか！　もはや後には引き返せねえぞ!!」
「いや、アカウント消しいや」
　メガ・ネの突っ込みも聞かず、二人は睨にらみ合った。
「こんなことなら、テイルレッドのアドレスも聞いておくべきだったぜ……！」
「それは許さぬ。あやつはわらわの嫁となる者じゃと言っておろう」
「嫁？　なんだてめえ、もしかして気づいてねえのか？」
　フェニックスギルディは、途端に優位を確信したように薄ら笑いを浮かべた。
「いや、何でもねえ。フッフッフ、本人のいねえとこでネタばらし

はフェアじゃねえからな！　いずれ目の前で堂々と公開してやるとするかー!!」
「いずれ？　自うぬ惚ぼれるな」
　闇やみの鎌かま、ダークネスグレイブの一振りが黒の旋風をほとばしらせ、目障りな赤い花粉が吹き飛んでいく。
「何のことかはどうでもいい。はっきりしておるのは、貴様には如い何かなる明日いずれももう来ない、ということだけじゃ」
「ほな、いこか」
　メガ・ネも臨戦態勢に入る。
　両手の指を突き出すと、先端が窪くぼみ、銃口のようになった。
「あん？　そっちのロボ子も一緒に戦うってのか？」
「まさか裏切り者ごときが、一丁前に一対一を望むなどとほざくでないぞ？」
　誅ちゅう伐ばつに、騎士道精神など不要。
　ダークグラスパーは、何の気負いもなく二対一で完殺するつもりでいた。
「はん、そっちがそうくるなら、俺様もちょっとセコい真ま似ねさせてもらうぜ!!」
　フェニックスギルディの翼が広がり、その先端から拳こぶし大の炎が飛び出す。
「解放！　ミラージュリバイブ!!」
　鬼火を思わせる不気味な炎は、人間大になり、手足を象かたどっていく。
　そこに現れたのは——ロロリーが倒したはずの、チェリーブロギルディだった。
　表情もなく、声も発しない。全身灰色になっていて、泥人形のような無機質さだった。

「俺様の数少ない特殊能力（レパートリー）の一つだぜ。もっとも、そのエレメリアンがくたばった世界でしか発動できねえし、世界をまたいで連れ歩くこともできねえ。色々制限つきだがな」

　お約束を重んじる性分故（ゆえ）か欠点までわざわざ説明しているが、メガ・ネは能力を考察する。

「属性玉（エレメーラオーブ）以外の、世界に散った雑意思を再利用しとるんかな」

「なるほど……貴様の脱走、協力者がいると睨（にら）んでおったが、そんな絡（から）繰（く）りであったか」

　そうしている間にも、フェニックスギルディの周囲には次々とエレメリアンが現れていく。

　今しがたテイルブルーとイエローに倒されたばかりの貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）のエレメリアンが、フェニックスギルディの操り人形として蘇（よみがえ）っているのだ。

　同僚の形をした人形たちを見て、メガ・ネの双（そう）眸（ぼう）が怒りに光る。

「イースナちゃん。うちはとっとと偽物（コレ）片付けるから、遠慮なくやったり」

　メガ・ネが指からレーザーを発射し、再生エレメリアンを吹き飛ばす。

「先の制限の講釈、もっとも重要なことを伏せておったな」

　爆風でマントを揺らめかせ、ダークグラスパーは不敵に笑い上げた。

「オリジナルに遠く及ばぬ偽りの再生であることこそ、最大の制限（かせ）ではないか！　こんな紛（まが）い物どもが、全てのエレメリアンを指揮するこのダークグラスパーを倒せると思うてか!!」

「倒してんのうちなんやけど!?」

　無双の強さを見せつけつつ、ツッコミも神速。ダークグラスパーの相棒たるメガ・ネには、フェニックスの奥義であるミラージュリバイブでも分が悪い。よくて足止めだろう。

　しかし一対一になれば十分と、フェニックスギルディはダークグラスパーに斬きりかかった。

「てめえのその鎧よろい。なかなかイカすな！　眼鏡属性グラスでこしらえやがったか!?」

「フッ、わらわがもう一人愛する偉大な戦士のものを参考にして造ったものじゃ。いわば、二人の愛の結晶!!」

「よーし、俺様もあとで造ってみっかな!!」

「だから貴様には、あとも次もないと言っておろう!!」

　グレイブと斬きり結んでいたフェニックスギルディの剣が、弾はじきざまの手首のスナップで柄つかが折れ曲がり、刃やいばが中心から開閉。銃口が飛び出してきた。

「むうっ!?」

　咄とっ嗟さに首を逸そらし、放たれた光弾を避かわすダークグラスパー。

　流れるような瞬間変形に、虚を突かれた。

「ポニーテールの一房にあやかって、俺様は自分の武器を一つと決めていたが……やっぱどうしても、剣も銃も両方持ちたかった。だから、どっちにも変形する武器を生み出したのよ！　名付けて、フェニックスラッシューター!!」

「それは結局一つとは言わぬ！　だが、そのやたら噛かみそうな名前をあえてつけた勇気だけは認めてやる!!　三回に一回は噛むじゃろう!!」

「俺様の覚悟を甘く見んな！　舌が噛み千ち切ぎれるほど練習して、今やスラッスラよ!!」

　軽口を叩き合い、余裕さえ感じさせる二人の戦いだが、そもそも地力が尋常ではない。
　一いち斬ざん一斬で空間が軋きしみ、避かわした攻撃の余波で地面が爆裂するほどに、破壊の規模は凄すさまじかった。
　その一方でメガ・ネも、倒しても倒しても次々に新たな貴の三葉ノー・ブル・クラブのメンバーの再生体が現れるので、思った以上に手こずっていた。
「えーい、面倒や!!」
　メガ・ネは戦闘機形態メガネウインガーに変形し、空中から絨じゅう毯たん爆撃で吹き飛ばしていく。

「これほどの力を持ちながら、組織に弓引くとは、愚かな真ま似ねを！　ポニーテール属性を持つ、たった一体のエレメリアンでありながら!!」
　賛辞と失望を同時に送るダークグラスパー。
「いいや、一体じゃねえ!!」
　フェニックスギルディは、突如空に向かって拳こぶしを突き上げた。朱あかい空に阻まれた、太陽に向かって。
「ペガサスギルディ。俺様の親と友もこそが、史上最強のポニーテール属性を持ったエレメリアンだ！」
「ペガサスギルディだと？　そんな幹部、一度も名を聞いたことはないが」
「当然だ。あいつは、首領のクソッタレに倒されたんだからな！　だから俺様は、やつの心と正義を受け継いだ！　てめえもいい加減、首領に利用されてんのに気づきやがれ!!」
　熱く語られる言葉に真に迫る迫力を感じながらも、ダークグラスパーは強引に一いっ蹴しゅうした。

「もうよい、貴様の妄言、聞くに耐えぬわ!!」

再び剣と鎌かまをぶつけ合い、その反動で互いの利き足を地面にめり込ませる両者。

そんな二人の目に飛び込んできたのは、地平の彼方で噴き上がる真しん紅くの炎だった。

結構な時間を戦い続けた。あちらの戦いも、佳境に入っているのかもしれない。

「テイルレッドの炎か、なかなかの美しさじゃ。あんなものを見せられては、わらわも貴様とチャンバラを続けてはおれぬ。決着をつけてくれるぞ!!」

マントを放り捨てるダークグラスパー。背中のパーツが立ち上がり、空中に浮遊していく。

ダークネスグレイブを一振りし、神ゴッド眼め鏡がねと共鳴させる。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

ダークネスグレイブが巨大な弓へと変形し、漆黒の矢が番つがえられた。

発動を察知してメガ・ネが飛とび退のいたのを確認し、ダークグラスパーは眼下へと破壊の奔ほん流りゅうを解き放った。

「ダークネスバニッシャ――――――――――――――ッ!!」

完全粉砕を達成するため、破壊の威力を極限まで収束させて放った技は、見事にフェニックスギルディを捉え、呑のみ込んだ。

万物は塵ちりへと還かえり、やがて消えるだろう。

∞インフィニティー型に窪くぼんだ底の見えない巨大な穴だけを、破壊の証と残して。

「む――」

穴の中心から、炎が噴き上がる。

巨大な片翼が象徴的に炎で象かたどられ、その中から、フェニック

スギルディが何も変わらない姿を現した。
「貴様、やはり……」
「言ったはずだぜ！　俺様は死なねえとな。俺様のポニーテールは、不滅だ!!」
　封印のみでしか対応できなかった反逆者。
　眉まゆ唾つばだったうわさを己の双そう眸ぼうで検あらため、ダークグラスパーは立ち尽くす。
「チッ……。その口上、テイルレッドが言うから可愛かわいいものを！」
「さあ、第二ラウンドと行こうか、ダークグラスパーさんよ!!」
　ひどく冷めた目で、フェニックスギルディを一いち瞥べつする。
「いや、その再生能力を確かめた以上、もう貴様につき合うつもりはない。ファイナルラウンドすら不要じゃ」
　乾いた声で言い捨て、ダークグラスパーは神眼鏡のブリッジを指で押し上げた。
　眼鏡のレンズが描く光円、∞の紋様が、フェニックスギルディを呑み込んでいく。
「カオシックインフィニット──属性力エレメーラの深しん淵えんへと堕おちよ、偽りの不死鳥よ!!」
　脱出不可能な闇やみに呑み込まれ、フェニックスギルディが最さい期ごの恨み言を叫ぶ。
「てめえええええええ復活直後にダメ押しとか、わびさびがなってねえぞおおおおおおおお!!」
「フッ……勝負とは、非情なものなのじゃ」
　攻撃を待ってあげたのに不意打ちをされた苦い経験の滲にじむ、重い言葉だった。
　フェニックスギルディが倒れて技は効力を失い、再生エレメリア

ンも消えた。
　解放されたメガ・ネが、やれやれと肩を鳴らす。金かなづちで石を叩いたような音が響いた。
「……不意打ちはする側が格下だから許される、とか言うてたやん」
「い、今のは違うぞ！　やつの暴言があまりにも聞くに耐えなかったからじゃ！　断じて不意打ちではない!!」
　フェニックスギルディの再生能力を見越した上で、もし全力の一撃でも蘇よみがえるならば、再生直後の隙すきを突き封印する──。初めから、ある程度の算段はつけていた。
　任務を無事完遂し、首領直属戦士としての面目を果たしたダークグラスパー。
　見上げた空は、未いまだに赤い花粉に覆われていた。

◇

　無数の敵を相手取った乱戦は、テイルイエローの独壇場だった。
　全身の武器庫が解き放たれ、四方八方を取り囲む敵に轟ごう然ぜんと放たれてゆく。
　粒子砲が地面を灼やく。
　バイクで疾走する敵を捕捉し、ミサイルが火を噴く。
　ニードルガンが改造車に風穴を開け、バルカンが蹴散らす。
　貴の三葉ノー・ブル・クラブのエレメリアンたちは、一歩も退ひかずに機銃掃射の只ただ中なかへと突っ込んでいった。
　そしてマンドラゴラギルディは、仲間を守るでもなく、しかしその影に隠れるでもなく、自分の元へ飛んできた攻撃は一度も躱かわさずに身体からだで受けきっている。

「「「うおおおおおおおお!!」」」

　部下たちの雄叫びがこだまする。

　一部の隙間も無く宙空に咲いた爆華を執念で突破し、イエローの手足に組み付いた数体の部下たち。

　マンドラゴラギルディに向け、血を吐くように叫んだ。

「マンドラゴラの姐あねさん、今だァ!!」

「あたしたちごと撃ってくれぇ!!」

　マンドラゴラギルディは僅わずかに逡しゅん巡じゅんしたあと首しゅ肯こうし、突き出した両手から光線を放った。

「くっ……っ！」

　イエローは咄とっ嗟さに組み付かれた部分を脱衣パージし、手足を抱き締めるように拘束していたエレメリアンたちをアーマーごと吹っ飛ばした。

　倒れ込むように光線を回避したが僅かに間に合わず、胸アーマーを光線が擦さっ過かしていく。

　衝撃で吹き飛ばされ、地面を転がるイエロー。

「うふふん、おっぱいが仇あだになったわねん！」

「おかげ様で……！」

　軽口を返しながら、イエローはヴォルティックブラスターを構え、残っていたエレメリアンを撃破した。

「……でも仲間を撃つのは、さすがに全然気持ちよくないわねぇん……」

　戦闘開始から数分。もはや辺り一帯は、貴の三葉ノー・ブル・クラブの車両の残ざん骸がいと、土砂とクレーターが広がる死の世界と化していた。

「だけどあなた。最高の責めだったわぁん。もうネタ切れなのぉん？」

「属性玉エレメーラオーブ――文学属性ブック!!」
　相手の能力をサーチする文学属性ブックを発動させ、マンドラゴラギルディの異様な戦闘スタイルの全容を探る。一体何な故ぜ、これほどのタフネスを発揮するのか。
　彼女の身体からだが、巨大なエネルギー貯蔵庫のようになっていると分析された。
「……あなた……攻撃を、取り込んでいるんですの!?」
「そうよぉん、私の属性は被虐属性マゾヒスティック！　素敵な責めを受ければ受けるほど身体は悦よろこんで、力を増していくのよぉ！」
　イエローにとって、深入りするのは危険な属性だった。
「……ならば小手先の攻撃は無用！　一気に脱ぎますわっ！　完全解放ブレイクレリーズ!!」
　すでに完全脱衣形態フルブラストモードで撃ちまくっていたイエローは、遠慮なく残りの武装を脱衣パージした。
「あらぁ、焦じらさないのぉん？」
　一気に全脱ぎしたイエローを見て、不満を漏もらすマンドラゴラギルディ。
「脱ぎ方についてとやかく言われる筋合いはありませんわ！　心のあるがままに脱げ！　わたくしはご主人様から、そうお言葉を賜たまわりましたの!!」
　またもや、総そう二じの与あずかり知らぬところで慧え理り那なの中で金言が完成している。
　……と思いきや、確かに総二はう闊かつにも「脱ぎたい時に脱げ」と言っていたのだが。
「いきますわよっ！　オーラピラー!!」
　オーラピラーにバインドされるマンドラゴラギルディ。
　合身巨大砲ユナイトウエポンから打ち出されたイエローが、マンドラゴラ

ギルディ目掛け急降下する。
「ヴォルティック――ジャッジメントオオオオオオオオオオオオ
オ!!」
「ほふぅぅん!!」
　なんとマンドラゴラギルディは、またしても棒立ちでそれを身体で受けたのだ。
「なっ……！」
　多くのエレメリアンを一撃の下に倒してきたテイルイエローの必殺の蹴しゅう撃げきが、ドＭの執念に阻まれる。
　防御は不要。防御をすれば、悦よろこびは減る。
　鋼はがねのドＭ魂が、植物の身体に不倒の耐久力を与えたのだ。
　ついにテイルイエローは弾はじき飛ばされ、砂煙を上げながら身体からだで地面を抉えぐっていった。
「う、くっ……」
　マンドラゴラギルディは頭の上の葉を蕾つぼみのような楕だ円えん状に閉じ、それを身体中に帯電しているヴォルティックジャッジメントのエネルギーもろとも、大砲のような勢いで発射した。
「……い、いけない、防御を……！」
　巨乳属性ラージバストを発動させて防御板シールドを形成しようと、合身巨大砲ユナイトウエポンから左腕の属性玉変換機構エレメリーションだけを先行して呼び戻すイエロー。
　だが、マンドラゴラギルディの砲撃は、かろうじて左腕のパーツだけを再着衣したイエローを放置プレイし、遥か上空へと唸うなりをあげて飛んでいった。
　技の直後で無防備に滞空していた合身巨大砲ユナイトウエポンが、その砲撃に為す術すべ無く真ま芯しんを貫かれた。
　黒煙を上げながら地面に墜落し、木こっ端ぱ微み塵じんに爆発してし

まう。
　その様を、イエローは愕がく然ぜんとしながら見つめていた。
「今までそれを狙ねらわれたことはなかったのぉん？」
　思いもよらぬ弱点に、イエローは臍ほぞをかむ。
　確かに、自分の身体から離れれば、テイルギアの防御の要かなめである光膜━フォトンアブソーバーの加護を離れ、アーマーそのものの耐久力のみとなる。
　著いちじるしく硬度が落ちるのは、やむなきことだった。
「ッ……トゥアールさん、もう一度変身し直せば、アーマーは元に戻っていますの!?」
『あれほどバラバラになってしまっては、大規模なメンテナンスをしなければアーマーの完全修復はできません！　撤退してください、慧え理り那なさん!!』
　テイルギアは破損箇所も再変身の際に修復されるが、それでも限度がある。
　トゥアールの言う通り、イエローに残された手段は撤退する以外にない。
　勝利を確信したのか、全身をくねらせマンドラゴラギルディが自信たっぷりに言い放った。
「これで全ての武装を失って、あなたは丸裸も同然ねぇん」
　ビクンと身体を震ふるわせるイエロー。
「ああ、そうですわ。これでわたくし……わたくし……」
　絶望をもたらすはずの、その言葉が━

「着衣、したくてもできませんのねっ!!」
　絶体絶命のイエローを、逆に奮起させた。

「ううっ!?　恐ろしいほどの気迫がビンビン伝わってくるわぁん!?」
　不退転の脱だっ衣いを目の当たりにし、思わずたじろぐマンドラゴラギルディ。
　純粋な攻撃手段はひとつもない属性玉変換機構エレメリーションだけが、かろうじて残されたこの状況。
　まさに、全裸に靴くっ下しただけを履いているに等しき無防備。イエローの血が沸き立つ。
　仲間のエレメリアンたちさえも全滅し、一対一となってしまった今──トゥアールが水を差すはずもない。もはやイエローの暴走を止める者も、咎とがめる者もいないのだ。
「犬は犬でも、気骨あふれる犬だったのね！　あなたを少々侮あなどっていたようだわん!!」
「それはこちらも同じことですわん!!」
　嗜し好こうが頂上まで極まり、イエローも語尾が不穏なものになりつつある。
「いいわ、来なさぁい！　全て受け止めるわぁん!!」
「ええ！　あなたもわたくしも、これで身一つ！　最後の勝負ですわっ!!」
　いかな窮地にも諦あきらめず、勝利を信じて戦い抜く、今のイエローはまさに彼女の憧あこがれる正義のヒーローの姿そのものだった。
　目を瞑つぶらなければいけないことが多すぎるのが、難点だが。
「どんな大食漢でも、無尽蔵に食べ続けるなど不可能！　……攻撃を吸収する敵には……吸収しきれなくなるまで攻撃を与え続けて倒すと、相場が決まっていますわ!!」
　だが、自慢のヒーロー知識も、それを実行する手段がなければ何

にもならない。
　イエローは、左腕を掲げ、男の娘属性ガールズボーイの属性玉エレメーラオーブを発動させた。
〈男の娘属性ガールズボーイ〉
「発動！　属性玉多重変換機構エレメアディッション!!」



　ブルーと同じく、残された最後の切り札・属性玉多重変換機構エレメアディッションを発動させるイエロー。
　左腕の属性玉変換機構エレメリーションの上に、さらに手甲型のアーマーがジョイントされる。
　全ての属性玉エレメーラオーブの組み合わせを試行錯誤していたイエローは、同時発動による技をすでに考案していた。
〈項後属性ネーブ〉
〈割腹筋属性シックスパック〉
　二つの属性玉エレメーラオーブが発動する。
　項うなじが髪の毛を艶つやを引き立たせる部位だからだろうか。項後属性ネーブは、髪の毛を精密に操る効果を生み出す。
　攻撃に使えず、そもそもアンカーとしてなら自分でも同じようなことはできるため、今までテイルイエローは使用することはなかった。
　しかし、ロロリーの技に目を輝かせる総そう二じを見て、慧え理り那なは決意していた。
　自分ももっと、多彩にツインテールを操れるようになろうと。
　イエローのツインテールが、マンドラゴラギルディの身体からだに巻き付く。
「捕まえましたわ！」
「あらぁん、とっても素敵な縛りじゃなぁい!!」
　物質を硬化させることのできる割腹筋属性シックスパックと同時発動させることにより、イエローのツインテールは、敵を戒いましめる強固な縛ばく鎖さとなった。
『そ、それは無む茶ちゃです、慧理那さん!!』
　何かを察したのか、トゥアールが通信で叫ぶ。しかし、イエローは止まらない。

　武器を介さなければ、電撃に変換された自身のエネルギーを射出できないテイルイエローだが、方法が一つだけある。

　射出できないのなら、相手に密着した零(ゼロ)距離から叩き込めばいい──!!

　激しく放電し始めたイエローを見て、マンドラゴラギルディが狼(ろう)狽(ばい)する。

「しょ、正気なのぉん、あなた!?　そのキレイなツインテールがズタボロになるかもしれないのよぉ!?」

「わたくしの身体(からだ)でもっとも信頼に足る部位は、拳(こぶし)でも足でもありません！　この、ツインテールですわっ！　わたくしは……自分のツインテールを信じます!!」

　降り注ぐのが神の雷だろうと、自分の髪は決して負けない。

「わたくしの全ての力……叩き込んで差し上げます!!」

　全幅の信頼を込め、自分の残された力全てを、ツインテールを伝ってマンドラゴラギルディに叩き込む。

「ま、負けないわよおおおおおおん！」

　イエローの全身を激痛が襲う。

　当然だ。この零(ゼロ)距離では、テイルギアとはいえ力の逆流を抑えきれない。

　それでもイエローは、さらに電撃の出力を高めていった。

「ああああああああああああああああああああ!!」

　イエローの裂(れっ)帛(ぱく)の叫びが、最大級の雷をほとばしらせる。

　マンドラゴラギルディはついに身体(からだ)から煙を上げ、倒れ込んだ。

　肉体の許容量を超えた責めに、さすがのドＭも耐えきれなかったのだ。

「満足よぉん……。果てるほどの責め、ありがとうねぇん、テイルイエローちゃん……」

「どうしたしまして、ですわ……。あなたも、強かった……」

　何の悔いも感じさせない晴れやかなドＭ顔で、マンドラゴラギルディは爆散した。

「……やりましたわ。わたくし一人でも……。ご、ご主人様、誉ほめ……」

　力無く倒れ込むイエロー。

『慧ぇ理り那なさん！　大丈夫ですか、慧理那さん!?』

　トゥアールの通信が、空しく響く。

　死し屍し累るい々るいとすらならない、全ての消えた虚しい戦場跡に、少女は一人、横たわる——。

◇

　圧巻だった。

　目の前の異様を、何と表現すればいいだろうか。

　これはもう、植物ではない。山だ。

　遥はるか天を臨む巨山が、それでもなお己は植物であると嘯うそぶき、屹きっ立りっしているような。

　だからこそ、人の手の届かない神の樹と。ユグドラシルと言うのだろう。

　しかし、俺の誤算はその大きさではなかった。

　俺は、ユグドラシルギルディと戦闘になるとは露ほども思っていなかったのだ。

　こんな馬ば鹿かげた大きさになったのだ、それは世界を覆うほど莫ばく大だいな花粉を撒まき散らす「砲台」になるための変体であり、だ

からこそ無防備を晒さらさないよう、仲間たちが二重にも盾たてとなって守ろうとしたのだと予想した。
　俺はすぐにラフレシアギルディを倒して奪われた属性力エレメーラを解放し、食い止めてくれているブルーやイエローの加勢に向かうことばかりを考えていた。
　そのため、フェニックスギルディに遭遇してもまだ幾いく許ばくかのゆとりは心にあった。
　だが今は、その数分間すらもが惜しまれる。
　この砲台は……蠢うごめいていた。
　俺が間合いに近づいたその瞬間、一本一本が巨木のごとき太さを持つ触手を振り回し、眼前に叩きつけてきた。それだけで、足元には激震が走る。
　この神樹は──戦うつもりなのだ。
　触手が空くうを切るだけで、突風が巻き起こる。
　その触手はヌンチャクのように縦横無尽にユグドラシルギルディの身体からだ──幹を、十と重え二はた重えにも包んで防護する。
「来ないでください！　来たら、大怪け我がしちゃいますよ～！」
　巨大化する前と変わらない、間延びした声で警告される。
　その通りだ、う闊かっに近づいて打ちつけられようものなら、空の果てまで飛ばされるかもしれない。
「……くそ、ビビってる場合じゃねえ！」
　フォースリヴォンを叩いて、ブレイザーブレイドを発動させる。
　威い嚇かくで振るわれた触手目掛け、力の限り叩きつけた。
「がっ……！」
　俺は握ったブレイドもろとも弾はじき飛ばされ、空中で後転しながら吹っ飛んでいった。
　何回転目かで刃やいばが地面に突き立ち、反動で「振り落とされ

た」俺は、地面を転がる。
　たった一本の触手さえ、腕力に任せて封じ込めることができない。
　強回転している扇風機の羽根に、小指を一本押しつけたようなものだ。
『総そう二じ様！　今のユグドラシルギルディの全長は、一五〇メートル以上。重量は推定三〇万トン。もう、エレメリアンの範はん疇ちゅうじゃありません！　真っ向から攻めるのは危険です!!』
　トゥアールの通信だ。そんな桁けたを間違えたような数字、冗談にしか聞こえないぜ……。
「……目眩めまいがするな……」
　テイルギアの腕力は、確か一〇〇トン前後。
　これでもトゥアールから聞かされた時はたまげたもんだが……ユグドラシルギルディ相手には、この超絶の腕力をもってしてなお心こころ許もとない。
　この怪物……いや、怪獣にとって、今や巨大さこそが最大最強の武器なんだ。
　末端の触手だろうと、自重のほんの僅わずかでも乗せて力任せに放ってくれば、それだけで今のように強烈無比な攻撃に化ける。
　現金なもんだ。基地ではいまいちノリきれずに見ていた巨大ロボット・トゥアールオーだが、今は空の彼方から飛んできてくれないかなどと、俺は夢想してしまっている。
　ユグドラシルギルディは、ブレイドを握り直した俺に向けて切実な訴えをしてきた。
「テイルレッドちゃん、先生は本気です！　きっと今の私じゃ、ツインテール属性を奪うだけじゃ済まない、大怪我……ううん、命まで落とすかもしれない！　自分では触手を止められないの、戦おう

としないで!!」
　俺すらをも、自分の教え子のように諭(さと)してくる。しかし要は、命が惜しければ近づくな、ってことだろう。俺は、かえって恐怖が萎(しぼ)んでいくのを感じた。
　危険なのは……命(いのち)懸(が)けなのは、今戦っている仲間たちだって同じだ!!
「プログレスバレッター!!」
　意識を集中し、リヴォンに格納していたバレッターを手にする。
　強化形態は、防御力がガタ落ちする諸刃の剣だ。
　だけど、どうせ攻めも防御もできないなら、徹底的に攻めて攻めて攻め抜く！
「形態変化(チェインカスタム)――ライザー!!」
　バレッターを装着すると同時にツインテールを上結びに直し、ライザーチェインへと強化する。
　左手に、もう一本のブレイザーブレイドが握られた。
「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　ブレイザーブレイドツインを同時に叩きつけ、触手を斬(き)り飛ばす。
　間髪容(い)れず、頭上を別の触手が掠(かす)めていく。
　一発でも食らえばアウトだ。
「形態変化(チェインカスタム)――フォーラー!!」
　即座にツインテールを下結びへと変え、爆発的に加速する。網の目のように乱れ飛ぶ触手の間を、紙一重で縫(ぬ)うように飛翔して離脱した。
　距離を取るんだ。今の俺にできる、ロングレンジからの攻撃を模索する。
　テイルギアを介して、頭の中に武器の補助(ヒント)が浮かんだ。

「これだ！」
　リヴォンからプログレスバレッターを取り外し、くの字に展開させた。
　加速状態でバレッターを投げ放つと、先端からさらに炎の刃を形成、唸うなりを上げてユグドラシルギルディへと飛翔し、二本の触手を裂断した。
　この使い方、以前には浮かばなかった。ブーメラン……そうだ、ツインテールのゴリラがブーメランを投げていたのを見て、想像力が養われた結果か。
　帰ってきたバレッターを受け止め、再びリヴォンに装着する。これは使える武器だぞ……！
　戦局に光明が見えた矢先、俺は再三の絶句を余儀なくされた。
「……冗談だろ……」
「遠くからちまちま斬るなんて、そんなずるいこと許しませんからね！」
　ユグドラシルギルディは、その巨体で地面を移動してきた。
　地球に生きる生命としての許容を無視した限界行動は、大地そのものを土石流のように崩し、空をも烈震に巻き込んだ。
　その光景に圧倒されていた俺は、死角から伸びてきた触手を身体からだに巻き付けられてしまった。
「うああああああああああああっ!!」
　根だけを注視していた俺には、絶好の不意打ちだった。触手は、屋根のようなユグドラシルギルディの頭部から飛び出してきたのだ。まさに、隠し腕として。
「……や、やば、い……」
　全身の骨がバラバラに砕けそうな激痛。
　それ以上に、フォーラーチェインに変化してからもうすぐ二二秒

経たってしまう！
　このままじゃ、テイルギアが暴走する……！

　　　◇

　スタートゥアールのコックピット内──。
「トゥアールちゃん！」
　息子の危機を目の当たりにした未み春はるは、トゥアールに対してとんでもない要請をした。
「……突っ込みましょう」
「はい？　それはもちろん、いずれ突っ込まれるつもりですが……」
　未いまだ果たせぬ未春との約束を、いつか果たすと誤ご魔ま化かしたトゥアールだったが、そちらは即座に否定された。
「そっちじゃなく、これをよ」
　未春は、コックピットの床を指差す。
「この戦艦ごと、ユグドラシルギルディに突っ込みましょう!!」
「未春艦長!?」
「何言ってるんですか未春さん!?」
　トゥアールと尊みことが震ふるえ上がる。
　未春の目は血走っていた。
　二度と無いチャンスに燃え、シチュエーションに酔っていた。
「息子のピンチに戦艦ごと突っ込んで自爆！　母親冥みょう利りに尽きるわ!!」
「落ち着いてください未春艦長！　そんなことしても倒せませんから!!」
「私は未婚のまま死にたくないー!!」

もみ合う三人を余よ所そに、モニターに驚くべき光景が映し出される。

今まさにテイルギアが暴走オーバーロードしようとするその時、テイルレッドが放った一撃は──。

◇

俺の意思を飛び越え、テイルギアが反応した。フォーラーチェインの腰部分の追加パーツが勝手に飛び出し、触手を斬きり裂いたのだ。

コンマ数秒の差で何とか俺はツインテールを元に戻し、属性力エレメーラを全身に流動させる。

「高速機動のために追加精製された、姿勢制御装置スタビライザーだと思ってたけど……これも、武器なのか」

ライザーチェインになって触手をブレイドでやり過ごし、さらに再びフォーラーチェインへと、目まぐるしくツインテールを結び直す。

起死回生の攻撃を放つべく、先ほどの感覚で、大小合わせ左右五対・十枚のアーマーを射出した。

ところが、さっきのような勢いがまるでない。その全ては、直進どころかバラバラと地面に落下してしまった。

「駄目だ、上う手まく扱えない……！」

ユグドラシルギルディが猛然と迫る。パーツを回収することもできずにその場を離れて基本中結形態ノーマルチェインに戻った俺に向け、鎚つちを振り下ろすような勢いで銀色の粉が吹き付けられた。

「うわあっ!?」

天を向き直立している主砲とは別に、ユグドラシルギルディの頭

部でカメレオンの目のように忙(せわ)しなく動いて狙(ねら)いを定めていた、二門のいわば副砲から放たれたのだ。
　切り札があったのは、俺だけではなかったんだ！
「残念です……。これだけは使いたくなかったけど、ごめんなさい。怖くて泣いちゃうかもしれないけど、できれば、全てが終わるまでそのままじっとしていてね!!」
「別の花粉……!?　これは……!!」
「超苦(チョーク)の粉……！　エレメリアンにすら非人道的と蔑(さげす)まれた、禁断の技です!!」
　不意に、目の前が暗転した。幻覚か!?
（こいつ、神樹(ユグドラシル)を気取っておいて、そこらの山に生えてる毒キノコみたいなことを……!!）
　そう呟(つぶや)こうとしたが、声が出ない。
　やがて自分の声どころか周囲の音が何も聞こえなくなり、静寂の世界へと連れ去られる。
　目も、口も、耳も、全て奪われた。奴(やつ)の銀色の花粉で、感覚を遮断されたのだ。
　トゥアールの通信も聞こえず、唸(うな)りを上げて乱れ飛んでいるであろう触手を躱(かわ)すこともできない。
　もはや俺は、ただ嬲(なぶ)り殺されるためだけに据えられた生(いけ)贄(にえ)も同然だった。
　怖いと思っても、叫ぶことすらできない。
　不思議なもので、これほど感覚を一方的に破壊されると、もう現実感がなくなってしまう。
　まるで夢の中にいるようで、戦意など湧いてくるはずもない。
　万策尽きた。
　フェニックスギルディにあれだけ啖(たん)呵(か)を切っておいて、ここ

まで心が折れるとは──。
　追い縋すがっても、喰くらいついても、どうにもならない敵がいる。
　今の俺には、心の不屈を訴える手段が何一つない。
　これが、絶望か。
　せめてできることは、愛あい香かや慧え理り那な……それに、ロロリーたちに心の中で詫わびることだけ。
　この世界も、自分の世界も、ツインテールを守れなかった……。

　……ツインテール？

　待て。何が絶望だ。
　目が見えなくても……声が出なくても……耳が聞こえなくても！
　俺は、ツインテールを感じることができるじゃないか───!!
（見えた──!!）
　感じた。
　助けを求めるツインテールが。
　それを助けようと猛たけるツインテールが。
　ユグドラシルギルディに囚とらわれた、この世界の人々のツインテール属性。
　そして俺の背中では、二人の仲間のツインテール属性が、熱く燃え盛っている。
　夜空に輝く星々のように、無数のツインテールが、暗くら闇やみに囚われた俺を照らしてくれる!!

「きゃあああああああっ!?」
　ユグドラシルギルディの悲鳴が聞こえた。

鎌かまで削そがれた草のように、無数の触手が地面に落ちていくのが見える。

「……戻ったのか……？」

そう呟つぶやいてようやく、俺は自分の感覚が元に戻っていることを実感した。

先ほど使いこなせずに落下したパーツが、今は灼しゃく熱ねつの輝きを灯ともして俺の周囲に浮遊していた。ユグドラシルギルディの攻撃から、俺を救ってくれたのだろう。

ユグドラシルギルディの触手が自動的に本体を守るのと同じだ。

俺の意思を飛び越えて周囲を旋回し、外敵を駆逐する全方位斬撃装備サテライトソード……それがこの、ブレイザーセイバーか!!

「どうしておとなしくしないの！　先生、言ったでしょ！　廊下に立ってなさい!!」

「誰だれが言うこと聞くか！　その先生が世界を滅ぼそうとしてんだ！　どんな悪ガキだって、力一杯暴れて止めるだろう!!」

「だけど普通……怖がるでしょ！　諦あきらめるでしょう、この姿を見たら!!」

巨大を畏おそれる。確かにそれは、生物としての本能なのかもしれない。

……けど。

「いつだって俺は……テイルレッドは、見上げなけりゃお前らと向き合えなかった。今回だって同じだ。少しばっかりデカいけど、結局のところ、いつも通りなんだ！」

理事長が言っていた。ツインテールを五感で感じているようでは、まだ麓ふもとだと。

心で感じてようやく、中腹。

この巨山に挑むならばせめて、その中腹で吠ほえ猛たけらずして、

勝てるものか！
　俺のツインテールが今、俺自身の五感をも超越した!!
「飛べ、セイバ――――――――ッ!!」
　俺は右腕を突き出し、残る触手へと向けて射出した。
　第六感シックスセンスにも似た超常の直感が手綱となり、セイバーが飛翔する。
　幾何学模様か、電子回路か、星座の繋線か。
　人智を逸脱した無軌道で乱れ飛び、炎の斬線が朱に染まった空を焼き尽くす。
　触手のほとんどを斬きり飛ばされて失ったユグドラシルギルディが、悲痛に叫ぶ。
「わかりません……。ほんの趣味嗜し好こうのために、そこまで頑張れる君が、先生全然わかりません！　本当に人間なんですか!?」
「そのたかが趣味嗜好がまばゆく結晶して命を宿したのが、お前たちじゃないか。何な故ぜ、自分の存在そのものを否定する！　部下たちは随分とお前を持ち上げていたけど、一番自分を卑下しているのは、お前じゃないのか!!」
「……絶対に使っちゃ駄目って、言われた技だったのに……。人の心を壊しかねない邪道な技だから、封印していたのに……。それでも君は、絶望しないんだね……」
　ついに、最後の触手が斬り飛ばされた。
「世界を守るために、自分の大好きなツインテールをあえて人々から奪って……涙を堪えて戦い続けた子を、俺は知っている！　それに比べれば……たかだか五感を失おうと、愛するツインテールが残された俺が、絶望なんてしていい道理がない!!」
「たかだか!?」
　完全解放ブレイクレリーズし――全身から属性力エレメーラの粒子を迸ほとばしら

せ、フォーラーチェインで最大加速する。
　文字通り棒立ちのユグドラシルギルディ目掛け、さらにライザーチェインへとチェンジし、スライドしたバックパックが火を噴く。
　ロエル。リルナ。今までよく頑張った。
　今、この最後の一撃で……俺のツインテールで、君たちの絶望に終止符を打つ！

「俺のツインテールは――希望だ!!」

　プログレスバレッターを合体させたブレイザーブレイドを、遥はるか頂上から斬り下ろした。
「ライジング……ブレイザ――――――――――――――――ッ!!」
　巨体が炎に包まれる。
　周囲の花粉が、初めから存在しなかったかのように空気に溶けて消えていく。
　それは、この神樹の最さい期ごを意味していた。
「君の言う通りですね……。だって、先生が……私が一番、問題児だったんですから……。あの子たちに助けられたのは、私だったんだぁ」
　焼失していくユグドラシルギルディは、自じちょうしながら呟つぶやいた。
「……お前を倒したのは俺じゃない。お前が無慈悲に奪った属性力エレメーラが……その中のツインテール属性が、俺を導いてくれた。どれだけ抑圧されても捨てきれない思いが……生きようとするツインテールが、俺を助けてくれたんだ！」
「テイルレッドちゃん。かっこいいよ……。きっと、あなたみたい

な先生なら……みんなを泣かせずに、毎日が楽しかったんだろうなあ……」
　爆発はしなかった。
　萎しおれもしなかった。
　ユグドラシルギルディは、自らが噴き散らした赤い花粉と同じように、煌きらめく粒子へと風化し……そして、消えていった。
「……俺みたいなツインテール馬ば鹿かが、先生になんてなれるわけないだろ……」
　わかってるよ。エレメリアンも人間も関係ない。大切な仲間と過ごす日々がどれだけかけがえのないものか。どれ程激しく、その日々を失いたくないと思うか……。

　トゥアールに、誰だれか周りにいないかを確認してもらう。
　そうでもしないと気絶もできないなんて、難儀なもんだよな。地面が間近に迫りながら、安あん堵どの溜ため息いきをつく。
　もう、変身も維持できねえや……。

　　　◇

　アルティメギルの一部隊全戦闘要員と、ツインテイルズの真っ向勝負。
　まさに総力戦だった。
　辛くもツインテイルズは戦いに勝利し、彼らが訪れたこの異世界には平和が戻ったのだ。
　世界の終しゅう焉えんを思わせる赤い空は完全に消え去り、光射す青空となった。
　ユグドラシルギルディの消滅した場所に一人倒れる総そう二じ。

　全ての力を使い果たし、気絶するように眠る彼の元へ、そっと歩み寄る影があった。

　ツインテールが揺れる。

　総二の傍かたわらに腰を下ろし、ロロリーは、彼の手を優しく握る。

「やっぱりね」

　不意に背後からかけられた声に驚き、ロロリーは咄とっ嗟さに振り返りながら立ち上がった。

「あ、愛あい香かお姉ちゃん……」

　戦いは終わったというのに、ロロリーと対たい峙じする愛香は、テイルブルーからの変身を解いていない。

「なにするつもり？　ロロリー」

「ええとね、ここまで迎えに来たら、総そう二じお兄ちゃんの寝顔がとってもかっこよかったから、つい……ちゅーしたいな、って」

　きゃは、と握り拳こぶしを顎あごにつけて笑うロロリー。

「──それだけは絶対に許さないわよ」

「ひいっ⁉」

　夜叉にも等しき形相で睨にらまれ、ロロリーは声を引きつらせる。

「そっちのそーじは、まだ初めてなのよ……‼」

　地獄の底から響くような、愛香の声。幼な子の媚こびなぞくそくらえといわんばかりだ。

「うう、ごめんね愛香お姉ちゃん、ロロリー、戦いの役に立てなかったから怒ってるの？」

「謝りながらそーじにキスしようとしてんじゃないわよ‼」

　ブルーの拳けん圧あつが目の前をかすめ、さすがにロロリーも再び立ち上がって向き合った。

「漁夫の利をかっさらおうなんて、感心しないわよ、お姫様」

「そんな、違うよう！　ロロリーは……」
　言いかけたものの、もはやこれまでとばかりにロロリーの顔から笑みは消え、悔しそうに歯は噛がみした。
「……もしかしてロロリーのこと、ずっと疑ってたの？」
「あたし、人を信用するのは時間をかけることにしてるの。そーじがお人好しだから」
　どれだけ庇ひ護ご欲をかきたてる愛らしい笑顔を振りまいても、ブルーには決して通用しない。
「そーじを狙ねらってる女は、目を見ればわかるのよ。あんたが子供のお遊びじゃなく本気でそーじを狙ってるなんて、初めから気づいてたわ」
「怖いよ愛香お姉ちゃん!!」
　幼おさな馴なじ染みの闇やみを垣間見て、ロロリーが恐怖する。
「ま、それだけじゃないけどね。疑ってたのは」
「……え？」
「色々できすぎだな、って思ってた。あんたが言った、この世界の状況。そーじはツインテール絡みなら何でも好意的に解釈して思考が突っ走るけど、普通は変だって思うわよ」
　全くその通りだった。総二がどんな境地に開眼してユグドラシルギルディを倒したか知ったら、愛香は卒倒するだろう。
「そもそもあんたたちは、なんでわざわざ別世界の人間に助けを求めたのか、って思ったの。フェニックスギルディには勝てないにしても、ポニーテールにするふりだけでもすれば満足みたいだし、それを追撃してきた部隊も、この世界には手出しはしようとしない。時間が解決する問題だったのに」
　ブルーは、冗長な語りを始めた。
　ロロリーにわからないように、歩くだけで乱れてしまった息を整

える。
「――フェニックスギルディをこの世界に呼んだのは、ロロリー……あんた自身ね？」
「！」
　それを看破されているとは思いもしなかったのか、ロロリーは息を呑のんだ。
「本当はリヴァイアギルディの部隊がこの世界から撤退して、困ったんでしょ？　国民に、戦うお姫様をアピールできなくなるから」
　ロロリーの顔色の変化は気にせず、ブルーは続けた。
「だから、もう一度アルティメギルを呼ぶことにした。あんたの、思念を飛ばす力でね。ところが、たまたまそれを拾ってしまったのがアルティメギルの反逆者――フェニックスギルディだった。勝てなかったけど……意外と、話せるやつだった」
　すでにブルーも、フェニックスギルディの人となりは見知っている。
「あんたに憧あこがれてツインテールが拡散して、これ以上戦士が増えたら、世界が割れてしまう。そこで、ツインテールがあれば狙ねらわれるというお題目でツインテールを禁止して、代わりにポニーテールを推奨した。フェニックスギルディと利害が一致したのね」
　何とも奇妙なツインテール禁止法成立の顚てん末まつまでをも、見抜かれていた。
「ま、その話せるフェニックスギルディを追って本当の強部隊が来ちゃったのは誤算だったんでしょ。それで、泡食ってツインテールの戦士に助けを求め始めたってオチでしょうけど」
　ロロリーは顔を背け、一歩後あと退ずさる。さらにブルーは続けた。
「眉まゆ唾つばな話だけど、けっこうありがちなことなのよ、これ。病気を完全に治す特効薬ができてはいけない、とか。病気があるから

こそ薬が売れる……エレメリアンがいるからこそ、世界を守るために戦って、自分が唯一無二の統治者になれる」
　なんてね、とおどけてみせるが、ブルーの目は笑っていなかった。
「そ、それは……」
「思念を飛ばしていた異世界で、奇跡的にも男のツインテールの戦士を見つけた。それでこのシナリオを組み上げたってワケ。自分の唯一性を失わせない、絶好の〝仲間〟をね」
　ほぼブルーの予想通りだったのだろうか。ロロリーは再び黙り込んでしまった。
「別に、悪ぁし様に言ったけど、一から一〇〇まであんたが間違ってるとは言わないわよ。世界を統治するのがどれだけ大変かなんてわからないし。危機感を煽ぁぉって国民の意思統制を謀るなんて、どこでもやっていることだしね」
　少しだけブルーの口調が優しくなる。
「それに、国民を守ろうとしたのもまあ、嘘ぅそじゃなかったし」
　ロエルは確かに、気軽な考えで、エレメリアンを世界にもう一度呼び寄せるなどという暴挙に及んだ。だが、その責任を取ろうと、何度も何度も他の異世界に思念を飛ばし、助けを求めていたのは、本当のことだろう。
　ロロリーは気落ちしながらも、再度ブルーを説得した。
「……それが誉ほめられるようなやりかたじゃないって、わかってるもん。でも、だからこそ、総そう二じお兄ちゃんが必要なの。総二お兄ちゃんがいてくれたら、国民をだますような真ま似ね、しなくてもよくなるよ!!」
　ブルーは苦笑した。推理ごっこをしてきたが、本当はここだけ言えばそれでよかったのだ。

「……お馬ば鹿かね。別にあんたの国策なんてどうだっていいのよ。──あんたがそーじをこの世界に閉じこめるっていうなら……あたしが止めるのはそれだけよ」

　過保護でも構わない。

　いつか世の中の、人間の黒い部分も知ってしまうかもしれないが……それでも今は、無垢なほど真まっ直すぐにツインテールを愛する総二を、全ての悪意から守りたい。

　愛あい香かの願いは、それだけだ。

「やだ。総二お兄ちゃんはロエルとリルナと一緒に、ずっとここにいるの！」

「それはきっと、世界の統治よりも難しいわよ、お姫様」

　ストレートな戦意を向けられ、ロロリーはドレスを翻ひるがえし、戦闘態勢に入った。

「だ、だったらお姉ちゃんは、ロロリーの敵だね!!」

「あたしはもう、そのつもりよ？」

　ウェイブランスが砕け、徒と手しゅ空くう拳けんな上に満まん身しん創そう痍いのテイルブルー。

　地力で劣るとはいえ、体力が十全に残っているロロリー。

　もはや、勝敗は火を見るよりも明らかだった。

「ツインテールウィップ！」

　ロロリーはステッキをかざし、戦闘員アルテイロイドにしたのと同じようにツインテールを鞭むちのように振るった。

　両手で何とか弾はじき返すブルー。その顔が苦く悶もんに歪ゆがんだ。

　チェリーブロギルディと戦った時より、明らかに威力が上がっている。

「やればできんじゃない……。人目気にしてぶりっ子してないで、腹から声出してがむしゃらに暴れればいいのよ」

「な、何よう」
「これなら……あたしたちが帰っても、この世界はもう大丈夫ね」
　それは嫌いや味みや皮肉ではなく、ブルーの本心だった。
　ロロリーはツインテールを振り乱して叫ぶ。
「大丈夫じゃないよう！　お兄ちゃんは、絶対に渡さないんだからあああああああ!!」
「こっちの台詞せりふよ!!」
　もし、総そう二じがロロリーと戦うことになっていたらと思うと、ヒヤリとする。
　ツインテールを武器に戦う戦士。
　自分から攻撃をすることも、相手の攻撃を剣で受けることもできない。
　まさに、総二にとっては天敵ともいえる相手だっただろう。
　ロロリーはドレス姿に似合わぬフットワークを駆使し、ブルーを翻ほん弄ろうする。
「その鎧よろいの弱点！　見つけたよ!!」
　ツインテールビームが至近距離から放たれ、ブルーのツインテールの結び目に直撃した。
　すでに、ブルーには万全にテイルギアを機能させるだけの体力が残っていない。防御力も推して知るべしである。
　両のフォースリヴォンが、同時に破壊されてしまう。
　砕かれた破片と、縛いましめから解き放たれたツインテールが、スローモーションのように力無く宙を舞った。
「っぐ……!!」
「勝負あったね、お姉ちゃん！」
　ロロリーとツインテイルズとで決定的に違うのは、ツインテイルズは、自身のツインテール属性だけを力に変えて戦っているわけで

はないということだ。
　ロロリーは変化であり、ツインテイルズは変身。
　変身は、その起点となる装備を破壊されればもろい。
　しかしもっとも守るべきブレスは、最大の硬度を持つかもしれない。不意打ちで狙ねらうにはリスクが高い。ならば次に狙うは、変身の維持に必要な要素。
　……ツインテールを、解ほどいてさえしまえばいい。
　エレメリアンには決して考えつかない、人間対人間ならではの駆け引き。
　それは見事に功を奏し、力の根源を奪ったのだ。
　勝利を確信したロロリーは、矢庭に目に飛び込んできた信じがたい光景に、驚声を上げた。
「うそぉ!?」
　テイルブルーのツインテールは、解けていなかった。
　指で輪を作って握り、フォースリヴォンを砕かれる直前と全く同じ状態で、ツインテールを維持していたのだ。
　しかし、ブルーにはそれが精一杯で、反撃することさえできずに立ち尽くす。
　ダメ押しとばかりに、ロロリーはツインテールへ全エネルギーを集中し、竜巻を放った。
「ツインテールトルネ――――――――――ド!!」
　防御さえできずに呑のみ込まれ、紙かみくずのように吹き飛ばされるブルー。
　全身がバラバラになりそうな激流の中で、ブルーは声を聞いた。
「ブルー！」
　テイルイエローが、遥はるか後方でブルーを呼んでいた。
　後から追いつくという約束を果たすため、まさにほう々ほうの体ていで

ここまでやって来たのだろう。
　全脱衣パージした姿でよろめきながらも、左腕だけをすがるようにこちらへ伸ばしていた。
「……イエロー！」
　二人は何も申し合わせたわけではない。いざという時、と作戦を立てていたわけでもない。
　それでもブルーは、イエローの狙ねらいを即座に理解し、途切れそうな意識を自分の左腕に集中させた。
〈貧乳属性スモールバスト〉
　属性玉変換機構エレメリーションが発動し、すでに解き放たれていたイエローの巨乳属性ラージバストと共鳴する。
　ブルーとイエローは魂を振り絞るように、同時に叫んだ。
「「リフレクションバースト!!」」
　竜巻で吹き飛ばされているブルーの背後に光膜が出現し、激突の衝撃で大きくたわんだ。
　弾性と剛性を兼ね備えた防壁の力で、竜巻もろとも自らもロロリーに向けて反射される。
　残された両足を伸ばし、竜巻の回転に身を任せ飛翔する様は、撃ち放たれた銃弾。
　奇しくも慧え理り那なにヒーローの嗜たしなみとして勧められていた、必殺のキックの形となり、ブルーはロロリーへと突貫した。
　しかしすでに一度勝利の確信を崩されていたことで、油断が消えていたのだろう。
　ロロリーは、なんとか咄とっ嗟さの防御が間に合っていた。
「ツインテールシールド!!」
　突き出したステッキの先端を交差点に、伸長したツインテールがクロスする。

　それはロロリーの全面に展開され、鉄壁の防御壁と化した。

「はああああああああああああああああああああああっ!!」

　乾(けん)坤(こん)一(いっ)擲(てき)。

　ブルーの渾身の両足蹴りが、ロロリーのツインテールに炸(さく)裂(れつ)する。

　皮肉にも、自らが放った竜巻がブルーに必殺の突破力をもたらしたのだ。

　ツインテールでのブロックを弾(はじ)き飛ばされ、無防備な腹部に両足蹴りが直撃する。

　回転に巻き込まれて錐(きり)もみ状に吹き飛び、ロロリーは力無く地面に叩きつけられた。

「……独占契約は破棄ね……」

　自分でトゥアールしか蹴らないなどと嘯(うそぶ)いていたことを思い出し、着地してたたらを踏みながら、ブルーは苦笑した。

「はあ、ホントそーじが戦うんじゃなくてよかったわ。あいつなら、ツインテールを蹴るなんて、絶対できなかったでしょうね……」

　お腹(なか)を押さえながら仰(あお)向(む)けに倒れ、ロロリーはブルーを畏(い)怖(ふ)の目で見つめた。

　戦いの場数の違いを痛感したのだろう。

「な、何者なの、お姉ちゃん……。絶体絶命でも、涼しい顔をして反撃してきて……」

　トゥアールに通信し周囲の目がないか確認してもらうと、ブルーは変身を解いた。

　愛(あい)香(か)は立ちくらみを起こしたようによろめきながらも、足を突っ張って踏ん張り、ロロリーを見下ろす。

「……焦りはしなかったわよ。ツインテールが解(ほど)けてすぐ変身解

除されるわけじゃないっていうのは、初めてレッドが形態変化チェインカスタムしたのを見た時にわかったし」

　僅わずかの猶予の間に結び直せば、変身は維持できる。

　十分な勝算あってのことだった。

「だ、だけど、あの一瞬で、慌てないでその判断ができるなんて……」

　梯はし子ごから落下した時、咄とっ嗟さに受け身を取るように。

　日々の生活の隙すき間まに潜ひそむ危険から、身体からだを守るのと同様の反射行動で、自分のツインテールを気にかける。

　日々の成長そのものが、ツインテールと共に在あった少女だからこそできることだ。

「……あたしが人生で一体何千回、このツインテールを結んできたと思ってるの……？　ファッション感覚でツインテールにしてるあんたみたいな小娘とはね、年季が違うのよ」

　同じツインテールの戦士でも、ツインテールへの思いの次元が違ったのだ。

「いや、普通……ツインテールって……ファッション、でしょ……」

　もはや恨み言さえ残す気力も失せたのだろう。

「お似合いだよ、お姉ちゃんたち……」

　祝福と共に、ロロリーはガクリと崩れ落ちた。

　今度こそ精根尽き果て、へたり込みそうになった愛香だが、突然ロロリーが再び目を開いたのを見て、身を強こわ張ばらせた。

「大丈夫、愛香。ボクだよ」

　変身時の主人格であるロエルが気を失ったことで、もう一つの人格が目を覚ましたのだ。

「あんた……リルナなの？」

　リルナは、起き上がりもせず、青空を見上げていた。
「一国の姫を、よく思いきり蹴れるもんだ。あの変態女の言う通り、まさに蛮族だな」
「あったりまえでしょ。ちょっとおいたが過ぎたのよ、ロエルは」
　リルナは、ゆっくりと首を振った。
「悪いのはボクなんだ。元々は、姉様がツインテールで、ボクはポニーテールだった……」
　倒れ伏しながらも、ロロリーは……リルナは愛香に真実を語った。
「ボクは姉様と合体したい……もとい力になりたいあまり、合体して力を上増しする要員になったけど、ボクは……ツインテール属性じゃない。ポニーテール属性なんだ」
　あくまで、この世界のツインテールの戦士はロエル。
　リルナは、ロエルの力で合体できるようになったに過ぎないという。
「フェニックスギルディの提案を姉様が受け入れたのは、世界中の人が〝ロロリー〟に憧あこがれて、ツインテールが多くなって……世界からポニーテールがどんどんなくなっていったことをボクが悲しんでいるのを知った、姉様の優しさなんだ。姉様を悪者にしないでおくれよ」
　普段から、リルナとお揃いのサイドポニーにするようになったのも、リルナの意思を汲くみつつも、二人合わさればツインテールになれる……そんな、可愛かわいくも健けな気げな、ロエルの優しさだったのだろう。
「だから、別にそういうのはどうでもいいわよ。どっちも悪人だなんて思っちゃいないし」
　確証の無いことまでロエルを問い詰めて悪かった、と謝る愛あい香

か。

「正直、あたしもわかるわよ……。世の中にツインテールが増えるって……ライバルが増えるってことだし。多分こう言ったらそーじは悲しむけど……あんまり増えて欲しくないかな」

　愛香は苦笑して屈かがみこみ、ロリーのポニーテールを優しく手で掬すくった。

「愛香……」

　リルナが、がたがたと震ふるえながら愛香を見上げた。



「まさかお前も、ボクと結婚したいのか……!?　重婚は駄目だぞ!!」

「……あたしが男に見えるわけ」

　リルナが最後に見たのは、そびえ立つ巨壁が、自らに迫ってくる恐怖の様だった。

◇

　俺たちツインテイルズは死力を振り絞り、貴の三葉ノー・ブル・クラブを退けた。

　直接戦闘は見ていないが、フェニックスギルディのポニーテール属性の反応が消えたのも、トゥアールが確認している。ダーククグラスパーが勝ったんだな。

　どこか憎めないやつだった。最後に袂たもとを分かつことになったのが、少し後味が悪い。

　だがこれで、侵攻価値がないと断じられたこの世界には、もうさらなる強部隊が侵攻してくることもない。今度こそこの世界から、アルティメギルの脅威は去ったんだ。

　主賓として俺たちを招き、城下街まちでのパレードを提案されたが、丁重に断った。

　俺たちはあくまで、強化合宿がてらにこの世界にお呼ばれしただけ。

　この世界の英雄ツインテールは、ロロリーなのだから。

　歓喜に沸く城下街から程離れた平原で、俺たち異世界組と、ロエルとリルナは最後の時間を過ごしていた。

　どことなく、愛香とロエル、リルナが前より仲良くなってるように見えるな。

　まるで、腹を割って話し合った友達みたいだ。
　そうだ……。俺は、あいつとの約束を思いだした。
「トゥアール。イースナにメールを送っても、俺の居場所は知られたりはしないよな？」
「それはありませんが……総そう二じ様、なんでイースナなんかに!?」
　あからさまに警戒するトゥアール。無理もない。
「今回の戦いはあいつに助けられたし、約束は守らないと。メールくれ、ってさ」
「一回送ったらしつこいと思いますよー。あの子、返信以外のメールは初めてでしょうから」
　それはちょっと怖いな……。もうこの世界を出立していたらメールは届かないかもしれないけど、とりあえず送るだけは送っておこう。

　ドレスに身を包んだリルナが、もじもじしながら近づいてきた。
「総二。……あの、やっぱり……行くんだよな」
「ああ。俺たちの世界の戦いは、まだ終わっていないからな」
「そうか。わかった」
　ありがとうは、戦いの後に何度も言われたが……リルナが引き止めるようなことを言ったのは、それ一回きりだった。少し、笑顔が無理をしているように見える。
　そんなリルナに歩み寄ってきた人を見て、俺は驚いた。
　豪ごう奢しゃなマントと甲かっ冑ちゅうを着込んでいたのは、街で出会ったおじいさんだった。
「父様、どうしてこんなところに!?」
「いや儂わし、空が赤かった時、お前たちのすぐ近くでのびておったんだがのう」

そして、リルナの言葉でさらに仰天する。
「父様って……このおじいさん、まさか!?」
「そうだよ。ボクたちのお父様……つまり、この国の国王陛下さ」
国王は、俺の顔を見るなり笑顔になった。
「ふぉふぉふぉ。ああして街を回り、娘たちの定めた法の遵じゅん守しゅを検あらためておったのですが……」
ロエルが、国王へと決意の言葉を告げる。
「……パパ、ごめんね。ツインテール禁止法は廃法にする」
「うむ、そんな気がしておったよ。よく頑張ったのう、二人とも」
自みずからも愛するツインテールの禁止を、国民に周知すべく行あん脚ぎゃするという、もっともつらい役目。その努力がある意味無駄に終わってしまったというのに、国王は気持ちよく笑っていた。
さすが、とてもこんな小さな娘さんたちがいるとは思えないほど、年を重ねている人だ。
俺の心中を察したように、国王は照れながら言う。
「この子たちは、本当に遅くに授かった子たちでのう……」
「んまぁ～それはそれは、お年を召されてからも壮健だったんですねえ」
国王をからかい含み笑いをしたトゥアールが、愛あい香かに小突かれている。
そうか。国王の年齢も、ロエルたちを焦らせる一因だったんだろうな。
早く父を隠居させてあげたいと、背伸びして頑張ったんだろう。
国王は唇くちびるを引き結び、高潔で雄々しい眼まな差ざしを俺に向けた。
「――行かれますか、お若いの」
熟女を愛するという言葉が頭を過よぎったが、俺ははっきりと頷う

(なず)いた。
「ありがとうございますじゃ。何のお礼もできませんで……」
「いえ、俺もこの世界に来て勇気が湧きましたから。ロエルと、リルナのおかげで」
　この先もまだ戦いの続く俺たちには、何よりもかけがえのないものになった。
　期せずして、〝強化合宿〟はちゃんと目的を果たしたんだ。
「ロエルちゃん、どうぞ。私たちがこの世界にいた思い出……トゥアール賞の景品です」
　そう言ってトゥアールは、ロエルに型落ちしたバージョンの仮面ツインテールのマスクを手渡した。姫としての品格が贈り物を無(む)碍(げ)にすることを許さず、ロエルは反応に困っている。
　ロエルはとりあえず国王様にマスクを預け、俺の方へと歩いてきた。
「お兄ちゃん」
　ロエルが、俺のシャツの裾(すそ)を掴(つか)み、上目遣いに見上げる。
「また、(あ)える？」
　……懐かしい言葉だ。
　だから、俺の答えは決まっていた。
「ロエルとリルナがツインテールを愛する限り、きっとまたえる」
　その言葉を初めて俺にかけてくれた人は、今は、俺たちの大切な仲間だから。
　いつかまた、えるはずさ。同じ、ツインテールを愛する仲間として。
「姉様、本当にいいのかい？　いつになるかわからないのに……待てる？」
　リルナが、物分かりの言い姉を逆に心配するように覗き込んだ。

「うん、待てるよ。大切なもの、もらったから。…………あ……蹴った」
　ロエルが、お腹を押さえて幸せそうに微笑ほほえむ。
「えええええええええええええええええええええええええええええ何で、何でこの子なんですか!?　桜チェリーのエレメリアンを倒した子だから、総そう二じ様のチェリーも倒しちゃったんですか!?」
　トゥアールが血けっ涙るいを流しながら、俺にしがみついてきた。慧え理り那なも顔を真まっ赤かにしている。
「……まあ……蹴ったわね、確かに」
　愛あい香かはツッコミを放棄したのかと思ったが、それどころかさらに予期せぬ言葉を重ねた。
　本当、愛香と姉妹の間に、一体何があったんだろう……？
　でも、悲しいお別れにならなくてよかった。俺たちは、笑顔でこの世界を旅立てる。
　スタートゥアールが浮上し、世界の狭はざ間まへと突入する準備に入る。
　窓から眼下を見下ろすと、ゴリラたちが手を振っていた。
　ツインテール禁止法はなくなった。また少しずつ、この世界にもツインテールは戻っていくと思うぞ。
　戦ふ艦ねは空間転移ドライブアウトし、順路へと無事転送された。
「お疲れ様、みんな。すごい夏合宿だったわねえ」
　艦長服の母さんが、シートに倒れ込むように座った俺たちを見て、労ねぎらいの言葉をかける。
「ええ、本当に充実した旅でしたわね」
　こういう時、疲れを顔に覗のぞかせない慧理那が、本当にすごいと思う。
　桜さくら川がわ先生が、慧理那に耳打ちしていた。

「……あの、お嬢様……奥様との約束は……」
「一応……進展はしましたわ。は、裸……で……肌を寄せ合いましたもの……」
「えっ!?　そ、そ、そ、それはどういった……!!」
　妙に慌てた桜川先生が俺に詰め寄ってきたが、くたびれてシートに突(つっ)っ伏(ぷ)しているのを見て、自分も席に戻っていた。それでもまだ何か、俺に言いたそうにしている。
　愛香や慧理那も、シートに突っ伏していた。ロエルたちに心配をかけまいと元気に振る舞っていたが、本当はみんな、残り時間ずっと寝ていたいくらい、へとへとに疲れていたからな。
　今帰れば期日の八月六日までは数日余裕があるから、充分に休養に充てよう。
　窓の外の景色は、極彩色のマーブルに変わっている。
　行きのテンションが帰路では消し飛び、寝て過ごすのは、普通の旅行と変わらないな。
　目を閉じようとしたその時、コックピットの自動ドアが開く音がした。
　全員がこの場に揃っているはずなのに、いったい誰(だれ)だ!?
　皆一斉に振り返り、視線がドアに集中する。
　そこにいたのは──ピンクのドレスの小さな姫。白いリボン……妹のリルナだった。
「リルナ!?」
　驚いて声をかけると、リルナは鼻を鳴らしてそっぽを向いた。
「か、勘違いするなよ。別にボクは総(そう)二(じ)のことなんかどうでもいいんだが、髪を触られたのは事実だ。双子姫のどちらもがその掟(おきて)に背(そむ)くなんて、民に示しがつかないからな」
　そして、ちらちらと俺を窺(うかが)いながら、スカートの前で手を擦(こ

(す)り合わせ始めた。
「父様には、総二たちの世界に行くと言ってきた。……嫁(とつ)ぐとな。全く、いい迷惑だ」
　愛(あい)香(か)と慧(え)理(り)那(な)と桜(さくら)川(がわ)先生は、口を開けたまま固まっている。
　母さんは嬉(うれ)しそうに頬(ほお)に手を当てて、高みの見物だ。
「姉様は次期女王としての未来がある以上、ボクだけでも掟を全うしなければならない」
　リルナは、わざとらしく咳(せき)払(ばら)いをして、俺の目の前まで歩いてきた。
「姉様がいなければ、戦いの役には立てないかもしれないけど……。ボクもツインテイルズになってやる。感謝したまえ」
「いいのかリルナ……。大好きなお姉ちゃんの側(そば)を離れて……」
「キミはボクの夫だ。寂しそうにしていたら、その分甘えさせるくらいの甲(か)斐(い)性(しょう)は持て」
　本当に、素直じゃないなあ。苦笑する俺を見てリルナはむっとし、わざとらしく言う。
「あーあ、この戦(ふ)艦(ね)に乗ったのを今さら後悔してきたなあ。でも、もう引き返せないしなあ」
　それを聞いてそうですか、と笑顔になり、正面の操縦コンソールに向かうトゥアール。
「引き返しまーす。旋回するから少しだけ揺れますよー」
　トゥアールが軽くパネルにタッチすると、言葉通り機体が少し揺れる。
「……待て、普通こういう時は、出発したらもう戻れないんじゃないのかい!?」
　いやだと言っていたのに、引き返すとなった途端、リルナは慌て

始めた。
「できますよ、別にあと数分で帰らないといけないわけじゃないんですから。連れて帰って同棲したいのは私も山々ですけど、本当に総二様のチェリーを倒されると困りますからね～」
「ボク、涙ながらに飛び出してきたんだぞ!?　父様もすごくいい笑顔で『お前は勘当じゃ』って芝居ったらしく見送ってくれたんだぞ!?　今さらあの空気に出戻るなんていやだあああああああああああああああ!!」

　リルナの嘆願も虚むなしく、スタートゥアールは僅わずか数分の家出娘を城まで送り届けに進むのだった――。

エピローグ　真のポニーテール。

　任務を完了し、元の世界へと帰還しようと思っていた矢先。
　開かずの間ならぬ、鳴らずの携帯として厳(おごそ)かな沈黙を守るダークグラスパーの携帯電話から、メールの受信音が鳴った。
「み、見よ！　メガ・ネ！　メールじゃ！」
　待望の恵みの雨を戴(いただ)き、感動のあまり天を仰ぎ続ける民のような面持ちで、自分の携帯電話を見つめるダークグラスパー。
「テイルレッドが、メールをくれたのじゃ!!」
「んまあ、義理堅い子やなあ」
　喜びで気絶しそうなダークグラスパーを祝い、一緒に携帯電話の画面を覗(のぞ)き込むメガ・ネ。
　内容は実に他愛(たわい)のないものだった。
　助けてもらった感謝と、元の世界に帰るが、悪さはするな、と記されている程度。
　絵文字も顔文字もなく、まるで男が書いたような素っ気ないメールだが、敵同士であることを思えばこれでも上等だろう。
「ど、どう返せばよいのじゃ。本文文字数の限界まで、『愛してる』と敷き詰めて……」
「やめえや！　ウチならそんなん来たら音速で受信拒否リストにブチ込むわ!!」
「コピペなどせぬぞ!?　一文字一文字丹精込めて手打ちじゃ!!」
「余計おっかないわ!!」
　メールを見てたっぷりとにやついた後でダークグラスパーは、赤い花粉が跡形もなく消え去り、晴れ渡った青空を見て、感慨深げに呟(つぶや)いた。

「ツインテイルズどもは、元の世界に帰ったか。まったく、何な故ぜこの世界に来ていたのやら」
「この世界は、このままでええんやね？」
「無論じゃ。こんな小さな田舎世界、これ以上は侵攻させるだけ戦力がもったいないわ」
　言い方は尊大だが、貴の三葉ノー・ブル・クラブの暴走を止めたツインテイルズへ感謝しているのだろう。
　この世界は、ダークグラスパーによってあらためて、侵略不要リストに登録された。
　すでに属性力エレメーラの奪われた世界同様、二度とアルティメギルが訪れることはないだろう。
「しかし、フェニックスギルディをここで倒せて僥ぎょう倖こうじゃったな。テイルレッドの世界は、無数のアルティメギル幹部が散った地。奴やっがあの世界を見つけ出しでもすれば、無視できぬ大きさの勢力を築き上げることとなっていたであろう。たとえ、配下の劣化コピーであってもな」
「何やかんやで、激戦地やもんなあ。あそこ」
　では帰るぞ、とごく気軽に言うダークグラスパー。
　帰り支度は不要。この二人にとっては、異世界移動は近所への散歩も同じなのだ。
　メガ・ネが戦闘機形態メガネウインガーに変形しようとしたその時、周囲に反響するようにして声が聞こえてきた。

『なかなか耳寄りな情報を聞いたぜ！』

　一瞬にして二人の顔つきが変わり、臨戦態勢になる。
　忘れもしない、この声は封印したはずのフェニックスギルディの

ものだ。
　ダークグラスパーの目の前に、針の穴ほどの小さな黒点が穿(うが)たれる。
　それは徐々に、米粒大、木の実大と大きさを広げていき、サッカーボールほどの大きさになったところで、縁(ふち)に指がかけられた。
　穴が力任せに強引に広げられ、中から巨大な火の玉が躍り出てくる。
「まあ、別に戦力なんてどうでもいいけどな。俺様は、あのテイルレッドってガキに興味があるんだ。何としてもあいつのいる世界に行きたくなったぜ!!」
　火の粉を吹き散らし現れたのは、やはりフェニックスギルディだった。
「カオシックインフィニットを破っただと!?」
　形無き空間の異相に手をかける不条理を目の当たりにし、ダークグラスパーは言葉を失う。
「所詮、地獄ったって、術者であるてめえの空想の限界は超えられねえ！　本当の地獄に何万回も日帰り旅行してきた俺様にゃあ、あんなもん温(ぬる)すぎるぜ!!」
　腕を構え、ポーズを決めるフェニックスギルディ。
「ぐっ……!!」
　かつてテイルレッドに指摘されたことと、全く同じだった。
　カオシックインフィニット。揺るぎなき心の力が、無限の闇(やみ)をも乗り越える。
　二度も同じ理を以て突破されたとあっては、さすがのダークグラスパーも技の未熟を痛感せざるをえなかった。
「やはり首領様の仰(おっしゃ)る通りであったか……。ならば、封印した

上で二度と復活できぬよう、完全消滅させてくれる!!」
　再びダークネスグレイブを手にする。
　メガ・ネもまた、持ち得る全武装で援護射撃をするつもりだった。
「酷評し（ディスり）はしねえ。なかなかのモンだったぜ！　色々な悪夢を見た。ポニーテールが雨のように降り注いで俺様の身体（からだ）に刺さったり、おばちゃんがポニーテールでピシピシ叩いてきたりよう」
（何、筋肉質のおっさんではなく、おばちゃん!?　何（な）故（ぜ）じゃ──）
　ダークグラスパーは、語り聞かされる軽口に、奇妙な違和感を覚えた。
「最後には足元に、鋭く尖（とが）ったポニーテールの剣山だ。それを足に突き刺して果てなき道を進まなけりゃ、ここへは戻ってこれなかった。険しい道のりだったぜ!!」
　まさに、無間地獄だ。そして言葉通り、フェニックスギルディにとってそんな地獄は日常だったのだろう。
「お返しに、俺様もいいモノを見せてやるぜ。首領の懐刀さんよ!!」
　フェニックスギルディは、皮肉交じりにそう言い捨てた。
「ドラグギルディ、倒されちまったんだってな……。あいつもいいところまで行ってたんだ、部隊だ部下だのに構いすぎないでもっともっと自分を鍛えてりゃ、いつか辿（たど）りついたかもしれねえのに！」
「りつく？　どこにじゃ」
　その問いには答えず、フェニックスギルディは不敵な笑みを浮かべた。
「別に俺様は、不死身だから厄（ウ）介（ザ）がられてたんじゃねえ。もっと

すげえ能力の奴やつなんざ、まだまだいる」
　言われてみれば、それは確かにそうだった。
　ダークグラスパーが知る上級幹部には、神がかった力を秘めたエレメリアンも存在する。
「エレメリアンの終着──究極の最終闘体へただ一人到達したからこそ、俺様は最強のエレメリアンと恐れられたんだよ」
　フェニックスギルディが吠ほえると同時、平和の訪れた青空が、極大の炎によって貫かれた。
　立ち昇った炎は螺ら旋せんを描いて収束し、繭まゆ状にフェニックスギルディを取り巻いていった。
　新生を象徴するかのように、繭がひび割れ、砕ける──。
　なぜ首領が持て余しつつも、完全消滅ではなく、封印にとどめておいたたのか。
　その本当の理由が……フェニックスギルディの真価が、今詳つまびらかになった。
「────貴様。その姿は……」
　ダークグラスパーの声が、驚きょう愕がくに震ふるえる。
「エレメリアンは人間の属性力エレメーラから生まれた生命体。その身を、心を極限まで鍛え上げた先は────これしかねえッ!!」
　砕けた繭からあふれ出て、立ち込める轟ごう炎えん。
　それをまるで薄うす靄もやのように難なく肩で切り、現れたその全ぜん貌ぼう。
　炎を水着のように素肌の要所にまとわせた、弾はじけるような生気に満ちた肢し体たい。
　唯ゆい我が独どく尊そんを体現した大きな吊つり目。微笑に歪ゆがみながらなお美しさを損なわない、整った唇くちびる。
　翼も、棘とげも、角も。生物が外敵への威い嚇かくと恃たのむ要素は、

何もかも消し飛んでしまった。
　だが、そんなものは飾りに過ぎなかったのだ。
　太陽炎ほのおとたなびくポニーテールが、世界の全てを絶する最強の証。
　それを誇るは、紛れもなく、人間の少女だった。
「に、人間だと⁉」
　愕然とするダークグラスパーへ、彼女は己の真の姿を高らかに謳うたい上げる。
「そう。俺様のこの姿が、真の不死鳥ポニーテールだ‼」
　そして、顕けん現げんした自らの美び貌ぼうを誇るかのように天を見上げた。
「これであいつも俺様に惚れるだろうぜ。どうも、男同士の愛だって誤解してたみてえだし」
　炎を押し固めたような紅あかい髪巻きシュシュに手で触れながら、少女は自信たっぷりに断言する。
「何を貴の三葉ノー・ブル・クラブの連中のようなことを言っておる！　あんな可愛かわいい幼な子を捕まえて‼」
「あー、そういやお前、知らねえんだったな。……わかった、教えてやるよ。その方があいつのためだ」
　やれやれと嘆息し、フェニックスギルディは悪いた戯ずらっぽく言った。
「テイルレッドの正体は、男だ。男おとこの娘ことか女装とかじゃねえ、正真正銘の男だよ。俺様には認識の攪かく乱らんなんてコスい真ま似ねは通用しねえからな、あいつの正体が見えるのさ‼」
　重ねて襲う衝撃に、ダークグラスパーは目を丸くした。

「…………………………………何じゃと？」

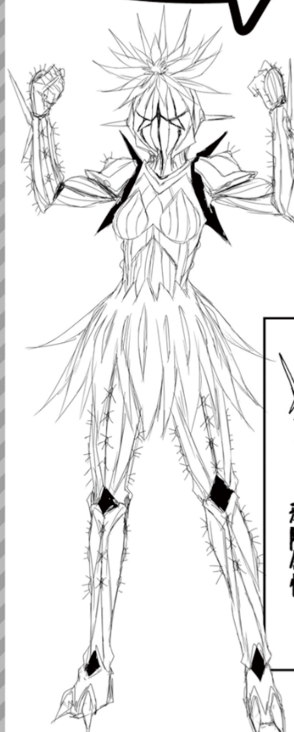
　大事に握っていた携帯電話が……ダークグラスパーの手から、滑り落ちた。

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.004
カクタスギルディ

水沢夢の選んだポイント

今回は植物エレメリアンを狙い目として募集していました。サボテンは比較的メジャーな植物ですが、設定の方の邪険属性の属性玉発動効果が面白かったことがポイントでした。次巻以降、どう使われるかをお楽しみに。なるべく英語表記の名前にしているので、本編ではカクタスギルディとして登場しています。あと、女性部隊ということで、カクタスギルディも一部膨らみが増えたりしていますが、愛香さんはこの応募状態のフラットボディでいて欲しかったと思ったに違いありません。





応募のポイント

今回は「属性玉」としてどう使えるかという設定を書いてくれたことがポイントでした。出オチ、一発勝負、ニッチな属性の応募大歓迎です。引き続き、どしどしご応募ください!

埼玉県・Y・Hさん（19歳）の作品

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ **〒101-8001東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館**
ガガガ文庫編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

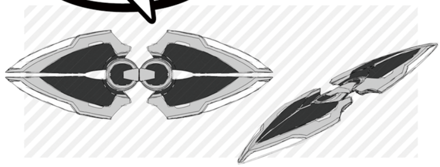
メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

テイルギア設定資料 06

プログレスバレッター

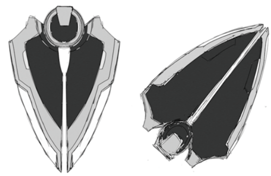


テイルギアのツインテール属性の変換・流動システムに干渉することで、「攻撃特化」と「速度特化」の二極集中進化をもたらす強化装備。そのため常時安定稼働は放棄され、強化形態の連続稼働限界は22秒。最悪の場合、テイルギアの暴走（オーバーロード）でツインテールもろとも装着者が爆発してしまう危険性さえある。ハイリスクハイリターンな装備だがその力は絶大で、属性力の変換効率も上昇し、最大出力時には過剰出力されたツインテール属性が全身から粒子状に拡散放射される。

最強のツインテール属性を持ち、かつトゥアールのツインテール属性をコアにしたテイルギアをまとっているテイルレッド・観束総二にのみ使用可能。
状況に応じて、四つのモードに変形する。

❶プログレスモード

中心から二つに分割し、レッドのフォースリヴォンに合体することで、進化を促す。
ライザーチェインはリヴォンの上側、フォーラーチェインは下側に合体する。



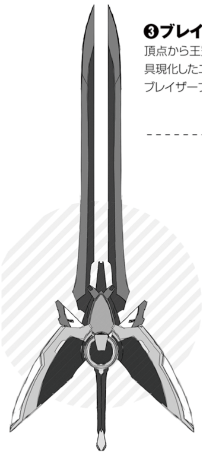
❷シールドモード

分割していない、取り出し時のベースの状態。チェインカスタムの際この状態に戻して左腕に装着することで、小型の盾にもなる。



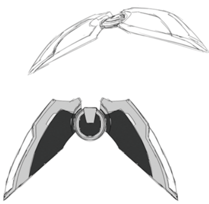
❸ブレイドマイティモード

頂点から王冠型に割れ、左右のリヴォンから同時に具現化した二刀のブレイザーブレイドの柄に合体し、ブレイザーブレイドツインへとパワーアップさせる。



❹スラッシュモード

ブレイドマイティモードからさらに角度をつけて投げ放つことで、炎の刃をまとった二対のブーメランとなる。

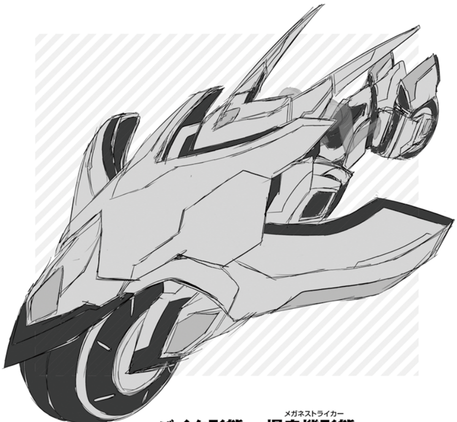


グラスギア設定資料 02

MEGA NEPTUNE MARK-Ⅱ

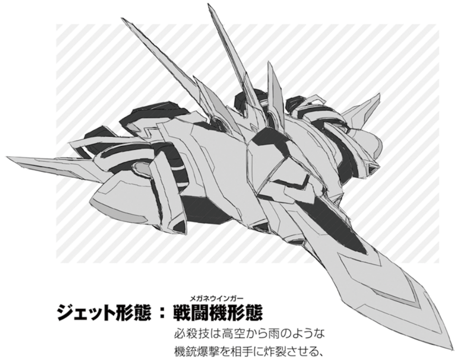
メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱ 変形機構

メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱはバイク形態・ジェット形態への変形を可能とし、陸空問わずダークグラスパーの戦いをサポートする。



バイク形態：爆走機形態（メガネストライカー）

必殺技は最大加速状態から容赦無く相手に体当たりする、ブロウクン・メガネ。



ジェット形態：戦闘機形態（メガネウインガー）

必殺技は高空から雨のような機銃爆撃を相手に炸裂させる、デモリション・メガネ。

あとツインテールがき

　こういう時に限ってあとがきスペースが少ないのですが……皆様、帯はご覧になっていただけましたでしょうか？　思い思いのベタな驚きリアクションのご用意をお願いします。

　そう、「俺、ツインテールになります。」アニメ化企画進行中です!!

　情報は今後様々な媒体で随時公開されていくと思いますので、続報をお楽しみに！

　というわけで今回は、バトルもたっぷりでこれまでの総決算を目指しました。

　レギュラー属性となったポニーテールともども、次回から新展開です！

　謝辞です。イラストの春日(かすが)さん。この重大発表の巻を入魂のイラストで最高に盛り上げてくださり、本当にありがとうございます！　特に映画のポスターのような巻頭カラーイラストを見た時は、子供のようにワクワクしてしまいました！

　担当の濱田(はまだ)さん。打ち合わせ・初稿・改稿など含めこの二〇か月で五桁(けた)に及ぶ「ツインテール」というワードを目にしたと思いますが、ついに恩返しができそうです！

　畑健二郎(はたけんじろう)先生！　受賞時の講評でいただいた激励どおり、ついにアニメ化ですよ！

　今回も、完成と出版に携わってくださった全ての皆様……そして！　ここまで応援してくださった全ての読者の皆様に、感謝とツインテールを!!

　これからも全力でツインテーるので、よろしくお願いします!!

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家（たまに書き忘れる）。節目の五巻ということで、今回は色々と総決算です。総二たちのツインテールな物語を、今後ともよろしくお願いします！
作中は夏休みかぁ。さーて、僕は雪かきだぁ……。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。５

２０１３年12月27日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　濱田廣幸

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１３年12月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451454-4